

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D2MED-DCAM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687180-1) 医科学概論 Introduction to Medicine	科目区分 共通科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D2・MED	DP・提供部局 DCA・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 隈元 謙介	関連授業科目 医科学特論		
	履修推奨科目 医科学特論		
学習時間 講義・演習90分 × 15回 + 自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 医学の目的は、生命現象の謎にせまり、その基本原理の理解に基づき、病気の発症機序を解明し診断法や治療法を発展させることである。医学系大学院で研究を始めるにあたり、医学系研究者としての基盤知識や研究に対する姿勢について、オムニバス方式で講義を行う。また実践的研究手法の授業として、代表的研究手法をテーマに講義・演習・実技指導を行う。			
授業の目的 医学研究の意義の理解と研究のための基本的手技を修得する。((DPの「専門知識・理解」及び「倫理観・社会的責任」に対応))			
到達目標 学生は、医学研究の意義の理解と研究のための基本的手技を修得できる。			
成績評価の方法 授業への取り組み状況50%とレポート提出等50%で総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画(大学院ガイドにて確認すること) 1回 大学院とは・研究者倫理(隈元) 2回 実験動物に関する教育訓練(星野・伊藤) 3回 動物実験施設の役割と実験動物利用の倫理(星野・伊藤) 4回 大学院の国際競争・化学物質の適切な取扱いについて(門田・和田) 5回 機器共用デジタルラボ施設の役割とその利用(中北) 6回 機器共用デジタルラボ施設の役割とその利用(中北) 7回 RIの特徴と研究への利用(星野・西本) 8回 医療情報学(横井) 9回 図書館情報と研究(図書館分館長) 10回 図書館情報と研究(図書館分館長) 11回～15回 以下の実技指導セミナーのうち一つを選択科目として受講する 【実技指導セミナー】 ・STEREOLOGYによる形態計測 ・病態解析用モデル動物の作成と利用 ・細胞のイオン輸送をリアルタイムで定量するーパッチクランプ法ー ・siRNAによるノックダウン ・HPLCの臨床応用・近赤外分光法の臨床応用 ・近赤外分光法の臨床応用 ・発現系を用いた膜蛋白質の機能解析 ・脂質代謝酵素の性状解析 ・3次元分子モデリングの手法を用いたタンパク質・リガンド相互作用の解析 ・体液組成の解析 ・医療機器開発/microRNAの解析方法 ・CD-DST法による抗がん剤感受性試験 ・糖尿病網膜症の分子メカニズム ・細胞への遺伝子導入法 ・フローサイトメトリーの原理と実際			

2026 医学系研究科

- ・生物統計学への招待
- ・塩基配列解析

【授業及び学修の方法】

講義、演習と実験実習で行われる。対面講義に出席できない場合、または英語教材を希望する場合はオンデマンド受講の利用が可能。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

講義内容の自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

教科書・参考書等

教科書・参考書 特別には定めないが、担当教員が適宜紹介する。

オフィスアワー

担当教員と直接アポイントメントを取ること。または副研究科長のオフィスアワーを利用することもできる。オフィスアワーは金曜日16時から17時。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

○講義に出席できない場合、または英語教材を希望する場合はオンデマンド受講の利用が可能。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687192-1) 発達神経科学 Developmental neuroscience	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 日下 隆, 鈴木 辰吾, 三木 崇範	関連授業科目 周産期の脳発達と子供の健康 履修推奨科目 周産期の脳発達と子供の健康		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 神経系を構成する基本単位は、神経細胞 neuronと神経膠（グリア）細胞 glial cellである。これらの細胞が神経系の機能を司るとともに、これらの細胞の相互作用 interactionも機能の発現に重要な役割を果たしている。神経化学は神経系の働きを化学の視点から捉えようとするものである。 そこで、神経系の構造をマクロからミクロのレベルまでについて指導を行う。特に、神経化学においては、情報伝達の場合となるシナプスの微細構造と、情報伝達される過程の分子機構を理解することは大変重要であるため、これについても講義を行う。また、古典的神経伝達物質に加えて神経栄養因子などについて最新の知見をふまえた授業を行う。あわせて、シナプスの可塑性にわる分子機構・分子基盤に関しての知識を指導を行う。これらを通して、神経系の作用や機能を化学物質のダイナミックな動きとして概観できる神経化学の知識を提供する。さらに、神経化学的観点から疾患の原因や治療法についての指導もこれらに加える。			
授業の目的 神経系の構造をマクロレベル・ミクロレベルで理解し、神経伝達の場合となるシナプスの微細構造と、神経伝達メカニズムの分子機構を理解する。更に、神経機能・神経細胞ーグリア細胞相関に関与する神経伝達物質・サイトカイン・神経栄養因子などについての分子基盤を理解することを目的とする。			
到達目標 脳の構造と機能等を理解し、研究等に応用できる。(ABX) 神経系の構造と機能等を理解し、研究等に応用できる。(ABX) 神経細胞の機能等を理解し、研究等に応用できる。(ABX) 上記目標のすべてはDP「A:専門知識・理解」「B:研究能力・応用力」に対応している。			
成績評価の方法 大学院では自ら研究を行い、結果を出すことが必須である。期末テストは行わない。 成績は、研究内容を具体的に記載したレポートから習熟度を複数の教員で判断し、レポートのみ(100%)で判定する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。 *成績評価にあたり、学生に不利益が生じない策(レポートや補習授業等)を講じる。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第 1 回 神経系の構造 1 基本構造 第 2 回 神経系の構造 2 大脳と辺縁系 第 3 回 神経系の構造 3 小脳と脳幹、伝導路 第 4 回 神経系の構造 4 末梢神経 第 5 回 小児の脳科学 小児の脳の構造 第 6 回 小児の脳科学 ストレスと脳の発達 第 7 回 小児の脳科学 小児の脳と病態 1 第 8 回 小児の脳科学 小児の脳と病態 2 第 9 回 神経機能の分子基盤 1 神経細胞とシナプス 第 10 回 神経機能の分子基盤 2 神経回路 第 11 回 神経機能と栄養因子 1 栄養因子総論 第 12 回 神経機能と栄養因子 2 神経細胞と栄養因子 第 13 回 神経機能と栄養因子 3 脳機能と栄養因子 第 14 回 神経機能と栄養因子 4 シグナル伝達系 第 15 回 神経機能と栄養因子 5 栄養因子の最新研究 1 第 16 回 神経機能と栄養因子 6 栄養因子の最新研究 2			

2026 医学系研究科

- 第 17回 神経機能と神経薬理学 1 ; 小児神経発達概論 1
- 第 18回 神経機能と神経薬理学 2 ; 小児神経発達概論 2
- 第 19回 神経機能と神経薬理学 3 ; 小児神経発達と脳機能の獲得 1
- 第 20回 神経機能と神経薬理学 4 ; 小児神経発達と脳機能の獲得 2
- 第 21回 神経機能と神経薬理学 5 ; 小児神経発達とストレス 1
- 第 22回 神経機能と神経薬理学 6 ; 小児神経発達とストレス 2
- 第 23回 神経機能と神経薬理学 6 ; 小児神経発達と治療 1
- 第 24回 神経機能と神経薬理学 6 ; 小児神経発達と治療 2
- 第 25回 神経機能と神経薬理学 6 ; 小児神経発達と薬剤 1
- 第 26回 神経機能と神経薬理学 6 ; 小児神経発達と薬剤 2
- 第 27回 神経の可塑的变化の分子基盤 1
- 第 28回 神経の可塑的变化の分子基盤 2
- 第 29回 神経の可塑的变化の分子基盤 3
- 第 30回 まとめ 化学物質で統合される脳機能

授業及び学習の方法

講義は対面形式を基本とするが事情に応じて遠隔授業も可

[自学自習のためのアドヴァイス]

講義に臨む前に予習（各回2時間程度の事前学習）をしてきちんと講義についてくること（実際雑誌に掲載されている論文を読むことが求められ、一編につき2時間程度の時間は必要）。そして、その得た知識を基にして、さらに論文等でその研究テーマを発展的に調べた後、興味あるテーマで正確に実験できるようノートに記載するなどして整理すると効率よく身に付きます（各回2時間程度の事後学習）。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

事前学習と復習を行うことにより、講義から得られた知識を自分の知識へと確実に昇華させること。そして、その知識を元に、専門的な論文や書籍を読み、知識を深めること。

自学自習（準備学習 60時間 + 事後学習 60時間）

教科書・参考書等

脳神経科学 イラストレイテッド 森寿ら編 羊土社

Volpe's Neurology of the Newborn、Elsevier; 6版

分子生物学 講義中継 Part 1 - 3 井出 利憲著 羊土社

分子脳神経機能解剖学 遠山 正彌 金芳堂

適宜文献を紹介する

オフィスアワー

毎週月曜日の17時から18時を基本とし、事前連絡を必ずすること。

研究室は基礎臨床研究棟5Fの神経機能形態学教室および2Fの小児科学教室。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D4MED-BACM-20-Ex 授業科目名 (講義コード:L687601-1) 課題研究 Research Subject	科目区分 研究科目	時間割 前期集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D4・MED	DP・提供部局 BAC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 20
	授業形態 Ex	単位数 8	
担当教員名 隈元 謙介	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 演習+実験・実習			
授業の概要 教員は、学生が各自で研究テーマを立案し、その遂行を通じて実験結果を得たうえで、データ分析や論文作成の方法を身につけられるよう指導する。個別指導を中心に、演習、実験・実習などを総合的に行います。			
授業の目的 研究の立案から分析、論文を作成する方法を独力で行うことが出来る能力を修得する。(DPのABCに対応)			
到達目標 研究課題を明確にしたうえで、研究計画を精練化させて、適切に研究を実施し、データの分析や論文を作成する方法を身につける			
成績評価の方法 個々の状況を鑑みた総合評価。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 博士課程の後半(配当年次は3、4年次の通年・8単位)において、指導教員と相談の上、定められた年限で博士過程が修了できるように、計画性を以て指導が行われる。 授業計画として、60回分の授業・演習を充当する。 授業及び学習の方法:論文研究やその他の研究活動に必要な知識と技術を習得するための授業である。研究テーマの設定、研究計画の立案と修正、研究の実施、結果の分析、考察の各プロセスについて指導教員が講義と演習を行う。研究の進行度や状況を鑑み、適切な指導を行う。			
教科書・参考書等 特別には定めない。それぞれの指導教員より指示を受けること。			
オフィスアワー 指導教員によりオフィスアワーは異なるため示すことができない。指導教員に照会すること。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 特になし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D2MED-BADM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687181-1) 医科学特論 Special Lecture on Medical Science	科目区分 共通科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D2・MED	DP・提供部局 BAD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 2	
担当教員名 隈元 謙介	関連授業科目 医科学概論		
	履修推奨科目 医科学概論		
学習時間 講義・演習90分×15回(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 本科目は大学院博士課程の共通科目として開講され、教授は、医学研究の基本的ストラテジーを幅広い研究領域でカバーして医科学特論授業を行う(研究ストラテジー講義、基礎研究・橋渡し研究・臨床研究の演習及び実習)。そのストラテジーを実践する具体的研究手法として講義・演習・実技指導セミナーを行う。			
授業の目的 研究目的に合致した手法やその実践法との関連性を理解し、実研究に役立つ速戦的知識や研究手法を修得する。			
到達目標 1. 医学研究の基本的ストラテジーを幅広い研究領域で理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 2. ストラテジーを実践する具体的研究手法を適切に提示できる。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 授業への取り組み状況50%とレポート提出等50%で総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回 神経病理学の基礎と最前線：剖検脳診断と動物・細胞モデルによる病態解析 (千葉) 2回 自然免疫受容体による樹状細胞活性化メカニズムの解析 (星野) 3回 外的ストレスに応答する腸内細菌叢の可塑性 (桑原) 4回 Biology of the skin (大日) 5回 網膜再生医療の実用化と「折り紙」着想小型ロボット手術 (中野) 6回 肝細胞癌の病因・病態 (藤田) 7回 臨床腫瘍学・がんゲノム医療学総論 (辻・奥山) 8回 感染症疫学に学ぶ臨床研究の発想と構築 (横田) 9回 オンデマンド講義を受講 10回 オンデマンド講義を受講 11～15回 以下の実技指導セミナーのひとつを選択科目として受講する 【実技指導セミナー】 ・ STEREOLOGYによる形態計測 ・ 病態解析用モデル動物の作成と利用 ・ 細胞のイオン輸送をリアルタイムで定量するーパッチクランプ法ー ・ siRNAによるノックダウン ・ HPLCの臨床応用・近赤外分光法の臨床応用 ・ 近赤外分光法の臨床応用 ・ 発現系を用いた膜蛋白質の機能解析 ・ 脂質代謝酵素の性状解析 ・ 3次元分子モデリングの手法を用いたタンパク質・リガンド相互作用の解析 ・ 体液組成の解析 ・ 医療機器開発/microRNAの解析方法 ・ CD-DST法による抗がん剤感受性試験 ・ 糖尿病網膜症の分子メカニズム ・ 細胞への遺伝子導入法 ・ フローサイトメトリーの原理と実際			

2026 医学系研究科

- ・生物統計学への招待
- ・塩基配列解析

【授業及び学修の方法】

講義、演習と実験実習で行われる。講義に出席できない場合、または英語教材を希望する場合はオンデマンド受講の利用が可能。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

事前に関連事項について予習しておくとともに、関連する最新の論文を調べる。30時間各課題について、その要点をレポートにまとめる。30時間

教科書・参考書等

担当教員が適宜紹介する。

オフィスアワー

担当教員と直接アポイントメントを取ること。または副研究科長のオフィスアワーを利用することもできる。オフィスアワーは金曜日16時から17時。それ以外でも在室時に随時対応できるが、念のためメール連絡を行うこと。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

- 講義に出席できない場合、または英語教材を希望する場合はオンデマンド受講の利用が可能。
- 看護学専攻（博士後期課程）の履修者は選択必修科目とする。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D2MED-ABDM-40-Lx 授業科目名 (講義コード: L687182-1) 希少糖科学特論 Rare sugar	科目区分 共通科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D2・MED	DP・提供部局 ABD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 隈元 謙介	関連授業科目 医科学特論		
	履修推奨科目 医科学特論		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 希少糖は自然界に微量にしか存在しない単糖（およびその誘導体）として定義される。存在量は少ないが、種類は50種類以上と多い。香川大学の何森教授らはこの希少糖を40年前から研究し、果糖からD-アルロース（D-プシコース）を大量生産する酵素を発見した。そして最終的に「イズモリング」と呼ばれる希少糖生産戦略図の完成に至る。希少糖の大量生産により、昆虫、植物、動物、ヒトなどを対象とした機能解析が進んだ。さらに、それら希少糖の機能を応用し、食品、農薬、医薬品を初めとして、幅広い機能が期待されている。 教授は、希少糖の生い立ちから、その生産、機能および応用について講義することを通して、香川県が世界の希少糖拠点となっている現状を紹介する。希少糖が地域の活性化にどのように役立つか、特に地域の健康（生活習慣病予防）への貢献の可能性についても講義する。			
授業の目的 「希少糖」はなぜ香川で生まれたのか、希少糖の諸性質・諸機能について知る。また産学官連携による希少糖産業の振興について、香川県内、日本国内さらに世界でどのような趨勢であるかを知る。そして希少糖の未来、今後の展開について考える。 1. 希少糖とは何か、そしてなぜ香川大学で生まれたか。 2. 希少糖の基礎研究から応用研究の現状についての知識を得る。 3. 産学官連携プロジェクトとしての希少糖プロジェクトについて学習する。 4. 希少糖の未来への展開・展望を考える。			
到達目標 1、希少糖の意味について概説できる。（DPの「専門知識・理解」に対応） 2、希少糖の臨床応用に関して概説できる（DPの「研究能力・応用力」に対応） 3、産学官連携について概説できる（DPの「グローバルマインド」に対応）			
成績評価の方法 レポート（100%）で評価する。自主的な学習を求める。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (1) 希少糖とは、希少糖の生産、イズモリング（何森） (2) 希少糖科学特論（秋光） (3) 希少糖の食品利用（小川） (4) 希少糖の産学連携とイノベーション（松谷化学・山田） (5) 希少糖の健康機能（徳田） (6) 希少糖を用いた腹膜透析液の開発（南野） (7) D-allloseの抗腫瘍効果（星川） (8) 生活習慣病における希少糖の臨床応用（村尾） その他関連の論文や総説を提供し読んでもらい、与えられたテーマでレポートを作成する。 希少糖に関するイベントに参加することも紹介する。 【授業及び学習の方法】 オンデマンド形式で行う。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 授業テーマに沿って自学自習を行うこと（準備学習 15時間 + 事後学習 15時間）			
教科書・参考書等 【教科書】			

2026 医学系研究科

特に定めない

【参考書】

・希少糖秘話（何森健著）

出版社：株式会社希少糖生産技術研究所；初版（2013/1/1）

発売日：2013/1/1

新書：208ページ

ISBN-10：4990683900

・香川発希少糖の軌跡（松崎隆司著）

出版社：日経BP（2015/12/11）

発売日：2015/12/11

言語：日本語

単行本：210ページ

ISBN-10：4822220842

オフィスアワー

担当教員と直接アポイントメントを取ること。または副研究科長のオフィスアワーを利用することもできる。オフィスアワーは金曜日16時から17時。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

医学専攻必修。他専攻からの履修も認める

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D2MED-CBAM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687183-1) 研究・生命倫理 Research and bioethics	科目区分 共通科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D2・MED	DP・提供部局 CBA・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 隈元 謙介	関連授業科目 医科学概論、医科学特論		
	履修推奨科目 医科学特論(トランスレーショナル・リサーチの実際)		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 生命科学や医学研究に必要な倫理教育(APRIN e-ラーニングプログラムの活用及び倫理委員会の教育訓練含む)を講義形式(講演会形式を含む)で定期的に行う。			
授業の目的 研究の医学的意義が認められるためには、研究倫理・生命倫理が担保されていることが基本となる。研究の根幹となる研究倫理・生命倫理に対する十分な理解と見識を深めることを目標とする。また、本授業では大学院生が生命科学研究に求められる倫理観を保ちながら継続的に研究規範を遵守することができるよう講義やe-ラーニング講習を行う。(CB)			
到達目標 研究の根幹となる倫理性に対する十分な理解と見識を深めることができる (C, B)。 定期的に講演会等に参加し、倫理意識・規範を継続的に持つことができる (C, B)。			
成績評価の方法 授業への取り組み状況により総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業及び学習の方法 講義形式(一部講演会への出席で充当)で行われる。 授業計画 研究・倫理教育は大学院課程のみならず、医学研究にあたる全ての研究者にとって重要な項目であることから、香川大学医学部倫理委員会が主催となって、セミナー、e-Learningによる教育訓練(APRIN e-learningプログラムの活用含む)、講演会(年間3-4回)定期的に開催している。これらにも参加して、継続的に倫理意識の向上に努められるプログラムを用意している。また、大学院の共通科目の医科学概論や医科学特論でも研究・生命倫理を扱っている。 1) 倫理委員会主催の講演会(年間4回以上開催予定) 4コマ 2) 倫理委員会主催の講演会(年間4回以上開催予定) 3) 倫理委員会主催の講演会(年間4回以上開催予定) 4) 倫理委員会主催の講演会(年間4回以上開催予定) 5) APRIN e-learningプログラム受講 4コマ(充当) 6) APRIN e-learningプログラム受講 7) APRIN e-learningプログラム受講 8) APRIN e-learningプログラム受講 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 授業の資料を熟読することによる自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
教科書・参考書等 教科書・参考書特別には定めないが、担当教員が適宜紹介する。			
オフィスアワー 担当教員と直接アポイントメントを取ること。あるいは、副研究科長のオフィスアワーを利用することもできる。 オフィスアワーは金曜日の16:00~17:00。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 講演会の開催告知のアナウンスに留意すること。			
教員の実務経験との関連 本講義は、研究・大学院担当副医学部長が担当する。			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687195-1) 神経細胞生物学特論 Molecular Neurobiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 高橋 弘雄・山本 融	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 知の座である脳の機能を担っている神経細胞には、長大な樹状突起や軸索を有すること・電気的な興奮性が極めて高いこと・他の神経細胞群とシナプス結合を形成することなどの、他の臓器・組織を構成する細胞群には見られない顕著な形態的・機能的特徴が存在する。本特論では、こうした神経細胞の特徴的な機能を実現させている分子の実態とその制御機構について講述する。さらに、このような知見が得られるに至った過程について実際の実験事実に基づいて理解するとともに、最新の知見を自ら把握する力を育む。			
授業の目的 1. 神経細胞の形態・機能的な特徴とその生理的意義を理解する。 2. 神経細胞に認められる顕著な特徴について、それを可能としているメカニズムを分子レベルで理解する。 3. 神経系の細胞レベルでの機能解析がどのように進められているかを理解する。 4. 上記の理解に基づいて論文等の内容を正しく把握し、紹介する。			
到達目標 1. 神経細胞の形態・機能的な特徴とその生理的意義を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 神経細胞に認められる顕著な特徴について、それを可能としているメカニズムを分子レベルで説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 神経系の細胞レベルでの機能解析がどのように進められているかを理解できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 4. 上記の理解に基づいて論文等の内容を正しく把握し、紹介することができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 口頭等による試問により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 細胞生物学・総論 ①:細胞の成り立ち 第2回 細胞生物学・総論 ②:細胞骨格と極性 第3回 細胞生物学・総論 ③:細胞内膜系 第4回 神経細胞の形態と機能 ①:解剖学的な特徴と機能 第5回 神経細胞の形態と機能 ②:樹状突起の構造的特徴と分子基盤 第6回 神経細胞の形態と機能 ②:軸索の構造的特徴と分子基盤 第7回 小胞輸送・高速軸索輸送とその制御 ①:輸送小胞の発芽と融合 第8回 小胞輸送・高速軸索輸送とその制御 ②:微小管の形成と修飾 第9回 小胞輸送・高速軸索輸送とその制御 ③:分子モーターの構造的特徴と機能制御 第10回 イオンチャンネルの構造と機能 ①:膜貫通型タンパク質の特徴と細胞内輸送 第11回 イオンチャンネルの構造と機能 ②:イオン選択性と電位依存性の分子基盤 第12回 神経の興奮と伝達 ①:静止膜電位の形成 第13回 神経の興奮と伝達 ②:活動電位の生成と伝達 第14回 神経の興奮と伝達 ③:神経細胞の興奮性と軸索起始部 第15回 シナプス伝達と伝達物質 ①:興奮性シナプスの構造と受容体 第16回 シナプス伝達と伝達物質 ②:興奮性シナプス受容体の発現と活性制御 第17回 シナプス伝達と伝達物質 ③:抑制性シナプスの構造と受容体 第18回 シナプス伝達と伝達物質 ④:抑制性シナプス受容体の発現と活性制御			

2026 医学系研究科

- 第19回 シナプス伝達と伝達物質 ⑤：興奮性・抑制性シナプス作用の統合
第20回 神経・筋節部の構造と機能
第21回 シナプスの形成と維持の分子機構 ①：シナプス形成活性化因子とシナプス形成抑制因子
第22回 シナプスの形成と維持の分子機構 ②：興奮性シナプス形成・維持機構とその制御
第23回 シナプスの形成と維持の分子機構 ③：抑制性シナプス形成・維持機構とその制御
第24回 シナプスの形成と維持の分子機構 ④：シナプスの刈り込みと可塑性
第25回 シナプスの形成と維持の分子機構 ⑤：人工シナプス形成活性化因子による人為的シナプス形成制御の
試み
第26回 神経細胞の保護と神経細胞死 ①：細胞死とその抑制の分子機構
第27回 神経細胞の保護と神経細胞死 ②：神経栄養因子と神経保護
第28回 神経細胞の保護と神経細胞死 ③：神経細胞死の共通機構
第29回 神経機能の障害と疾患 ①：精神神経疾患と興奮・抑制バランス
第30回 神経機能の障害と疾患 ②：神経変性とその抑止

授業及び学習の方法：上記の内容を中心とした講義・試問および演習による。

この科目は基本的に対面で行います。なお、状況によっては授業形態の一部または全てを遠隔ないしはオンデマンドに変更する可能性があります。

【自学自習のためのアドバイス】

各回1時間程度、講義資料を中心に講義・演習の該当範囲を参考書等で確認すると良いでしょう。

教科書・参考書等

特に定めませんが、下記参考書記載の図版を随時利用する。

- ・Molecular Biology of the Cell (Garland Science)
- ・Principles of Neural Science (McGraw-Hill)

オフィスアワー

月曜日・17:00-18:00

これ以外でも随時受け付けるので、講義棟3Fの居室へ気軽に立ち寄りたい。なお、不在の場合も多いので、あらかじめ在室をメール (yamamoto.toru@kagawa-u.ac.jp) で確認されると確実である。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業は日本語にておこないます。

教員の実務経験との関連

研究業績はresearchmap (https://researchmap.jp/Tohru_Yamamoto) を参照されたい。なお、香大HP (カダイラボ) に研究成果の一部が紹介されている (<https://www.kagawa-u.ac.jp/kadailab/22025/18695/>) 。

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687196-1) 神経生理学 An Introduction to Neurophysiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 藤村 篤史・神鳥 和代	関連授業科目 特になし		
	履修推奨科目 特になし		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 本講義では、学生の皆さんは中枢神経系と末梢神経系の仕組みを学び、それらが関連するさまざまな生命現象とそれに関連する病態を理解することを目指します。神経細胞の基本原則から、運動機能や感覚受容の仕組みについて学習するほか、高次脳機能までを取り扱います。臨床医学を実践する際に明確な根拠を持って思考するために、なぜ神経生理学の基礎的事項を学ぶ必要があるのかという点を、様々な角度から懇切丁寧に担当教員が講義します。受講に際しては、単なる知識のインプットだけでなく、得た知識をアウトプットする習慣をつけてもらいたいと思います。			
授業の目的 中枢神経系と末梢神経系を体系的に理解するとともに、それらの変調がどのような病態をもたらしているのかということまでを踏み込んで学びます。			
到達目標 1. 生命の成り立ちを理解するとともに細胞内部の構築と機能を説明することができる。 2. 生命現象に必要な細胞内外の物質の輸送機構を説明することができる。 3. 興奮性膜における活動電位の発生機構とその伝播機構につき説明することができる。 4. 筋肉の構造と収縮の機構を説明することができる。 5. 細胞内情報伝達機構の種類とその各々の概略を説明することができる。 6. 統合的情報処理機構としての中枢神経系の構造と機能を説明することができる。 7. 運動調節に関与する中枢神経系とその機能分担を説明することができる。 8. 自律機能や本能行動を司る脳の働きを説明することができる。 9. 学習や記憶に関わる脳の働きを理解し、その分子機構について説明することができる。 10. 感覚(特殊感覚と体性感覚)の中枢機構と分子メカニズムを説明することができる。 (1~10までDP「専門知識・理解」に対応) 11. 生理学の知見を基に、疾患について関連付けて説明することができる。 (DP「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 神経生理学の全講義数の3分の2以上出席し、かつ、各回の講義に関するレポート(*)を提出した場合にのみ、神経生理学試験(本試験、再試験)の受験資格を与える。神経生理学の本試験では、100点満点の試験素点が60点以上のものを合格とする。本試験に不合格の場合には一度だけ再試験を行い、100点満点の試験素点が60点以上のものを合格とする。再試験の後、再再試験は実施しない。なお、本試験、再試験のいずれもマークシート形式による出題を行う予定である。 (*)レポートの様式は初回講義内で明示する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 「授業計画」 1. 神経系の細胞と分子生物学 (藤村) 2. 活動電位 (藤村) 3. シナプス伝達(1/2)シナプス結合の分子生理 (藤村) 4. シナプス伝達(2/2)伝達物質の放出 (藤村) 5. 感覚神経概論 (藤村) 6. 触覚 (藤村) 7. 温痛覚 (藤村) 8. 視覚(1/2)網膜での視覚情報処理 (藤村)			

2026 医学系研究科

9. 視覚(2/2)高次視覚情報処理 (藤村)
10. 聴覚・前庭系(1/2)聴覚情報処理 (藤村)
11. 聴覚・前庭系(2/2)前庭系の情報処理 (藤村)
12. 味覚 (藤村)
13. 嗅覚 (藤村)
14. 運動生理学(1/4)随意運動 (藤村)
15. 運動生理学(2/4)姿勢の制御 (藤村)
16. 運動生理学(3/4)小脳 (藤村)
17. 運動生理学(4/4)大脳基底核 (藤村)
18. 大脳皮質の区分と構造機能局在 (藤村)
19. 大脳連合野の機能 (藤村)
20. 脳幹・視床下部 (藤村)
21. 自律神経 (藤村)
22. 大脳辺縁系の解剖と機能 (藤村)
23. 睡眠と覚醒 (藤村)
24. 神経発生と行動の発現(1/2)軸索伸長とガイダンス (藤村)
25. 神経発生と行動の発現(2/2)神経修復 (藤村)
26. 優位半球・脳の性差・言語機能 (藤村)
27. 学習と記憶 (藤村)
28. 神経系の疾患(1/3)末梢神経の疾患 (藤村)
29. 神経系の疾患(2/3)うつ病・統合失調症 (藤村)
30. 神経系の疾患(3/3)自閉症スペクトラム (藤村)

本試験・再試験

講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)

「授業及び学習の方法」

授業は講義中心で実施します。各回の講義内容に関して、各自1問以上選択肢形式の問題及び正答案を作成し、次回講義の冒頭でそれらを用いた小テストを実施することで知識のインプットとアウトプットを図ります。授業では基本となる知識目標が設定され、これを理解するために必要な資料がweb配布されます。また、各講義のテーマに沿った論文を読むことで、その領域の現状と課題を俯瞰します。ただし、受講者の状況によりレポート課題の提出をもって講義に置き換える場合があります。

「自学自習のためのアドバイス」

本講義では研究の作法について学び、自らが企画立案できる方法を学びます。学生諸兄は、自らの専門科に関係なく、とにかく日頃から論文を読む習慣をつけるべきであります。

教科書・参考書等

特定のもの是指定しませんが、「標準生理学」は読みやすく大変優れた書物であると思います。標準生理学 第9版、本間研一監修、医学書院、2019年、税込13,200円、ISBN-10: 4260003011

オフィスアワー

毎週木曜日12:00~13:00。直前に電話(087-891-2095)で在室を確認してください。お急ぎでなければ各教員のアドレスまでメールにてお問い合わせください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

「自学自習のためのアドバイス」に記載の通りです。

なお、本授業の教授言語は日本語であり、英語での実施には対応しておりません。

教員の実務経験との関連

生理学エドゥケーターによる講義

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687197-1) 呼吸循環生理学 Respiratory and Circulatory Physiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 倉原 琳	関連授業科目 循環生理シグナル伝達学 細胞シグナル伝達学に基づくトランスレーショナルリサーチ 履修推奨科目		
学習時間 講義90分 x 30回 + その他の講義の自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 生体の内部環境は、外部環境の変動に対して、精巧、柔軟かつ頑強に一定に維持される。これを恒常性の維持、ホメオスタシスと呼ぶ。内部環境とは細胞を取り巻く細胞外液を指し、酸素分圧、イオン濃度、pH、栄養素濃度、温度などのパラメーターが、自律的に動的平衡を保って調節されている。本授業では、生体の酸素の運搬、消費に関わる呼吸器と循環器の生理機能とその制御機構を解説する。			
授業の目的 呼吸器と循環器の生理機能とその制御機構を理解する。			
到達目標 1. 呼吸器の生理機能のその制御機構を説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応) 2. 細胞内呼吸の仕組みとその制御機構を説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応) 3. 循環器系の生理機能とその制御機構を説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート100% (期末テストは実施しない。)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 すべての講義を、対面および遠隔で実施する。対面講義を収録した動画を遠隔講義として配信する。 第1回: 生理学の基礎① 恒常性の維持 第2回: 生理学の基礎② 生理機能の交感神経制御 第3回: 生理学の基礎③ 生理機能の副交感神経制御 第4回: 生理学の基礎④ 生理機能の体液性制御 第5回: 呼吸生理学① 呼吸機能の指標 第6回: 呼吸生理学② 呼吸機能の評価 第7回: 呼吸生理学③ 呼吸筋と換気運動 第8回: 呼吸生理学④ 呼吸の神経性調節 第9回: 呼吸生理学⑤ 肺胞ガス交換 第10回: 呼吸生理学⑥ 酸素の運搬 第11回: 呼吸生理学⑦ 二酸化炭素の運搬 第12回: 呼吸生理学⑧ 呼吸による酸塩基平衡 第13回: 呼吸生理学⑨ 細胞内呼吸とミトコンドリア 第14回: 循環生理学① 心臓の電氣的活動① 固有心筋の活動電位 第15回: 循環生理学② 心臓の電氣的活動② 刺激伝導系 第16回: 循環生理学③ 心臓の電氣的活動③ 歩調取り機能と心拍数調節 第17回: 循環生理学④ 心臓の興奮収縮連関① カルシウムシグナルの発生 第18回: 循環生理学⑤ 心臓の興奮収縮連関② 収縮蛋白質のカルシウム制御 第19回: 循環生理学⑥ 心臓の機械的活動① 心周期 第20回: 循環生理学⑦ 心臓の機械的活動② 自律神経による調節 第21回: 循環生理学⑧ 血管平滑筋収縮機構① カルシウム依存性機構 第22回: 循環生理学⑨ 血管平滑筋収縮機構② 収縮装置のカルシウム感受性調節			

2026 医学系研究科

- 第23回：循環生理学⑩ 血管内皮細胞機能① 血管緊張調節
第24回：循環生理学⑪ 血管内皮細胞機能② バリアー機能とその破たん
第25回：循環生理学⑫ 血管内皮細胞機能③ 凝固線溶系の調節
第26回：循環生理学⑬ 血圧の成因と制御
第27回：循環生理学⑭ 心拍出量調節① 内因性調節機構
第28回：循環生理学⑮ 心拍出量調節② 外因性調節機構
第29回：循環生理学⑯ 心筋虚血の生理学① 心筋代謝の特徴
第30回：循環生理学⑰ 心筋虚血の生理学② 冠血流量の調節

【自学自習のためのアドバイス】

一つの教科書もとに講義内容のキーワードを理解して講義に望むことが推奨されます（準備学習60時間）。講義の後、複数の教科書や文献を当たることでより深い理解に至ることができます（事後学習60時間）

教科書・参考書等

標準生理学第9版 医学書院 ISBN978-4-260-03429-6

ギャノン生理学 原著24版 2014、丸善出版 ISBN: 978-4-621-08717-6

Ganong's Review of Medical Physiology 25th ed. 2015, McGraw-Hill Education, ISBN: 978-0071825108

Guyton and Hall Textbook of Medical Physiology 13th ed. 2015, Saunders, I

オフィスアワー

木曜日4時限目

事前にメール（研究室：physiol2@kagawa-u.ac.jp）あるいは電話（087-891-2100）にて訪問日程を調整することが望ましい。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業においては双方向性の講義を心がけます。講義内容について教員に質問したり、討論して講義に積極的に取り組んでください。

研究室ホームページ：<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/~cardiovasc-physiol/index.html>

メールアドレス

医学部自律機能生理学講座：physiol2@kagawa-u.ac.jp

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687198-1) 循環生理シグナル伝達学 Signal Transduction in Cardiovascular Physiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 倉原 琳	関連授業科目 呼吸循環生理学 細胞シグナル伝達学に基づくトランスレショナルリサーチ 履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 30回 + 自学自習 (準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 心臓血管系の生理機能は、それを構成する心筋細胞、刺激伝導系細胞、血管内皮細胞、血管平滑筋細胞、自律神経細胞の働きにより精巧かつ柔軟に調節されている。細胞の働き、生理作用を制御する仕組みが細胞内シグナル伝達システムである。本授業では、心臓血管系の構成細胞におけるシグナル伝達機能の仕組みを分子レベルで解説する。			
授業の目的 心臓血管系を構成する細胞の細胞内シグナル伝達の仕組みを理解する 心臓血管系を構成する細胞の細胞内シグナル伝達を研究する方法の原理を理解する。			
到達目標 1. 心臓血管系を構成する細胞の細胞内シグナル伝達の仕組みを説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応) 2. 心臓血管系を構成する細胞の細胞内シグナル伝達を研究する方法の原理を説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート100% (期末テストは実施しない)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 すべての講義を、対面および遠隔で実施する。対面講義を収録した動画を遠隔講義として配信する。 第 1 回: 細胞シグナル伝達の基礎① イオンチャネル内臓型受容体 第 2 回: 細胞シグナル伝達の基礎② 七回膜貫通型受容体 第 3 回: 細胞シグナル伝達の基礎③ 酵素内臓型受容体 第 4 回: 細胞シグナル伝達の基礎④ 三量体G蛋白質 第 5 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑤ 単量体G蛋白質 第 6 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑥ サイクリックAMP 第 7 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑦ サイクリックGMP 第 8 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑧ 細胞質カルシウム濃度制御機構 第 9 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑨ カルシウムシグナルの発生機構 第 10 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑩ 蛋白質リン酸化反応 第 11 回: 細胞シグナル伝達の基礎⑪ 蛋白質脱リン酸化反応 第 12 回: 心筋細胞のシグナル伝達① 興奮収縮連関① 興奮からカルシウムシグナルの発生 第 13 回: 心筋細胞のシグナル伝達② 興奮収縮連関② カルシウムシグナルから収縮 第 14 回: 心筋細胞のシグナル伝達③ 興奮収縮連関③ クロスブリッジサイクリング 第 15 回: 心筋細胞のシグナル伝達④ 心拍数の調節① 交感神経系による制御 第 16 回: 心筋細胞のシグナル伝達⑤ 心拍数の調節② 副交感神経系による制御 第 17 回: 心筋細胞のシグナル伝達⑥ 心拍出量の調節① 内在性調節機構とスターリングの心臓の法則 第 18 回: 心筋細胞のシグナル伝達⑦ 心拍出量の調節② 外因性調節機構 第 19 回: 平滑筋細胞のシグナル伝達① カルシウム依存性収縮機構 第 20 回: 平滑筋細胞のシグナル伝達② 収縮装置のカルシウム感受性調節 第 21 回: 平滑筋細胞のシグナル伝達③ ミオシン軽鎖リン酸化酵素の制御 第 22 回: 平滑筋細胞のシグナル伝達④ ミオシン脱リン酸化酵素の制御 第 23 回: 内皮細胞のシグナル伝達① 内皮由来血管弛緩反応 第 24 回: 内皮細胞のシグナル伝達② 内皮由来血管収縮反応			

2026 医学系研究科

- 第25回：内皮細胞のシグナル伝達③ 内皮バリアー機能
第26回：内皮細胞のシグナル伝達④ 凝固線溶系の調節
第27回：内皮細胞のシグナル伝達⑤ 免疫系の調節
第28回：細胞シグナル伝達研究法① 蛍光法を用いたシグナル伝達のリアルタイム計測
第29回：細胞シグナル伝達研究法② 蛋白質生化学を用いたシグナル伝達解析
第30回：循環生理シグナル伝達学総括 これからのシグナル伝達学と臨床応用

【自学自習のためのアドバイス】

一つの教科書もとに講義内容のキーワードを理解して講義に望むことが推奨されます（準備学習60時間）。講義の後、複数の教科書や文献を当たることでより深い理解に至ることができます（事後学習60時間）

教科書・参考書等

Signal Transduction 2nd Ed. 2009, Academic Press, ISBN: 978-0-12-369441-6
シグナル伝達 第2版, 2011, メディカル・サイエンス・インターナショナル, ISBN: 978-4-89592-692-8
標準生理学第9版 医学書院 ISBN978-4-260-03429-6
ギャノン生理学 原著24版 2014, 丸善出版 ISBN: 978-4-621-08717-6
Ganong's Review of Medical Physiol

オフィスアワー

木曜日5時限目

事前にメール（研究室：physiol2@kagawa-u.ac.jp）、電話（087-891-2100）にて訪問日程を調整することが望ましい

【研究室の場所】

三木町医学部キャンパス 講義実習棟2階実習室B準備室

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業においては双方向性の講義を心がけます。講義内容について教員に質問したり、討論して講義に積極的に取り組んでください。

研究室ホームページ：<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/~cardiovasc-physiol/index.html>

医学部自律機能生理学講座：physiol2@kagawa-u.ac.jp

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687199-1) 薬理学特論 Pharmacology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 西山 成	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+ 自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 薬剤の薬理学的効果を検討することができる知識を身に付けさせる。特にプルーフオブコンセプト(POC)を確立した創薬活動について知識を深めさせる。培養細胞や動物実験による基礎的な実験から、どのようなステップで臨床研究を進めていかなければいけないのかについて考える能力を身につけさせる。			
授業の目的 本講義・演習を受けた大学院生が、薬剤効果の基礎的検討を実行することができる知識を身につけ、また、どのようなステップにて臨床研究を進めて行かなければならないのかについて考え、実践できる能力を養う。(AB)			
到達目標 1. 実際に行っている薬理学的な基礎研究を総合的に理解し、説明できる。(DPの「専門・理解」に対応) 2. 関連分野における独自の研究展開を考察し、実行できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート70%、発表及び討論30%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 培養細胞を用いた薬剤評価法(1) 第2回 培養細胞を用いた薬剤評価法(2) 第3回 培養細胞を用いた薬剤評価法(3) 第4回 培養細胞を用いた薬剤評価法(4) 第5回 培養細胞を用いた薬剤評価法(5) 第6回 培養細胞を用いた薬剤評価法(6) 第7回 モデル動物を用いた薬剤評価法(1) 第8回 モデル動物を用いた薬剤評価法(2) 第9回 モデル動物を用いた薬剤評価法(3) 第10回 モデル動物を用いた薬剤評価法(4) 第11回 モデル動物を用いた薬剤評価法(5) 第12回 モデル動物を用いた薬剤評価法(6) 第13回 トランスレーショナル・リサーチ(1) 第14回 トランスレーショナル・リサーチ(2) 第15回 トランスレーショナル・リサーチ(3) 第16回 トランスレーショナル・リサーチ(4) 第17回 トランスレーショナル・リサーチ(5) 第18回 トランスレーショナル・リサーチ(6) 第19回 臨床研究について(1) 第20回 臨床研究について(2) 第21回 臨床研究について(3) 第22回 臨床研究について(4) 第23回 臨床研究について(5) 第24回 臨床研究について(6) 第25回 臨床研究について(7) 第26回 臨床研究について(8) 第27回 臨床研究について(9)			

2026 医学系研究科

第28回 臨床研究について (10)

第29回 臨床研究について (11)

第30回 臨床研究について (12)

【授業及び学習の方法】

薬理学研究室などで実施される。

基本的に対面授業(一部リモート)とする。なお状況によっては授業形態を変更する可能性がある。

【自学自習のためのアドバイス】

当該分野における興味のあることについてあらかじめ下調べを行い、実習の事例と照らし合わせながら学習を進めていくと理解が進む。

教科書・参考書等

新しい薬理学 西村書店 石井邦明、西山成監修

Goodman and Gilman's : The Pharmacological Basis of Therapeutics McGraw-Hill Professional Publishing

Esmo Handbook on Principles of Translational Research (European Society for Medical

Oncology Handbooks) : Informa Healthcare社

The CRA'

オフィスアワー

月曜日8:30-12:30内であらかじめ担当教員に確認し訪問すること。メールでの連絡は、教室 (yakuri-m@kagawa-u.ac.jp)に問い合わせすること。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

20年の実務経験をもつ。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABDM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687200-1) 脂質生物学 Lipid biology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 岩部 美紀・宇山 徹	関連授業科目 酵素学実験法		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分 × 30回 + 自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 脂質は、かつて生体内で静的な存在であると考えられていたが、現在では、合成・分解がダイナミックに行われていることが明らかになっており、脂質代謝に関与する酵素の研究も活発に進められている。また、肥満、脂質異常症、種々の先天性脂質代謝異常症などは、脂質代謝酵素の働きと深く関わっており、脂質代謝は代謝内分泌学や循環器学などの臨床医学分野においても注目されている。 本授業では、動物組織における脂質代謝と関連酵素、およびそれらの異常が引き起こす病態について、講義と演習を行う。			
授業の目的 動物組織における脂質代謝と関連酵素、およびそれらの異常が引き起こす病態について理解することを目的とする。			
到達目標 1) 主な脂質代謝経路を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 2) 脂質の酸化によるエネルギー産生機構を説明できる (DP「専門知識・理解」「グローバルマインド」)。 3) 主な脂質代謝酵素の反応機構と生理的役割を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 4) 主な脂質メディエーターとステロイドホルモンの合成経路と関連酵素を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 5) 肥満、高脂血症、種々の先天性脂質代謝異常症等の病態と脂質代謝の関連を説明できる (DP「専門知識・理解」「グローバルマインド」)。			
成績評価の方法 授業への取り組み姿勢 (20%) とレポート (80%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画： 第1回 総論 第2回 脂質代謝における細胞小器官の役割 第3回 脂質の消化吸収 第4回 脂肪酸酸化とATP産生 第5回 飢餓時の脂質動態とケトン体合成 第6回 脂肪酸合成経路と必須脂肪酸 第7回 脂質代謝における肝臓と脂肪組織の役割 第8回 ホルモンによる脂質代謝の調節 第9回 コレステロール合成経路 第10回 胆汁酸合成経路 第11回 ステロイドホルモンの合成経路とその異常 第12回 シトクロム P450と脂質代謝 第13回 リン脂質の代謝経路 第14回 糖脂質の代謝経路 第15回 リソソーム酵素とリソソーム病 第16回 脂質メディエーターと Gタンパク質共役型受容体 第17回 各種ホスホリパーゼの構造と機能 第18回 アラキドン酸カスケード 第19回 シクロオキシゲナーゼとリポキシゲナーゼ			

2026 医学系研究科

- 第20回 エンドカンナビノイドの合成と分解
- 第21回 脂溶性ビタミンの活性化と体内動態
- 第22回 核内受容体を介した脂質代謝の調節
- 第23回 脂質過酸化と防御機構
- 第24回 リポタンパク質と関連酵素
- 第25回 肥満・高脂血症と脂質代謝
- 第26回 脂質代謝の最近の話題 (N-アシルエタノールアミンの代謝機構と生理機能解析)
- 第27回 脂質代謝の最近の話題 (オルガネラ分解に関わる脂質代謝酵素の機能解析)
- 第28回 脂質代謝の最近の話題 (新規リソソーム酵素の性状解析)
- 第29回 脂質代謝の最近の話題 (ノックアウトマウスを用いた脂質代謝酵素の生理機能解析)
- 第30回 まとめ

授業及び学習の方法：講義に加えて、必要に応じて文献講読を行う。準備学習では、教科書の該当するページを見ておく。あらかじめ講読する論文を指定した場合は、その論文を独力で読んでみる。事後学習では、教科書と論文を読み直し、準備学習の時点で不明だった内容が理解できているか確認する。なお、状況によって授業形態を変更する場合、論文講読、課題レポートやe-learning等で代用する。

※この科目は原則として対面授業を行う。

教科書・参考書等

特に指定しないが、生化学の教科書を1冊購入することを推奨する。

例：ロッドウェルほか. イラストレイテッド Harper・生化学. 原書32版, 丸善出版, 2024.

原タイトル:Harper's Illustrated Biochemistry, 32nd.

Victor W. Rodwell et al. Harper's Illustrated Biochemistry. 32nd ed., McGraw-Hill, 2022.

ヴォートほか. ヴォート基礎生化学. 第5版 ed., 東京化学同人,

オフィスアワー

原則として、講義時間終了後に設定するが、それ以外でも随時、アポイントにより対応する。

宇山 徹 火曜日 17時～18時 uyama.toru@kagawa-u.ac.jp

(医学部基礎臨床研究棟7階西端 生体分子医学講座生化学)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

参考：生化学ホームページ

<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/~biochem>

教員の実務経験との関連

生命科学の分野で博士号 (PhD) を取得し、大学等で実務経験がある教員が授業を行います。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABDM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687201-1) 酵素学実験法 Experimental techniques for enzymology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 岩部 美紀・宇山 徹	関連授業科目 脂質生物学		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分 × 30回 + 自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 酵素は、生体内の物質代謝を司り、古くから生化学の中心的研究テーマとされてきた。本講義では、酵素の性質、反応機構等の理論に加え、酵素学研究に必要な実験法の解説を行う。			
授業の目的 酵素学研究に必要な知識や実験法を理解することを目的とする。			
到達目標 1) 酵素の性質を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 2) 補酵素の性質を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 3) 主要な酵素の反応機構を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 4) 酵素反応動力学の理論が利用できるようになる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 5) 酵素活性の調節機構を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 6) 酵素精製の手法が説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 7) 酵素タンパク質の性質を解析する手法を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。 8) 酵素活性の測定法、基質・産物の分析法を説明できる (DP「専門知識・理解」「研究能力・応用力」「グローバルマインド」)。			
成績評価の方法 授業への取り組み姿勢 (20%) とレポート (80%) により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画： 第1回 はじめに 第2回 代謝概説(1): 糖・脂質代謝 第3回 代謝概説(2): アミノ酸・核酸代謝 第4回 酵素の一般的性質と分類 第5回 補欠分子族と補酵素 第6回 ミネラルの役割 第7回 酵素タンパク質の一次構造 第8回 酵素タンパク質の高次構造 第9回 酵素タンパク質の翻訳後修飾と細胞内局在 第10回 化学熱力学の基礎 第11回 酵素反応機構の基礎 第12回 主要な酵素の反応機構 第13回 定常状態の反応動力学理論 第14回 準定常状態の反応解析法 第15回 酵素の活性調節機構 第16回 酵素活性測定法 第17回 放射性同位元素を用いたトレーサー実験 第18回 組換え酵素の大量発現 第19回 酵素精製法の理論的背景 第20回 酵素精製の実際			

2026 医学系研究科

- 第21回 酵素タンパク質の性質・構造の解析法
- 第22回 酵素活性測定に必要な低分子の分析法
- 第23回 質量分析法
- 第24回 酵素遺伝子の発現・調節の分析法
- 第25回 酵素遺伝子改変動物の表現型解析
- 第26回 トピックス (1): リン脂質代謝酵素
- 第27回 トピックス (2): 脂質メディエーター
- 第28回 トピックス (3): エンドカンナビノイド・システムの構成酵素
- 第29回 トピックス (4): 細胞小器官と酵素
- 第30回 まとめ

授業及び学習の方法：講義に加えて、必要に応じて文献講読を行う。準備学習では、教科書の該当するページを見ておく。あらかじめ講読する論文を指定した場合は、その論文を独力で読んでみる。事後学習では、教科書と論文を読み直し、準備学習の時点で不明だった内容が理解できているか確認する。なお、状況によって授業形態を変更する場合、論文講読、課題レポートやe-learning等で代用する。

※この科目は原則として対面授業を行う。

教科書・参考書等

特に指定しないが、生化学の教科書を1冊購入することを推奨する。

例：ロッドウェルほか. イラストレイテッド ハーパー・生化学. 原書32版, 丸善出版, 2024.

原タイトル: Harper's Illustrated Biochemistry, 32nd.

Victor W. Rodwell et al. Harper's Illustrated Biochemistry. 32nd ed., McGraw-Hill, 2022.

ヴォートほか. ヴォート基礎生化学. 第5版 ed., 東京化学同人,

オフィスアワー

原則として、講義時間終了後に設定するが、それ以外でも随時、アポイントにより対応する。

宇山 徹 uyama.toru@kagawa-u.ac.jp

(医学部基礎臨床研究棟7階西端 生体分子医学講座生化学)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

参考：生化学ホームページ

<http://www.med.kagawa-u.ac.jp~biochem>

教員の実務経験との関連

生命科学の分野で博士号 (PhD) を取得し、大学等で実務経験がある教員が授業を行います。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687205-1) 核医学画像解析 Parametric Image generation in Nuclear Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 久富 信之	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+準備学習30時間+事後学習30時間			
授業の概要 久富がPET、SPECTなどで用いられる標識薬剤（トレーサー）の動態解析と画像計算法について解説する。			
授業の目的 受講生はモダリティや薬剤ごとに、それらの臓器内での動態を考慮してうえで適した解析法を構築し適用することができる。（DPのA：専門知識・理解、およびB：研究能力・応用力に対応）			
到達目標 講義内容に基づき、現在ある動態解析モデルを理解して上で、それらをモダリティや薬剤ごとに適したものを選択し適用できる。講義内容に基づき、現在ある動態解析モデルを理解して上で、それらをモダリティや薬剤ごとに適したものを選択し適用できる。（DPのABに対応）			
成績評価の方法 講義中の議論による理解度20%、レポート80%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回 PET, SPECT装置の原理と標識薬剤（トレーサー）その1 2回 PET, SPECT装置の原理と標識薬剤（トレーサー）その2 3回 PET, SPECT装置の原理と標識薬剤（トレーサー）その3 4回 動態解析とモデル計算 その1 5回 動態解析とモデル計算 その2 6回 動態解析とモデル計算 その3 7回 動態解析と機能 その1 8回 動態解析と機能 その2 9回 動態解析と機能 その3 10回 画像計算 その1 11回 画像計算 その2 12回 画像計算 その3 13回 画像診断の最前線 その1 14回 画像診断の最前線 その2 15回 画像診断の最前線 その3 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 講義中に画像解析に関する論文を紹介するので、これを読んで学習してください。			
教科書・参考書等 教科書 適時 参考書 医用画像解析ハンドブック（オーム社）			
オフィスアワー 居室は講義棟314 4月～8月 月曜～木曜 9時～17時 9月 月曜～金曜 9時～17時 10月～3月 月、水～金曜 9時～17時			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ なし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-M 授業科目名 (講義コード：L688017-1) 腫瘍病理学 Oncology pathology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 M	単位数 2	
担当教員名 門田 球一, 宮井 由美, 横平 政直	関連授業科目 医科学概論 履修推奨科目 医科学概論		
学習時間 講義・演習90分 × 15回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 正常細胞からがん細胞が発生する過程で、さまざまな遺伝子や染色体、タンパク質などの分子に起きる変化および病理組織学的な変化を講義する。			
授業の目的 病態生理に立脚した医学的知識の獲得を目的として、正常細胞からがん細胞が発生する過程で、さまざまな遺伝子や染色体、タンパク質などの分子に起きる変化および病理組織学的な変化を理解し、それらの解析手法を習得して、解析結果を説明できるようになる。			
到達目標 学生ががん細胞の形態的变化の特徴、意義、解析方法を理解することを到達目標とする (大学院課程のDP「専門知識・理解」に対応)。 学生ががん細胞の形態的变化の特徴から、研究での位置づけを理解することを到達目標とする (大学院課程のDP「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 レポート (100%) で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は原則として対面授業を行います。一部の回では遠隔授業を行います。なお、状況によっては全ての回を対面又は遠隔に変更する可能性があります。 自学自習としては下記の講義・実習内容に関連した教科書をよく読み、インターネットなどで最近の英語論文の知識を得ること。 1. がんにおける病理組織学的変化の概要 2. がんにおける遺伝子異常の概要 3. がん組織の病理組織学的な解析方法 4. 腫瘍病理学における分子生物学的検査 5. 腫瘍病理学における病理標本の観察方法 6. 腫瘍病理学における検体の固定と切り出し 7. 腫瘍病理学における薄切標本作成法 8. 腫瘍病理学における標本染色法：HE染色 9. 腫瘍病理学における標本染色法：特殊染色 10. 腫瘍病理学で用いられる免疫染色の原理 11. 腫瘍病理学で用いられる免疫染色の実際 12. 腫瘍病理学における画像撮影方法 13. 腫瘍病理学における画像計測方法 14. 腫瘍病理学における画像解析と統計解析 15. 腫瘍病理学における研究計画の立案、実施、論文作成			
教科書・参考書等 Robbins Basic Pathology, 11th ed. ELSEVIER			
オフィスアワー 門田：毎週木曜日 16:30 ~ 17:30 分子腫瘍病理学 (あらかじめメール等で照会すること：ichibyou-m@kagawa-u.ac.jp) 横平：毎週水曜日 16:30 ~ 17:30 医学部教育センター (あらかじめメール等で照会すること：yokohira.masanao.tm@kagawa-u.ac.jp)			

2026 医学系研究科

宮井：毎週火曜日 16:30 ~ 17:30 分子腫瘍病理学（あらかじめメール等で照会すること：miyai.yumi@kagawa-u.ac.jp）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

関連する研究について、文献などで自主学習してください。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687207-1) 分子神経病理学 Molecular Neuropathology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 鈴木 辰吾, 千葉 陽一, 三木 崇範	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習 (準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 分子病理学的手法の発達により遺伝子のエラーに伴う疾患の解析が飛躍的に進んでいる。In situ hybridization (ISH) 法を行う事により組織や細胞内の特定の遺伝子 DNAやその mRNAの存在を目で直接確認することが可能となった。Polymerase chain reaction (PCR) により検索したい遺伝子の一部を特異的に増幅しその遺伝子の存在を確認することができる。最近、中枢神経系疾患における遺伝子変異の解明が飛躍的に進んでいる。これらの方法論の基礎的理論を理解でき、実際の神経系疾患の診断や病因の検索ができるよう指導を行う。			
授業の目的 授業において種々の分子神経病理学的方法について基礎から学ぶ。実際に遭遇しえる臨床例や動物実験で如何に分子神経病理学的手法を使用して行うか考察する。論文中の症例を用いて分子神経病理学的手法から診断を行い、病因の探求を試みる。そして、実際の症例において、神経系疾患の診断や病因の検索ができるようになることがこの授業の目的である。			
到達目標 分子神経病理の基本を理解し、実際に、研究に応用できる。(ABX) 脳でのタンパク質や核酸の発現状況を把握できる。(ABX) 分子神経病理学的所見から病態を類推できる。(AXX) 上記3つの目標は、いずれも、DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応している。			
成績評価の方法 大学院では自ら研究を行い、結果を出すことが必須である。期末テストは行わない。 成績は、研究内容を具体的に記載したレポートから習熟度を複数の教員で判断し、レポートのみ(100%)で判定する。場合によっては、課題を課し、そのレポート内容で評価することも考慮に入れる。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は基本的に対面授業を行います。新型コロナウイルス感染状況にもよっては、影響を受ける一部の授業回では遠隔授業を行います。 授業計画 1回： 分子神経病理学の最近の進歩と理論的背景 2回： 神経変性疾患の分子レベル解析の現状についての概説 3回： アミロイドベータ蛋白沈着の分子機序について 4回： リン酸化タウ蛋白沈着の分子機序について 5回： リン酸化シヌクレイン蛋白沈着の分子機序について 6回： TDP-43蛋白沈着の分子機序について 7回： FUS蛋白沈着の分子機序について 8回： 異常蛋白の脳内伝搬の分子機序について 9回： 神経変性の分子機序について 10回： 脳から蛋白質と核酸の抽出方法の概説 11回： 様々なプロット法 (ウエスタンブロット、サザンブロット、ノザンブロット) について 12回： プロテオーム解析の概説 13回： トランスクリトーム解析の概説 14回： Polymerase chain reaction (PCR) について 15回： In situ hybridization (ISH) 法について 16回： マウスあるいはラット脳における各種プロットについて 17回： マウスあるいはラット脳におけるプロテオーム解析について			

2026 医学系研究科

- 18回： マウスあるいはラット脳におけるトランスクリプトーム解析について
- 19回： マウスあるいはラット脳におけるPCR法について
- 20回： マウスあるいはラット脳におけるISHについて
- 21回： マウスあるいはラット脳におけるプロットの実状
- 22回： マウスあるいはラット脳におけるトランスクリプトーム解析の実状
- 23回： マウスあるいはラット脳におけるPCR法の実状
- 24回： ヒト神経変性疾患脳におけるアミロイドベータ蛋白質発現解析の実状について
- 25回： ヒト神経変性疾患脳におけるリン酸化タウ蛋白質発現解析の実状について
- 26回： ヒト神経変性疾患脳におけるリン酸化シヌクレイン蛋白質発現解析の実状について
- 27回： ヒト神経変性疾患脳におけるTDP-43蛋白質発現解析の実状について
- 28回： ヒト神経変性疾患脳におけるFUS蛋白質発現解析の実状について
- 29回： ヒト神経変性疾患脳における種々の複合的異常蛋白質解析の実状について
- 30回： 分子神経病理学（総論と各論）のまとめ

授業及び学習の方法:講義を中心とするも、上記課題に関するレポートを課することも考慮する。

場合によっては、課題を課し、それに関するレポート提出を求める（その内容で評価する）。

[自学自習のためのアドヴァイス]

講義に臨む前に予習（各回2時間程度の事前学習）をしてきちんと講義についてくること（実際雑誌に掲載されている論文を読むことが求められ、一編につき2時間程度の時間は必要）。そして、その得た知識を基にして、さらに論文等でその研究テーマを発展的に調べた後、興味あるテーマで正確に実験できるようノートに記載するなどして整理すると効率よく身に付きます（各回2時間程度の事後学習）。

教科書・参考書等

遺伝子・蛋白質・実験操作ブロッティング法 Southern, Northern, Western Blotting 口野 嘉幸、平井 久丸、櫻林 郁之介集 ソフトサイエンス社

免疫染色・in situハイブリダイゼーション 野地 澄晴編 羊土社

Molecular biology of the cell. Bruce Alberts, Alexander Johnson, Julian Lewis, Martin Raff, Keith Roberts, Peter Walter. Newton Press 20

オフィスアワー

場所は、臨床研究棟5Fの神経機能形態学教室と6Fの炎症病理学教室において行う。

事前の連絡をしてアポイントメントをとり在室を確認後、月曜の午後5時から午後7時まで、質疑応答に応じる。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

自らの研究テーマへの応用を常に考えながら履修すること。授業の教授言語および資料は日本語であります。

教員の実務経験との関連

神経系統解剖を専門とする神経解剖の教員と病理解剖を材料とする神経病理の専門の教員が担当する。上記課題と密接な関係がある。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687208-1) 免疫組織化学 Immunohistochemistry	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 千葉 陽一	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 組織内の抗原物質を同定する方法として免疫組織化学がある。これは病理学的診断や病因の追及に必要な手法であり、現在では古典的な手段と言えるが、その重要性は依然衰えていない。免疫組織化学の基礎的な理論を講義し、研究に応用できるよう指導する。具体的には、免疫組織化学の理論的背景と実際の染色方法、Polyclonal抗体とmonoclonal抗体の違い、抗体の取り扱い方、凍結切片やホルマリン固定パラフィン切片の作成、免疫組織化学(PAP法、ABC法等)による切片の染色、写真の撮影、多重染色法等の方法を指導する。さらに実際の日常の病理学的診断における免疫組織化学染色体系と臨床応用の方法について指導する。			
授業の目的 免疫組織化学の基礎的な理論ならぶに具体的な手法を理解できる。 実際の日常の病理学的診断における免疫組織化学染色体系と臨床応用の具体的な方法を習得する。習得できれば、大学院での研究において形態学的な解析が可能となる。癌組織において特定物質の発現が明らかになれば、新規発現遺伝子産物を報告できる。			
到達目標 免疫染色の原理を理解できる(ABX)。 抗体の特性に応じて染色を実現できる(ABX)。 抗体を使う免疫組織化学染色を実践できる(ABX)。 組織上で発現している物質を知ることができる(ABX)。 (DP「知識・理解」、「問題解決・課題探求能力」に対応)			
成績評価の方法 大学院では自ら研究を行い、結果を出すことが必須である。従って、個々の講義科目に対する試験は行わない。成績は、全てレポート(100%)で判定する。 場合によっては、課題を課し、そのレポート内容で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業において種々の免疫組織化学的方法について基礎から学ぶ。演習では、実際に遭遇し得る臨床例や動物実験で如何に免疫組織化学的手法を使用するか考察する。さらに、実習において実際の症例、動物実験を用いて免疫組織化学を使用し、診断を行い、病因の探求を行う。この科目は基本的に対面授業を行います。新型コロナウイルス感染状況にもよっては、影響を受ける一部の授業回では遠隔授業を行います。 1回: 免疫組織化学の理論的背景 2回: 免疫組織化学によって行われている免疫染色の具体的例 3回: 免疫染色の実際の手順の概略について 4回: 免疫染色の様々な発色方法(PAP法、ABC法等)について 5回: 固定方法について 6回: パラフィン切片と凍結切片の作り方について 7回: パラフィン切片と凍結切片での染色方法の違いについて 8回: 抗体の取り扱い方について 9回: 様々な一次抗体(polyclonal抗体とmonoclonal抗体の違いを含め)について 10回: polyclonal抗体について 11回: monoclonal抗体について 12回: 二次抗体について 13回: 二重染色を含む多重染色の概略について 14回: 実際の二重染色方法(DAB発色とALP発色、DAB発色とDAB-ニッケル染色)について			

2026 医学系研究科

- 15回： 実際の二重染色方法（蛍光多重染色）について
16回： 写真撮影について
17回： ヒトあるいはマウス腎組織を用いて、免疫染色を行う（尿細管中心に）。
18回： ヒトあるいはマウス腎組織を用いて、免疫染色を行う（糸球体中心に）。
19回： ヒトあるいはマウス脳組織を用いて、免疫染色を行う（海馬中心に）。
20回： ヒトあるいはマウス脳組織を用いて、免疫染色を行う（脈絡叢中心に）。
21回： ヒトあるいはマウス腎組織を用いて、二重免疫染色を行う（尿細管中心に）。
22回： ヒトあるいはマウス腎組織を用いて、二重免疫染色を行う（糸球体中心に）。
23回： ヒトあるいはマウス脳組織を用いて、二重免疫染色を行う（海馬中心に）。
24回： ヒトあるいはマウス脳組織を用いて、二重免疫染色を行う（脈絡叢中心に）。
25回： ヒトあるいはマウス腎組織を用いて、蛍光二重免疫染色を行う（尿細管中心に）。
26回： ヒトあるいはマウス腎組織を用いて、蛍光二重免疫染色を行う（糸球体中心に）。
27回： ヒトあるいはマウス脳組織を用いて、蛍光二重免疫染色を行う（海馬中心に）。
28回： ヒトあるいはマウス脳組織を用いて、蛍光二重免疫染色を行う（脈絡叢中心に）。
29回： 各自が行った様々な免疫染色画像を取り込み、何がいえるか、検討する。
30回： 免疫組織化学染色の特徴、その利用方法を総括する。
場合によっては、上記内容に関する課題を課し、そのレポート内容で評価する。

[自学自習のためのアドヴァイス]

講義に臨む前に予習（各回2時間程度の準備学習）をしてきちんと講義についてくること（あらかじめ、習う方法を用いた論文を読んでくれることが求められ、1篇を読むのに2時間程度要すると考えられる）。そして、その得た知識を基にして自分で論文等でその研究方法の具体例を調べて試行錯誤を経た後、いつでも正確に実行できるようノートに記載するなどして整理すると効率よく身に付きます（各回2時間程度の事後学習）。

教科書・参考書等

参考書免疫組織化学と insitu hybridizationのすべて 病理と臨床臨時増刊号Vol. 18

病理組織標本の作り方 渡辺 陽之輔・坂口 弘・細田 泰弘 監修 医学書院

酵素抗体法 渡辺 慶一、中根 一穂 編 学際企画

単クローン抗体 岩崎 辰夫・安東 民衛・市川 かおる・保井 孝太郎 著 講談社サイエンティフィック

オフィスアワー

臨床研究棟6階の炎症病理学事務室にて、下記メールアドレスを介して連絡をとり在室を確認後、月曜の午後5時から午後7時までの間で、質疑応答に応じる。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

自らの研究テーマへの応用を常に考えながら履修すること。授業の教授言語および資料は日本語である。

教員の実務経験との関連

20年以上病理解剖・病理診断並びにヒト・実験動物の組織標本を用いた形態学的研究を行ってきた経験があり、免疫組織化学の技法やトラブルシューティングを熟知している教員が担当する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687209-1) 免疫制御学 Understanding of how the innate immune system functions	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 4	
担当教員名 星野 克明	関連授業科目 免疫機能を調整する薬剤の開発、		
	履修推奨科目 微生物ゲノム科学、実験動物学・動物遺伝学、微生物共生システムと応用		
学習時間 講義90分×23回 + 自学自習 (準備学習45時間+事後学習45時間) 実験・実習300分×6回			
授業の概要 生体防御応答は、自然免疫と獲得免疫の相互作用により成り立っている。本科目では、自然免疫に関与する細胞群の種類および機能、および自然免疫と種々の免疫疾患の関係について解説する。			
授業の目的 自然免疫の基本的な仕組みについて理解することを目的とする。病原体に対する生体防御反応、自然免疫応答の機能異常によって生じる自己免疫疾患・アレルギー疾患、先天性および後天性免疫不全症、およびがん細胞に対する免疫応答を学ぶ。			
到達目標 1) 自然免疫に関わる細胞を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2) 樹状細胞とマクロファージの機能を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3) 自然免疫細胞が産生するサイトカインの機能を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 4) 感染症に対する防御機構を説明できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応) 5) 自己免疫疾患の発症機構を説明できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート提出やグループ討論、実習結果の発表などにより総合評価を行う(レポート60%、実験結果の発表など40%)。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 講義 第1回 自然免疫に関わる細胞について1 第2回 自然免疫に関わる細胞について2 第3回 自然免疫に関わる細胞について3 第4回 自然免疫に関わる細胞について4 第5回 樹状細胞とマクロファージの生物学1 第6回 樹状細胞とマクロファージの生物学2 第7回 樹状細胞とマクロファージの生物学3 第8回 樹状細胞とマクロファージの生物学4 第9回 自然免疫細胞からのサイトカイン産生1 第10回 自然免疫細胞からのサイトカイン産生2 第11回 自然免疫細胞からのサイトカイン産生3 第12回 自然免疫細胞からのサイトカイン産生4 第13回 感染実験の意義・方法1 第14回 感染実験の意義・方法2 第15回 感染実験の意義・方法3 第16回 感染実験の意義・方法4 第17回 感染実験の意義・方法5 第18回 自己免疫疾患モデル動物1 第19回 自己免疫疾患モデル動物2 第20回 自己免疫疾患モデル動物3 第21回 自己免疫疾患モデル動物4			

2026 医学系研究科

第 2 2 回 自己免疫疾患モデル動物5

第 2 3 回 総括

授業及び学習の方法:文献の精読による学習とディスカッションにより知識の整理を行い、現在の問題点の把握と、その解決法を探る。グループ討論やレポート提出を行う。

実験・実習

第 1 回 自然免疫に関わる細胞の解析

第 2 回 樹状細胞とマクロファージの解析

第 3 回 自然免疫細胞からのサイトカイン産生1

第 4 回 自然免疫細胞からのサイトカイン産生2

第 5 回 自己免疫疾患モデル動物の解析1

第 6 回 自己免疫疾患モデル動物の解析2

レポート提出を行う。

この科目は基本的に対面授業を行います。一部の授業回では遠隔授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。

自学自習のためのアドバイス

関連する文献検索と、その精読により情報収集に努めて下さい。そして、問題点の把握をできるようにして下さい。

教科書・参考書等

教科書 特になし

参考書 Kenneth Murphy. Janeway' s Immunobiology. 10th Edition, W. W. Norton & Company, 2022

オフィスアワー

月曜日17時から18時

それ以外でも在室時に随時対応できますが、念のためメール連絡して下さい。

免疫学共通アドレス immunol-all-m@kagawa-u.ac.jp

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687212-1) 微生物ゲノム科学 Microbial genomics	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 今大路 治之・桑原 知巳	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 新興・再興感染症の発生や多剤耐性菌の拡がりは世界的な脅威であり、その対策が急務となっています。病原体の適応進化や感染症の診断・治療を理解するためには、微生物のゲノム構造や遺伝子の発現制御に対する理解が必要です。本授業科目では、細菌のゲノム構造や遺伝子発現の基礎を概説し、病原因子の発現や感染症の発症病理における役割について解説します。また、薬剤耐性遺伝子の伝播様式や細菌間での遺伝子授受の分子機構を学び、細菌の進化や多剤耐性化についての講義も行います。さらには、関連する最新の文献を読み、微生物ゲノム情報がどのように感染症の制御方法の開発に利用されているのかについて解説します。			
授業の目的 病原細菌の多剤耐性化や高病原性化は大きな社会問題になっています。これらは細菌の環境適応による遺伝子の変異や他の微生物からの新たな遺伝子の獲得によって起こります。これらの背景を理解するためには、多数の細菌のゲノム配列を比較することが必要です。この授業では講義を通して微生物ゲノム解析に関する基本的な知識を修得します。また、実際にデータベースからゲノム配列を取得し、複数のゲノムを比較することで表現型の変化に寄与する遺伝子を検索する演習も行います。一連の微生物ゲノム比較解析が自ら行えるようになるのが本授業の目的で			
到達目標 1. 微生物のゲノム構造の特徴を説明できる。(DPコード:Aに対応) 2. 微生物の病原因子について、具体的な例を挙げて説明できる。(DPコード:ABに対応) 3. 細菌の遺伝子発現制御について説明できる。(DPコード:Aに対応) 4. 多剤耐性化における遺伝子変異や遺伝子水平伝播の役割を説明できる。(DPコード:Aに対応) 5. 微生物ゲノムに関連する文献の内容や意義を理解できる。(DPコード:ABに対応)			
成績評価の方法 授業内容に関する理解度を口頭試問(50%)および討論(50%)により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 1回 病原微生物のゲノム構造について(講義) 2回 病原微生物のゲノム構造について(講義) 3回 病原微生物のゲノム構造について(講義) 4回 病原微生物のゲノム構造について(講義) 5回 病原因子の役割と発現制御機構について(講義) 6回 病原因子の役割と発現制御機構について(講義) 7回 病原因子の役割と発現制御機構について(講義) 8回 病原因子の役割と発現制御機構について(講義) 9回 薬剤耐性遺伝子の誕生と伝播について(講義) 10回 薬剤耐性遺伝子の誕生と伝播について(講義) 11回 薬剤耐性遺伝子の誕生と伝播について(講義) 12回 薬剤耐性遺伝子の誕生と伝播について(講義) 13回 微生物ゲノム解析に関する英語論文の紹介と討論(発表) 14回 微生物ゲノム解析に関する英語論文の紹介と討論(発表) 15回 微生物ゲノム情報の取得と解析(演習) 【授業及び学習の方法】 1~12回までは、細菌のゲノムや遺伝子発現制御に関する講義を行います。13~14回では自身で選んだ微生物ゲノム解析に関する論文の内容を発表します。15回では、NCBIより微生物ゲノム配列をダウンロードし、解析ソフトを			

2026 医学系研究科

用いた演習を行います。

この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て遠隔へ変更する可能性があります。

【自主学習のためのアドバイス】

講義・演習の内容を十分理解するために、その日の講義・演習の振り返りを行ってください。また、次の講義・演習内容についての基本的な知識をあらかじめ自主学習により習得しておいてください。各授業の内容を修得するためには、事前学習2時間と事後学習2時間が必要です。

教科書・参考書等

教科書 Bacterial Pathogenesis: A Molecular Approach ASM press

参考書 ゲノム微生物学 木村 光 編, 丸善出版

オフィスアワー

月曜日17時から18時。

場所：医学部基礎臨床研究棟7階 分子微生物学研究室。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

毎回出席を確認します。13回目までに発表に使用する文献を提示して下さい。

教員の実務経験との関連

担当教員は微生物学の教育研究に25年間従事。腸内細菌のゲノム解析を中心に研究を行っている。細菌のゲノム解析に関する経験をもとに、細菌ゲノム解析の現状や今後の展望につき解説を行う。また、簡単な細菌のゲノム解析の手法を実演する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687213-1) 生活習慣病予防論 Lifestyle-related Disease Prevention	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 宮武 伸行	関連授業科目 健康測定・アセスメント 履修推奨科目 臨床疫学、生物統計学		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 健康に関する行動理論・モデルの基礎を提示し、実際の保健指導・健康教育とその評価に応用することができるよう促す。肥満症、メタボリックシンドローム、2型糖尿病等の生活習慣病等の一次予防に関する知識を習得させ、行動理論・モデルを利用して、実際に臨床で実践させる。			
授業の目的 1)健康に関する行動理論・モデルの基礎について理解する。 2)健康に関する実際の行動を行動理論・モデルを用いて理解する。 3)行動理論・モデルを用いた問診票、保健指導プログラムや政策・事業を理解する。 4)行動理論・モデルを用いて、実際の保健指導プログラムや政策・事業の有効性を理解する。			
到達目標 1)健康に関する行動理論・モデルの基礎について説明できる。 2)健康に関する実際の行動を行動理論・モデルを用いて説明できる。 3)行動理論・モデルを用いた問診票、保健指導プログラムや政策・事業を立案できる。 4)行動理論・モデルを用いて、実際の保健指導プログラムや政策・事業の有効性の評価を説明できる。 (DP:専門知識・理解、研究能力・応用力に対応)			
成績評価の方法 提出されたレポート(70%)、発表(20%)、講義参加時の議論内容(10%)で総合評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回:基礎健康行動理論(1):健康行動理論とモデルの役割、ヘルスビリーフモデル、計画的行動理論 2回:基礎健康行動理論(2):社会的認知理論、トランスセオレティカルモデル、自己効力感、ストレスとコーピング 3回:基礎健康行動理論(3):ソーシャルマーケティング、ソーシャルネットワーク、ヘルスコミュニケーション 4回:ヘルスプロモーション:概念の歴史的経緯、ポピュレーションアプローチ、プリシードプロシードモデル 5回:健康の社会的決定要因:社会経済状況、ソーシャルキャピタル、ライフコース 6回:保健医療関連の計画:健康日本21、健やか親子21、医療計画、健康増進計画 7回:政策・事業への応用(1):予防接種、がん検診 8回:政策・事業への応用(2):たばこ対策、特定保健指導 9回:各論(1):肥満症 10回:各論(2):メタボリックシンドローム 11回:各論(3):2型糖尿病 12回:各論(4):慢性腎臓病 13回:様々な疫学研究、実践例を題材にした生活習慣病予防対策の実際(1) 14回:様々な疫学研究、実践例を題材にした生活習慣病予防対策の実際(2) 15回:様々な疫学研究、実践例を題材にした生活習慣病予防対策の実際(3) 授業及び学習の方法 適宜提示する参考図書、資料を用いて学習を行う。 関連する文献を検索し、系統的に要約を作成する。 この科目は遠隔授業と対面授業の併用で行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更したり、課題レポート等によって代替する場合があります。 自学自習のためのアドバイス			

2026 医学系研究科

社会医学の参考書、資料等も活用して予習、復習を行ってください。
自学自習（準備学習30時間＋事後学習30時間）

教科書・参考書等

特に、使用しない。

オフィスアワー

基礎臨床研究棟7階724、木曜日16時から17時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

一部の外部施設での講義実習等（実費負担、要相談）となる場合がある。授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

社会医学（産業医）や内科の実務経験のある教員が担当します。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687214-1) 臨床疫学 Clinical Epidemiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 春里 暁人, 宮武 伸行, NLANDU NGATU	関連授業科目 生物統計学 (Biostatistics)		
	履修推奨科目 生活習慣病予防論、健康測定・アセスメント (Lifestyle-related Noncommunicable diseases - NCDs prevention theory, Health Indicators & Assessment)		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間) [lectures & exercises (90' x 8 sessions) + self-study preparation/study (30')].			
授業の概要 疫学や予防医学について講義や演習を行う。具体的には、疫学の基礎、疫学の方法論、研究計画の設等について講義を行い、その内容を演習により深める。 (The course includes theoretical lectures and practical exercises on epidemiology and preventive medicine, including the fundamentals of epidemiology, methodologies, and research planning, enriched by practical exercises)			
授業の目的 1) 疫学の方法を理解する (understand epidemiological methods). 2) 臨床研究の設計を理解する (understand clinical research designs). 3) 社会調査の方法を理解する (understand social survey methods). 4) 疫学研究の倫理を理解する (understand the ethics of epidemiological research). (AB)			
到達目標 1) 疫学の方法について説明できる (be able to explain epidemiological methods). 2) 臨床研究の設計ができる (be able to design a clinical research). 3) 社会調査の設計ができる (be able to design social surveys). 4) 疫学研究の倫理的事項について説明できる (be able to explain the ethical aspects of epidemiological research). (DPのABに対応) [Achievement of this goal corresponds to grade level; the higher knowledge and practical skill demonstrated, the higher the grade received]			
成績評価の方法 授業への参加の程度(50%)、レポート等(50%)によりに評価する。 [Evaluation based on the frequency of class participation (50%) and reports/submissions (50%)]. 参加の程度とは出席の事ではなく、授業内での発言などを指す。 (participation refers not to attendance, but to activity or discussion (comment, question) re			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (course plan) 第1回 疫学の基礎 (疫学指標、バイアス、交絡、標本抽出法) (Fundamentals of Epidemiology (Health Indicators, Bias, Confounders, Sampling Methods)). 第2回 疫学研究 (エコロジカル研究、横断研究、症例対象研究、コホート研究) (Research Designs in Epidemiology (Ecological Studies, Cross-sectional Studies, Case-control Studies, Cohort Studies)) 第3回 介入研究 (RCT、その他[Interventional Study Designs (RCT & others)]) 第4回 臨床研究の設計 (調査の手順、サンプルサイズ、実施体制、研究費確保) [Designing a Clinical Research (Procedures, Sample Size, Implementation Structure, Funding)].			

2026 医学系研究科

第5回 社会調査の設計 (調査の手順、サンプルサイズ、調査票の作成、実施体制、研究費確保)

[Designing a Social Survey (Procedures, Sample Size, Questionnaire, Implementation Structure, Funding)]

第6回 社会医学分野の研究 (行政分野の研究の特徴、ヘルスサービスリサーチ)

[Research in the Field of Social Medicine (Characteristics of Research in the Administrative Field, Health Services Research)]

第7回 疫学研究と倫理 (関連法令、各種倫理指針、ガイドライン、IC、倫理委員会)

[Epidemiological Research and Ethics (Laws and Regulations, Various Ethical Guidelines, Guidelines, Informed Consent, Ethics Committee)]

第8回 人口保健統計の概要 (人口動態統計、その他官庁統計)

[Overview of Population and Health Statistics (Vital Statistics, other Government-sponsored Statistical Databases)]

授業及び学習の方法:小グループの対面、遠隔等の方法を用い、他の授業等と関連付けて行う。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

本授業では、各回の内容理解を深めるため、以下の自学自習を行うこと。

〈準備学修 (各回 約1.5~2時間)〉

指定教科書または配布資料の該当範囲を事前に通読する

講義テーマに関連する基本用語 (例: バイアス、交絡、研究デザイン等) を整理する

事前課題 (提示された場合) について、自身の考えをまとめる

〈事後学修 (各回 約1.5~2時間)〉

講義内容およびディスカッションの要点を整理し、ノートとしてまとめる

ケーススタディで扱った内容について、追加文献や公的統計資料を用いて理解を深める

研究デザインや解析手法について、自身の研究テーマに当てはめて考察する

〈推奨学習方法〉

厚生労働省やe-Statなどの公的統計データベースを活用する

PubMed等で関連論文を検索し、疫学研究の実例に触れる

小グループ内での議論内容を振り返り、自身の理解とのギャップを確認する

(総学修時間の目安: 準備学習15時間+事後学習15時間)

本コースは、講義とケーススタディおよびディスカッションを組み合わせた、双方向的なアプローチを採用する。

進行中の研究データと公表されている疫学データを用いた理論的かつ実践的な教育アプローチを採用し、

能力開発のための分析手法に関する知識とスキルを提供させる。

[This course employs an interactive approach combining lectures, case studies, and discussions.

It utilizes theoretical and practical educational approaches using ongoing research data and published epidemiological data,

providing knowledge and skills in relation to analytical methods for capacity-building in health data science.]

教科書・参考書等

教科書 ロスマンの疫学、篠原出版新社 (Rothman K. J. Epidemiology: An Introduction; Shinohara publishing Co.)

参考書 国民衛生の動向、厚生統計協会 (Trends in National Health, Ministry of Health, Labor and Welfare Statistics; Japan)

オフィスアワー

木曜日: 16時~17時 (basically on Thursdays, 16: 00 - 17: 00)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

臨床研究の経験のある教員が担当する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687215-1) 生物統計学 Biostatistics	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 春里 暁人, 宮武 伸行, NLANDU NGATU	関連授業科目 臨床疫学 (Epidemiology)		
	履修推奨科目 生活習慣病予防論、健康測定・アセスメント (Lifestyle-related NCDs prevention, Health indicators and Health assessment)		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間) [Lecture & exercise (90min. x8sessions) + self-study (15h. of preparation + 15h. of post-lecture study)]			
授業の概要 生物統計学について講義や演習を行う。具体的には、統計学の基礎について講義を行い、実際のデータ処理、統計処理を行うことにより習得を深める。 (This course will include theoretical lectures and practical exercises on biostatistics. Specifically, it will cover the fundamentals of statistics through lectures, followed by hands-on practice on data processing and statistical analysis to deepen understanding.)			
授業の目的 1) 統計学の基礎を理解する。(understand the fundamentals of statistics) 2) 各種統計モデルを理解する。(understand various statistical models using in Health sciences) 3) 統計ソフトを用いて分析ができる。(Be able to perform data analysis using statistical software) (DP: AB)			
到達目標 1) 統計学の基礎について説明できる。(be able to explain the basics of biostatistics) 2) 各種統計モデルについて説明できる。(be able to explain various statistical models) 3) 統計ソフトを用いて分析ができる。(be able to perform data analysis using statistical software) (DPのABに対応)			
成績評価の方法 授業への参加の程度(50%)、レポート等(50%)によりに評価する。 参加の程度とは出席の事ではなく、授業内での発言などを指す。 [Evaluation will be based on participation in class (50%) and reports/submissions (50%). Participation does not refer to attendance, but activity during lecture such as asking questions, com			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (Content) 第1回 確率分布と推論、仮説検定 (Probability Distribution and Inference, Hypothesis Testing) 第2回 相関と回帰、重回帰分析 (Correlation and Regression, Multiple Regression Analysis) 第3回 分散分析、共分散分析 (Analysis of Variance, Analysis of Covariance) 第4回 ロジスティック回帰分析 (Logistic Regression Analysis) 第5回 生存分析 (Survival Analysis) 第6回 主成分分析と因子分析 第7回 メタアナリシス、質的研究 第8回 クラスタ分析、ビッグデータの解析 授業及び学習の方法:小グループの対面、遠隔等の方法を用い、他の授業等と関連付けて行う。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 本授業では、統計解析手法の理解と応用力を養うため、以下の自学自習を行うこと。 (準備学修 (各回 約1.5~2時間)) 指定教科書または配布資料の該当範囲を事前に通読する 基本概念 (例: 確率分布、仮説検定、回帰分析など) の定義と前提条件を整理する 講義で扱う解析手法について、簡単な例題を用いて概要を把握する			

2026 医学系研究科

〈事後学修（各回 約1.5～2時間）〉

講義内容および演習で扱った解析手法を復習し、手順を整理する

配布データまたは公開データ（e-Stat等）を用いて、実際に統計解析を行う

解析結果の解釈について、自身の研究テーマや公衆衛生データに当てはめて考察する

〈推奨学習方法〉

統計ソフトウェアを用いた実践的な解析演習を行う

公開データベース（e-Stat、WHO、厚生労働省統計など）を活用する

学術論文を読み、各解析手法がどのように用いられているかを確認する

（総学修時間の目安：準備学習15時間＋事後学習15時間）

教科書・参考書等

今日から使える医療統計（新谷歩）

オフィスアワー

木曜日：16時～17時（Thursday, 16:00 - 17:00）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料が、日本語の可能性はある。（The materials distributed in classes, etc., may be in Japanese.）

教員の実務経験との関連

臨床研究における統計サポートの経験のある教員が担当する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687217-1) 健康危機管理論 Health Crisis Management	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 春里 暁人, NLANDU NGATU	関連授業科目 医療政策論、国際保健論 (Health policy, international health)		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×8回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 人の健康に関連する危機について網羅的に説明する。理論の提示の他に、具体的な事例を用いて理解を深める。 (The course provides a comprehensive explanation on crises and risks related to human health. In addition to presenting theories, it uses concrete examples to deepen understanding.)			
授業の目的 1) 健康危機の概略を理解する。(acquire knowledge on health crises and health risks) 2) 自然災害における医療マネジメント、公衆衛生マネジメントについて理解する。(understand Medical Management in Disaster setting, Public health management) 3) 健康に影響する各種ハザードについて理解する。(understand various hazards that affect health)			
到達目標 1) 健康危機の概略を説明できる。(be able to explain health crises and health risks) 2) 自然災害における医療マネジメント、公衆衛生マネジメントについて説明できる。(explain Medical management in disaster settings & Public health management) 3) 健康に影響する各種ハザードについて説明できる。(be able to explain hazards that affect health) 4) 労働災害、過労死について説明できる。(be able to explain occupational accidents and death from overwork) 5) リスク管理について説明できる。(be able to explain risk management) (AB)			
成績評価の方法 授業への参加の程度(50%)、レポート等(50%)によりに評価する。 参加の程度とは出席の事ではなく、授業内での発言などを指す。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 健康危機管理概論 (健康危機の種類、法制度、体制、危機管理組織) (Introduction to Health Crisis/Risk Management) 第2回 災害と医療・公衆衛生マネジメント (風水害、地震、津波、噴火、爆発、紛争、テロ) (Disasters and Medical/Public Health Management) 第3回 避難所における危機管理 (Crisis Management in Evacuation Centers) 第4回 放射線被ばく、化学物質、その他危険物 (Radiation Exposure, Chemical Substances, and Other Hazardous Materials) 第5回 感染症 (アウトブレイク、食中毒、サーベイランス) (Communicable Infectious Diseases) 第6回 労働災害 (職業性疾病、作業関連疾患、過労死、メンタルヘルス) (Occupational Accidents (Occupational Diseases, Work-Related Illnesses, Death from Overwork, Mental Health)) 第7回 リスクアセスメント (防災、職域、安全) とその管理 [Risk Assessment (Disaster Prevention, Workplace Safety)] 第8回 リスクコミュニケーション (災害心理学、倫理的配慮、その他) (Risk Communication) 授業及び学習の方法:小グループの対面、遠隔等の方法を用い、他の授業等と関連付けて行う。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 本授業では、健康危機管理における実践的な判断力および対応力を養うため、以下の自学自習を行うこと。			

2026 医学系研究科

〈準備学修（各回 約1.5～2時間）〉

配布資料や指定文献を通読し、各回のテーマに関する基本概念（例：災害種別、リスク評価、感染症対策等）を整理する

過去の災害事例（例：東日本大震災、感染症アウトブレイク等）について概要を確認する

提示された課題やケースについて、自身の対応方針を事前に検討する

〈事後学修（各回 約1.5～2時間）〉

講義およびディスカッションで扱った事例について、対応の流れや意思決定プロセスを整理する

自身の専門領域や所属組織を想定し、危機発生時の対応計画（初動対応、情報共有、連携体制等）を検討する

関連するガイドライン等（厚生労働省、自治体、WHO等）を参照し、実務との関連性を理解する

〈推奨学習方法〉

災害・感染症対応に関する公式ガイドラインや報告書を参照する

グループディスカッションでの他者の意見と比較し、自身の判断の妥当性を振り返る

実際の危機事例をもとに「自分ならどう対応するか」を常に考える習慣を持つ

（総学修時間の目安：準備学習15時間＋事後学習15時間）

教科書・参考書等

特に指定しない。授業の中で有用な資料、情報を提示する。

オフィスアワー

木曜日：16時～17時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ADXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687218-1) 国際保健論 Global Health	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ADX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 春里 暁人.NLANDU NGATU	関連授業科目 医療政策論、健康危機管理論 (Healthcare policy theory, health crisis management theory)		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×8回+自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間) [90' lecture x 8sessions + self-study (15h of preparation + 15h of post-lecture study)]			
授業の概要 本講座では、世界規模で検討・解決すべき様々な健康問題について解説する。また、国際協力や開発プロジェクトの概要も紹介します。事例研究を通して、これらのテーマへの理解を深める。 (The course explains various health issues to be considered and resolved on a global scale. It also provides an overview on international cooperation and development projects. Case studies will be examined to deepen understanding of the topics)			
授業の目的 1) 国際的な健康問題について理解する。(understand international health issues) 2) 健康関連のSDGsについて理解する。(understand the Role of International Health Agencies and health-related SDGs) 3) 国際協力と発展を促進するために、異文化医療とヘルスケア、および関連する能力の重要性を理解する。(understand the importance of "Trans-cultura			
到達目標 1) 国際的な健康問題について説明できる。(be able to explain International Health issues) 2) 健康関連のSDGsについて説明できる。(be able to explain the Role of International Health Agencies and health-related SDGs) 3) 国際協力・開発に関する医学とヘルスケアにおける異文化間のコンピテンシーについて説明できる。(be able to explain about Trans-cultural Medicine & Healthcare and related competencies) (DP: AD)			
成績評価の方法 授業への参加の程度(50%)、レポート等(50%)によりに評価する。 参加の程度とは出席の事ではなく、授業内での発言などを指す。 授業への参加頻度と報告頻度が高いほど、成績も高くなる。 (Evaluation based on the frequency of class participation (50%) and reports (50%); Class participation refers not to attendance, but to activity/discussion relate			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (course plan) 第1回 国際保健学概論 (Introduction to International Health) 第2回 健康関連のSDGsについて (Health-related SDGs) 第3回 感染症 (Communicable Infectious Diseases) 第4回 紛争、災害と国際保健 (Conflict, Disaster, and International Health) 第5回 医学とヘルスケアにおける異文化間のコンピテンシー (Trans-cultural Medicine and Healthcare and related competencies) 第6回 日本の国際協力、NPO/NGO (International Cooperation and Japanese NGO/NPO contribution) 第7回 事例検討 (Case Studies) 第8回 まとめ (summary) 授業及び学習の方法:小グループの対面、遠隔等の方法を用い、他の授業等と関連付けて行う。 本コースは、理論講義と国際的な現場からの実践的な報告で構成され、ケーススタディによって内容がさらに充実する。			

2026 医学系研究科

(The course includes theoretical lectures and practical field reports from international settings, enriched by Case studies)

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

本授業では、国際保健に関する多様な課題を理解し、グローバルな視点で考察する力を養うため、以下の自学自習を行うこと。

〈準備学修（各回 約1.5～2時間）〉

指定資料や関連文献を通読し、各回のテーマ（SDGs、感染症、災害、国際協力等）の基本概念を整理する
WHO、UN、JICA等の公式資料や報告書を参照し、最新の国際的動向を把握する
対象となる国・地域の保健医療体制や社会背景について事前に調べる

〈事後学修（各回 約1.5～2時間）〉

講義およびケーススタディの内容を整理し、各国・地域間の違いや共通点を比較する
国際保健課題について、日本の立場からどのように貢献できるかを考察する
関連論文や国際機関の報告書を読み、実際の政策や介入の事例を理解する

〈推奨学習方法〉

WHO、World Bank、UNICEF、JICA等の公開データ・報告書を活用する
国際比較の視点を持ち、「なぜその国でその問題が起きているのか」を考える
ケーススタディにおいて、自身が現場責任者であった場合の対応を想定する

（総学修時間の目安：準備学習15時間＋事後学習15時間）

教科書・参考書等

教科書 国際保健医療学 第3版 杏林書院

参考書 Textbook of Global Health 4th Edition, Oxford University Press

オフィスアワー

木曜日：16時～17時 (basically, lectures are scheduled to be given on Thursdays, 16:00 - 17:00)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-LP 授業科目名 (講義コード:L687219-1) 法医学特論 Advanced course of Forensic Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 LP	単位数 2	
担当教員名 村瀬 壮彦	関連授業科目 死因究明技術の開発		
	履修推奨科目 死因究明技術の開発		
学習時間 講義・実習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 法医学で取り扱う頻度の高い「ヒトの死」について、因果関係も含めてその病態メカニズムについての科学的な解析が求められる。それらに十分対応できるように、外因死の病態メカニズムについて講義する。特に近年、マクロのレベルのみならず、分子レベルでの病態メカニズムの理解も求められていることから、死に至るそれぞれの原因ごとの病態メカニズムが十分理解できるように、現状とその限界を示しながら、今後の課題についても講義・議論する。			
授業の目的 法医学では外因死の病態メカニズムの理解が重要であり、以下の項目について学習する。 1) 死因論を理解する。 2) 損傷や窒息の病態を理解する。 3) 異常環境による病態を理解する。 4) 化学物質による影響や病態を理解する。			
到達目標 1) 死因論を理解し、死亡原因の評価に活用できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」「③倫理観・社会的責任」に対応) 2) 損傷や窒息の病態を評価できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応) 3) 異常環境による病態を評価できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応) 4) 化学物質による影響や病態を評価できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 口頭試問、レポート、グループ討論などを総合的に評価する。 (口頭試問50%、レポート25%、グループ討論25%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 授業形態は対面授業で行う。 1回 法医学概論(法医学の領域) 2回 法医学概論(死と法) 3回 死因論(死因と病態) 4回 死因論(因果関係) 5回 損傷の評価と病態(損傷の見方) 6回 損傷の評価と病態(損傷の評価) 7回 窒息の病態(窒息のメカニズムと病態) 8回 窒息の病態(窒息死の診断) 9回 異常環境による病態(高温環境による死亡) 10回 異常環境による病態(低温環境による死亡) 11回 化学物質の影響と病態(中毒学総論) 12回 化学物質の影響と病態(中毒学各論) 13回 個人識別技術とその応用(血液型、DNA検査) 14回 個人識別技術とその応用(個人識別技術の応用) 15回 社会的役割とまとめ 【授業及び学習の方法】 講義、見学及びグループ学習。興味ある病態に関する最新の知見について系統的に文献検索し、考察したものをまとめる。			

2026 医学系研究科

【準備学習及び事後学習】

各項目につき、参考書や文献を読み、授業で示される病態が理解できるよう準備する（2時間×15回）。

授業で示した病態を把握する最新の手法について考察し、要点をまとめる。（2時間×14回）

法医学的診断の上で課題となる点を抽出し、資料にまとめる。（2時間）

教科書・参考書等

教科書 特に指定なし

参考書 Madea B (ed). Handbook of Forensic Medicine (2nd Ed), John Wiley & Sons Ltd, 2022.

オフィスアワー

時間帯：月曜日 16:00-17:00（事前にアポイントメントを取ること）

場所：基礎臨床研究棟1階 法医学研究室

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

基本的事項のみならず、最新の知見にも触れていきます。

講義・配布資料で利用する言語は基本的に日本語となります。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ACDM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687220-1) 医学教育学特論 Special Lecture for Medical Education	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ACD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 坂東 修二, 横平 政直	関連授業科目 なし		
	履修推奨科目 なし		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 医学教育とは、文字通り大学卒業後医師になるための知識・技能を学生に習得させようとするものである。 かつての医学部における教育は、知識偏重で、技能も十分には習得できるものではなく、手技の習得は卒後の実践に委ねられていた。その後、診察手技をより一層習得させるために、臨床実習の充実が求められるようになり、最近では見学型から診療参加型実習への転換が求められている。カリキュラムのあり方も従来のologyからアウトカム基盤型カリキュラムへの移行が進んでいる。 さらに、近年では、医師としての態度教育も重視されるようになり、コミュニケーション教育や医師としての倫理観を中心とした、医師としてのプロフェッショナルリズム教育が求められてきている。 本論では、医学教育の変遷を軸にして、今日の医学教育で求められている各要素について概説する。			
授業の目的 1) 今日の医学教育の特徴を理解する 2) プロフェッショナルリズム教育の必要性について理解する 3) 6年間のカリキュラムのそれぞれの段階について理解する 4) 参加型臨床実習のあり方について理解する 5) 今日の医学教育についての問題点について理解し、改善案を示すことができる			
到達目標 1) 今日の医学教育の特徴を説明できる (DP: 専門知識・理解) 2) プロフェッショナルリズム教育の必要性とその概要を説明できる (DP: 倫理観・社会的責任) 3) 6年間のカリキュラムのそれぞれの段階について大まかに説明できる (DP: 専門知識・理解) 4) 参加型臨床実習のあり方について説明できる (DP: 研究能力・応用力) 5) 今日の医学教育についての問題点について説明できる (DP: 研究能力・応用力)			
成績評価の方法 各回のディスカッション内容と授業への取り組み姿勢 (60%)、及び、提出されたレポート (40%) をあわせて総合評価する。 秀: 90点以上100点まで、授業科目の到達目標を極めて高い水準で達成している 優: 80点以上90点未満、授業科目の到達目標を高い水準で達成している。 良: 70点以上80点未満、授業科目の到達目標を標準的な水準で達成している。 可: 60点以上70点未満、授業科目の到達目標を最低限の水準で達成している。 不可: 60点未満、授業科目の到達目標を達成していない。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 この科目は原則として対面授業を行います。一部の回では遠隔授業を行います。なお、状況によっては全ての回を対面又は遠隔に変更する可能性があります。 第1回 医学教育の変遷: アウトカム基盤型教育の導入 第2回 香川大学医学部における教育カリキュラム改革の概要; プロフェッショナルリズム教育も含む 第3回 医学教育における教養教育の必要性と概要 第4回 自然科学系準備教育の概要 第5回 基礎医学教育の概要 第6回 研究心の涵養についての取組 第7回 臨床医学教育の概要: 特に臓器別講義について 第8回 社会医学教育の概要			

2026 医学系研究科

- 第9回 共用試験とスチューデントドクター制度
- 第10回 臨床実習のあり方：診療参加型実習とは
- 第11回 卒後臨床研修との連続性について
- 第12回 医療面接の体験実習(ロールプレイ)
- 第13回 医学教育分野別評価とは
- 第14回 今日の医学教育における問題点 (グループワーク)
- 第15回 まとめとレポート作成

香川大学医学部のカリキュラムを資料として、できるだけ学生とのディスカッションを交えて進める。第1回から13回までは主として講義形式で行う。

【自学自習のためのアドバイス】

香川大学医学研究科シラバス、および臨床実習実施要項 (いずれも医学部HPから参照可能) に予め目を通しておくこと。

教科書・参考書等

- ・香川大学医学研究科シラバス、および臨床実習実施要項
- ・「日本の医学教育の挑戦」、岐阜大学医学教育開発センター監修、篠原出版新社 (2012年)
- ・医学教育分野別評価基準 (<https://www.jacme.or.jp/accreditation/wfmf.php>)

オフィスアワー

講義終了後に医学部講義棟2階の医学部教育センターで受ける。

水曜日 16:30 ~ 17:30 医学部教育センター (講義棟2階) (あらかじめメール連絡ください:

yokohira.masanao.tm@kagawa-u.ac.jp)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

教員の実務経験との関連

医学部医学科で主として医学教育の企画・運営に携わっている教員が担当する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687223-1) 生体分子立体構造学 Introduction to structural biology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 吉田 裕美	関連授業科目 なし		
	履修推奨科目 なし		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 ヒトを含めた様々な生物のゲノム解析研究が進み、各遺伝子のコードするタンパク質の構造・機能解析に興味が集まっている。本講義では、タンパク質の3次元構造決定法について、その基礎的な理論・実践について解説する。タンパク質の立体構造の基礎から説明し、最近の分子設計に関わる研究の理解を助けるため、最新の構造生物学の研究成果を紹介する。			
授業の目的 タンパク質、核酸、多糖などの生体分子の3次元構造は、それぞれの生体内での機能と密接に関係しており、生体分子の3次元構造決定は、生化学・分子生物学の発展に大きく貢献している。本講義では、生体分子の3次元構造を決定する強力な手法であるX線結晶解析の原理と実際について理解し、タンパク質の3次元構造と機能との関係について最新の研究成果を概観することを目的とする(ABX)。			
到達目標 (1) タンパク質 X線結晶解析に関する論文を読むことができるようになる。(【大学院課程のDP】A: 専門知識・理解, B: 研究能力・応用力に対応) (2) タンパク質の立体構造を分子グラフィックス上に表示し、構造的特徴について説明できるようになる。(【大学院課程のDP】A: 専門知識・理解, B: 研究能力・応用力に対応) (3) タンパク質 X線結晶解析についての現状を理解し、将来、機会・必要に応じて当該研究分野に参入できるようになる。(【大学院課程のDP】A: 専門知識・理解, B: 研究能力・応用力に対応)			
成績評価の方法 講義の受講状況(授業中のディスカッション, 授業に対する質問の積極性等)(40%) および講義の最終日に行うプレゼンテーションにて理解度の判定(60%)を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 (1) 生物学と構造化学の融合—構造生物学とは (2) 生体高分子の基本構造 (3) 結晶学の基礎 (4) X線結晶解析の基礎理論 (5) X線結晶解析の方法と実践 (6) タンパク質の立体構造の基礎 (7) 基本的なバイオインフォマティックスの手法1 (8) 基本的なバイオインフォマティックスの手法2 (9) 分子グラフィックスの使用法1 (10) 分子グラフィックスの使用法2 (11) 生体内で機能するタンパク質の構造 (12) タンパク質の機能変化を目指した変異タンパク質の合成研究 (13) 構造に基づく医薬品設計におけるX線結晶解析 (14) データベースの使用法と構造生物学の論文の読み方 (15) プレゼンテーションとフリーディスカッション 【授業及び学習の方法】 本講義は、講義と演習(実習または見学)を効果的に混ぜながら行います。後半部分については、最新の研究成果に変更することがあります。 この科目は基本的に、対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を遠隔へ変更する可能性があります。			

2026 医学系研究科

【自学自習のためのアドバイス】

各回、準備学習として関連する項目について生化学・分子生物学の教科書を復習しておく（各回準備学習 2時間程度、計30時間程度）。講義後、演習問題・参考論文を示すのでそれらを読解してみる（各回事後学習 2時間程度、計30時間程度）。

教科書・参考書等

教科書 資料を配布する。

参考書 「構造生物学－原子からみた生命現象の営み」、樋口芳樹、中川敦史／著（共立出版）
「タンパク質のX線結晶解析法」、J. ドレンド／著、竹中、勝部、笹田、若槻／訳（シュプリンガー・ジャパン）

オフィスアワー

臨床研究棟551号室、各授業終了後、あるいはメールにてアポイントメントをとってください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

現在においても、毎週のように重要な生体分子の立体構造が報告され続けています。機会があればnatureやScienceに目を通してみてください。

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性あります。

教員の実務経験との関連

構造生物学分野で15年以上実務経験がある教員が授業を行います。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード -abxM--Lx 授業科目名 (講義コード:L687224-1) 実験動物学・動物遺伝学 Laboratory Animal Science and Experimental Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 ・	DP・提供部局 abx・M	対象学生・特定プログラムとの対応
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 伊藤 日加瑠	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 学習時間 講義・演習90分 x 15回 + 自主学習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 医学研究においてマウスをはじめとする多くの実験動物が使われている。実験動物学全般について基礎的な説明を行う。 臓器の幹細胞や胚性幹細胞さらにiPS細胞を用いた再生医療・再生医学の研究の進展が著しい。これらの研究の基礎となっている発生生物学についてふれると共に、実験動物を用いた幹細胞研究および関連分野の話題を取り上げる。特にマウスの発生過程に関して概説する。 ヒトやマウスを初めとするゲノムプロジェクトの進展により、色々な動物種のゲノム塩基配列が決定された。しかし、遺伝子の生体内における機能については塩基配列の解析のみではわからないため、様々な遺伝子組換え動物が作られ、多くがヒト疾患モデル動物として医学研究に必須の存在となっている。遺伝子組換え動物作出法およびゲノム編集技術についてもふれる。			
授業の目的 授業の目的 学生が実験動物および幹細胞を用いた研究に関する基本的な知識を広く身に付けることを目的とする。また、身に付けた知識を自身の言葉で説明できる能力を養うことも目的とする。さらに、研究資源として必須となっている遺伝子組換え動物の作出法・利用法を理解することにより、学生自身の研究活動に役立てることを目的とする。			
到達目標 1. 学生が最低限、実験動物および幹細胞を用いた研究に関する基本的な知識を広く身に付けることができる (DP:A 専門知識・理解に対応)。 2. 学生は身に付けた基礎的な知識を適切に説明することが可能となる (DP:A 専門知識・理解に対応)。 3. 学生は遺伝子組換え動物の作出法・利用法を理解できるようになり、学生自身の研究活動に役立てることが可能となる (DP:B 研究能力・応用力に対応)。 4. 学生は実験動物の適切な取扱い法を学び、動物実験の基本手技を理解し実践できる (DP:B 研究能力・応用力に対応)。			
成績評価の方法 成績評価の方法と基準 テストおよびレポート提出により評価を行う (テスト: 50%、レポート: 50%)。 テストでは、最低限身に付けるべき基礎的な知識の習得を確認する (到達目標 1 に対応)。レポートでは理解した知識を自身の言葉で適切に説明できるかどうかを確認する (到達目標 2. 3. 4 に対応)。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 A. 実験動物学概論 (8コマ) ①実験動物と動物実験: 定義と必要性 ⑤各論: マウス (投与方法などの実験手技) ②適正な動物実験と関連法規、動物倫理 ⑥各論: ラット (投与方法などの実験手技) ③遺伝学的制御、微生物学的制御、環境制御 ⑦各論: その他の実験動物 (投与方法などの実験手技) ④人獣共通感染症 ⑧実験動物の手術様式などの基本手技 B. 幹細胞研究と実験動物 (2コマ) ⑨発生学・発生工学概論 ⑩幹細胞の基本性質、臓器・組織幹細胞、胚性幹細胞 (ES細胞)、iPS細胞 C. モデル動物作製 (3コマ) ⑪疾患モデル動物の作製法 ⑫ゲノム編集動物作製法 ⑬遺伝子導入			

2026 医学系研究科

D. 生命情報科学、動物遺伝学

⑭概論

⑮データベース紹介

【授業及び学習の方法】

資料の配布、インターネット上の動画やデータベース等を利用した講義を中心に行う。

この科目は対面授業およびオンデマンド（動画視聴）方式で行います。

【自学自習のためのアドバイス】

配布資料、インターネット上の動画やデータベース等を利用した自主学習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

教科書・参考書等

特に指定しない

オフィスアワー

オフィスアワー：金曜日 16時～17時（その他にも、メール等で予め確認のうえ、随時受け付ける）。場所：動物実験施設1階

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

主にマウスを用いた研究活動をしてきました。その経験を踏まえた講義を実施します。

また、オンデマンド授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができません。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687225-1) 糖鎖構造解析 Analysis of glycan structure	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 中北 慎一	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 15回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 糖質は自然界において広く存在する生体物質の一つであり、その動きは非常にダイナミックである。例えば植物は光エネルギーを使って光合成し、グルコース(単糖)を合成する。このグルコースをデンプン(多糖:グルコースが α 1-4結合したもの)にしてエネルギー貯蔵物質として利用したり、セルロース(多糖:グルコースが β 1-4結合したもの)として支持体として利用される。このような糖質と呼ばれる生体物質は、主に炭素、水素、酸素からなり、炭水化物とも呼ばれる物質である。近年、これらの糖質がエネルギー代謝や支持体以外に生体内で色々な役割を担っていることが分かり、多くの知見が得られるようになった。本講義では、これらの知見を化学という方法論で読み解き、その解説を行う。			
授業の目的 糖の自然界での構造・機能を理解するために必要な以下の項目を学ぶことを目的とする (1) 単糖の構造を理解する (2) 単糖の性質を理解する (3) 糖鎖の構造を理解する (4) 糖鎖の生合成系を理解する			
到達目標 糖の構造や基本的性質を理解し、生体内での役割についての知見を得る。また、ライフサイエンスにおける糖の意味についても考えていく。 (1) 単糖の化学構造を説明できる(化学構造の理解は生体反応の基本 A) (2) 単糖の化学的性質及び関与する化学反応を説明できる(化学反応の理解は停滞物質の流れの基本 A) (3) 糖鎖を構成する糖の組成及び構造を説明できる(糖の生体認識を理解するために必要 B) (4) 糖鎖の生合成に関与する反応系を説明できる(糖鎖の機能を理解するために必要な情報 B)			
成績評価の方法 講義中の発言(知識10%、論理性20%、正確さ20%) 50%、レポート50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 基本対面で行うが、状況によって遠隔講義や、課題レポート等で行う場合もある。 1. 導入 2. 単糖の構造 3. 単糖の性質 4. 単糖の化学反応 5. 単糖の生体内合成 6. 単糖の生理機能 7. 糖鎖の構造 8. 糖鎖の化学合成 9. 糖鎖の生体内合成 10. 糖鎖の構造解析 11. 多糖の構造解析 12. オリゴ糖の機能解析(酵素) 13. オリゴ糖の機能解析(レクチン) 14. オリゴ糖の機能解析(ウイルス) 15. まとめ 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】			

2026 医学系研究科

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）

Essentials of Glycobiology (<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/books/NBK579918/>)の各項目(特にChapter2, 5, 7, 9)に目を通しておく

教科書・参考書等

教科書は使用しない。レジュメなどを配る

参考書: Essentials of Glycobiology, Cold Spring Harbor Laboratory

オフィスアワー

水曜のお昼休み（臨床研究棟3階 糖鎖機能解析研究部門）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

1. 講義で配布するレジュメの内容を理解し、必要な情報があれば書き込みを行ってください。
2. 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。
3. 授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687227-1) 分子生理学特論 An Introduction to Molecular Physiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 藤村 篤史・神鳥 和代	関連授業科目 特になし		
	履修推奨科目 特になし		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 分子生理学特論では、担当教員はさまざまな生命現象を分子レベルから概説します。それぞれの現象について、現在までに解明されている点と解明されていない点をあげ、それに至るまでの経緯や解析方法について概説します。 Advanced Molecular Physiology provides an overview of various biological phenomena at the molecular level. For each phenomenon, we will discuss what is understood and what is not, and outline the background and analytical methods used to reach this conclusion.			
授業の目的 さまざまな生命現象に関して、分子レベルでの理解を深めることで、科学の進歩を学習するとともに、新たな課題を明確化することで、学生諸兄の専門知識・理解力を向上させつつ、研究能力・応用力の底上げを図ることで、研究及び診療における視点を広げることを目的とします。 The aim of this programme is to explore advances in science and address new questions by deepening our understanding of various			
到達目標 1. 生命の成り立ちを理解するとともに細胞内部の構築と機能を説明することができる。 2. 生命現象に必要な細胞内外の物質の輸送機構を説明することができる。 3. 細胞内情報伝達機構の種類とその各々の概略を説明することができる。 (1~3までDP「専門知識・理解」に対応) 4. 生理学の知見を基に、疾患について関連付けて説明することができる。 (DP「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 分子生理学特論の全講義数の3分の2以上に出席し、かつ、各回の講義に関するレポート(*)を提出した場合にのみ、分子生理学特論試験(本試験、再試験)の受験資格を与える。分子生理学特論の本試験では、100点満点の試験素点が60点以上のものを合格とする。本試験に不合格の場合には一度だけ再試験を行い、100点満点の試験素点が60点以上のものを合格とする。再試験の後、再再試験は実施しない。なお、本試験、再試験のいずれもマークシート形式による出題を行う予定である。 (*)レポートの様式は初回講義内で明示する。			
成績評価の基準 (*)レポートの様式は初回講義内で明示する。 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 「授業計画」 1. 転写と翻訳の分子生理学(1/3)セントラルドグマの概説 (藤村) 2. 転写と翻訳の分子生理学(2/3)翻訳開始・翻訳伸長の概説 (藤村) 3. 転写と翻訳の分子生理学(3/3)翻訳終結の概説 (藤村) 4. 神経系細胞の可塑性(1/3)アストロサイトの可塑性 (藤村) 5. 神経系細胞の可塑性(2/3)オリゴデンドロサイト・シュワン細胞の可塑性 (藤村) 6. 神経系細胞の可塑性(1/3)神経細胞の可塑性と神経幹細胞 (藤村) 7. 上皮細胞の可塑性(1/3)上皮-間葉移行(EMT)の概説 (藤村) 8. 上皮細胞の可塑性(2/3)間葉-上皮移行(MET)の概説 (藤村) 9. 上皮細胞の可塑性(3/3)EMT/METの関連する疾患 (藤村) 10. 細胞内代謝の可塑性(1/3)代謝経路の概説 (藤村) 11. 細胞内代謝の可塑性(2/3)Warburg Effectの概説 (藤村) 12. 細胞内代謝の可塑性(3/3)One-carbon metabolismの概説 (藤村)			

2026 医学系研究科

13. 組織微小環境の可塑性(1/3)組織微小環境の構成要素の概説 (藤村)
14. 組織微小環境の可塑性(2/3)免疫系細胞の変容 (藤村)
15. 組織微小環境の可塑性(3/3)非免疫系細胞の変容 (藤村)
16. メカノバイオロジーの分子生理学 (1/3)メカノセンシングに関連するシグナル (藤村)
17. メカノバイオロジーの分子生理学 (2/3)メカノ応答性転写機構 (藤村)
18. メカノバイオロジーの分子生理学 (3/3)メカノ応答性翻訳機構 (藤村)
19. 分化・脱分化・転分化の分子生理学 (1/3)分化を司るシグナルと転写因子 (藤村)
20. 分化・脱分化・転分化の分子生理学 (2/3)脱分化を司るシグナルと転写因子 (藤村)
21. 分化・脱分化・転分化の分子生理学 (3/3)転分化を司るシグナルと転写因子 (藤村)
22. Hippoシグナル経路の分子生理学 (1/3)Hippoシグナルの構成要素 (藤村)
23. Hippoシグナル経路の分子生理学 (2/3)Hippoシグナルの制御因子 (藤村)
24. Hippoシグナル経路の分子生理学 (3/3)Hippoシグナルと細胞の可塑性 (藤村)
25. 腫瘍性疾患の分子生理学(1/3)がんシグナル概説 (藤村)
26. 腫瘍性疾患の分子生理学(2/3)がんの動態を司る転写機構 (藤村)
27. 腫瘍性疾患の分子生理学(3/3)がんの動態を司る翻訳機構 (藤村)
28. 生体恒常性の分子生理学 (藤村)
29. エピジェネティクス創薬 (藤村)
30. エピトランスクリプトーム創薬 (藤村)

本試験・再試験

講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)

「授業及び学習の方法」

授業は講義中心で実施します。各回の講義内容に関して、各自1問以上選択肢形式の問題及び正答案を作成し、次回講義の冒頭でそれらを用いた小テストを実施することで知識のインプットとアウトプットを図ります。授業では基本となる知識目標が設定され、これを理解するために必要な資料がweb配布されます。また、各講義のテーマに沿った論文を読むことで、その領域の現状と課題を俯瞰します。ただし、受講者の状況によりレポート課題の提出をもって講義に置き換える場合があります。

「自学自習のためのアドバイス」

本講義では研究の作法について学び、自らが企画立案できる方法を学ぶ。学生諸兄は、自らの専門科に関係なく、とにかく日頃から論文を読む習慣をつけるべきであります。

教科書・参考書等

特定のものは指定しません。

オフィスアワー

毎週木曜日12:00~13:00。直前に電話(087-891-2095)で在室を確認してください。お急ぎでなければ各教員のアドレスまでメールにてお問い合わせください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

「自学自習のためのアドバイス」に記載の通りです。

なお、本授業の教授言語は日本語であり、英語での実施には対応しておりません。

教員の実務経験との関連

生理学エデュケーターによる講義

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L688013-1) 医療情報学 Medical Informatics	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 4	
担当教員名 三上 史哲, 横井 英人	関連授業科目 医療情報学(腫瘍学における情報システム)		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×12回+演習180分×18回+自学自習(準備学習60時間+事後学習:60時間)			
授業の概要 医療情報の基礎となる情報技術の原理についての概観を初めに説明する。その後、具体的に病院情報システム・電子カルテを題材に、現実に運用している情報システムの内容を説明する。更に、各部門システムや院外における地域医療ネットワークなど、より現場に立脚したシステムの構築法に言及する。また、これらを支える医療情報の標準化理論・医療用語集の作成手法を習得するための講義、演習を行う。以上の知識を元に、様々なデータ処理について学び、可能な限り実際のデータ処理を行い、研究に応用できるようにする。			
授業の目的 情報科学の発展は、めざましいものがあり、コンピュータ科学の進展と共に、その成果は複雑な社会現象の解明に応用し得るようになった。医学・医療分野でも例外ではなく、情報通信処理技術を駆使して、医学・医療の発展を目指すのが医療情報学の主要な学問領域である。 医療の実践の場では、電子カルテをはじめとする病院情報システムが診療・研究・教育の基盤となっている。また、医療データの利活用やAIの導入が進む中で、医療従事者が医療情報の特性や情報システムの仕組みを理解することは不可欠である。 このような医療情報分野の概略を学			
到達目標 1. 情報処理技術の基礎を修得している。(A、B) 2. 病院情報システムの内容を説明できる。(A、B) 3. 地域医療ネットワークの内容を説明できる。(A、B) 4. 医療情報の標準化の内容を説明できる。(A、B) 5. 医療用語集の内容・作成手法を説明できる。(A、B) 6. 大量データ処理の手法を理解し、行うことができる。(A、B) 7. 自然言語処理の手法を理解し、行うことができる。(A、B) 8. 臨床研究用データ収集の内容を説明できる。(A、B)			
成績評価の方法 レポート(50%)、小テスト(25%)、期末テスト(25%)で総合的に判断する			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回(講義): 情報処理概論(ネットワーク技術・データベース技術) 第2回(実験・実習): 情報処理概論(ネットワーク技術・データベース技術) 第3回(講義): 情報処理概論(システム開発と運用・システム管理) 第4回(実験・実習): 情報処理概論(システム開発と運用・システム管理) 第5回(講義): 医療情報概論(病院情報システム・電子カルテ) 第6回(実験・実習): 医療情報概論(病院情報システム・電子カルテ) 第7回(講義): 医療情報概論(部門システム・画像システム) 第8回(実験・実習): 医療情報概論(部門システム・画像システム) 第9回(講義): 医療情報概論(地域医療ネットワーク) 第10回(実験・実習): 医療情報概論(地域医療ネットワーク) 第11回(講義): 医療情報概論(個人情報保護・セキュリティ) 第12回(実験・実習): 医療情報概論(個人情報保護・セキュリティ) 第13回(講義): 医療情報概論(電子カルテ情報等の標準化) 第14回(実験・実習): 医療情報概論(電子カルテ情報等の標準化)			

2026 医学系研究科

- 第15回 (講義) : 医療情報概論 (医療情報システムの標準化)
- 第16回 (実験・実習) : 医療情報概論 (医療情報システムの標準化)
- 第17回 (講義) : 大量データ処理のための基礎知識
- 第18回 (実験・実習) : 大量データ処理 (収集)
- 第19回 (実験・実習) : 大量データ処理 (分析)
- 第20回 (実験・実習) : 大量データ処理 (出力)
- 第21回 (講義) : 自然言語処理概論
- 第22回 (実験・実習) : 自然言語処理演習 (形態素解析)
- 第23回 (実験・実習) : 自然言語処理演習 (構文・意味解析)
- 第24回 (実験・実習) : 自然言語処理演習 (文脈解析)
- 第25回 (講義) : 臨床研究用データ収集のための基礎知識
- 第26回 (実験・実習) : 臨床研究用データ収集演習 (データクレンジング)
- 第27回 (実験・実習) : 臨床研究用データ収集演習 (分析)
- 第28回 (実験・実習) : 臨床研究用データ収集演習 (出力)
- 第29回 (講義) : 総合課題
- 第30回 (実験・実習) : 総合演習

【授業形態】

対面授業を基本とする。最終的には履修者からの相談に応じて決定する。

【準備学習および事後学習のためのアドバイス】

一定のコンピュータリテラシー (Excelのマクロ若しくは関数でデータを成形できる程度) を前提とするため、このレベル (一般的なExcelの教科書 (初級・中級・上級) の中級を終了していること) を達成するために必要な学習を受講までの準備学習とする。また、各授業毎に事前・事後学習それぞれ2時間ずつが必要と想定している。

教科書・参考書等

【参考書】

1. 医療情報 第8版 医学医療編, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会, 篠原出版新社, 2025年, 3,600円(税別), ISBN : 978-4-86705-823-7
2. 医療情報 第8版 情報処理技術編, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会, 篠原出版新社, 2025年, 3,600円(税別), ISBN : 978-4-86705-824-4
3. 医療情報 第8版 医療情報システム編, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会, 篠原出版新社, 2025年, 3,600円(税別), ISBN : 978-4-86705-

オフィスアワー

授業終了後に医療情報部カンファレンスルーム (西病棟4F) で対応します。また、あらかじめメールや電話でアポイントを取れば、適宜対応します。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

一定のコンピュータリテラシー (Excelのマクロ若しくは関数でデータを成形できる程度) を有することを前提とします。質問があれば事前に相談してください。

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施しておりません。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687303-1) 中耳・内耳バイオイメージング Bioimaging of middle and inner ear	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 星川 広史・宮下 武憲	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 立体的で複雑な構造をしている中耳・内耳の構造を概説し、構造的制約のある器官や組織ではどのようなバイオイメージングが可能か、そしてバイオイメージングによりどのように解析できるかを理解できるよう講義する。			
授業の目的 中耳および内耳の複雑な解剖学的構造および生理学的機能を体系的に理解し、それを基盤として、これらの構造を可視化するためのイメージング手法の原理と適用可能な技術について学ぶ。また、取得された画像データの解析手法を習得し、得られた情報をどのように研究や臨床応用へと発展させるかについての理解を深めることを目的とする。			
1) 中耳・内耳の構造と生理を理解する。 2) 中耳・内耳の構造を理解した上でどのような研究手法が使えるか理解する。 3) 構造的制約のあるなかでどのような手法が有用か、応用可能な研究方法を習得す			
到達目標 1) 中耳・内耳の構造と生理を理解し、説明できる。(A) 2) 中耳・内耳の機能を調べるための研究手法を説明できる。(A, B) 3) 構造的制約のあるなかでどのようなバイオイメージングが可能かを理解し、応用できる。(A, B)			
成績評価の方法 与えられたテーマに関するレポートを作成し評価する。(80%) 合わせて口頭試問を行い(20%)、総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 解剖と組織 第1回 内耳・中耳の解剖と組織① - 中耳の骨構造と鼓膜の形態 第2回 内耳・中耳の解剖と組織② - 耳小骨と鼓室の詳細構造 第3回 内耳・中耳の解剖と組織③ - 内耳の迷路構造と蝸牛の微細形態 第4回 内耳・中耳の解剖と組織④ - 前庭系・有毛細胞の組織学的特徴 生理 第5回 内耳・中耳の生理① - 音伝導と増幅機構 第6回 内耳・中耳の生理② - 内耳の電気生理と感覚変換 第7回 内耳・中耳の生理③ - 内リンパ・外リンパの動態と生理的役割 第8回 内耳・中耳の生理④ - 前庭系の機能と平衡感覚の維持 病態 第9回 内耳・中耳の病態① - 中耳炎とその進展メカニズム 第10回 内耳・中耳の病態② - 感音難聴の分子機構と病態生理 第11回 内耳・中耳の病態③ - メニエール病と内耳の水動態異常 第12回 内耳・中耳の病態④ - 加齢による聴覚・平衡機能の変化 バイオイメージング 第13回 内耳・中耳のバイオイメージング① - 蛍光・免疫染色によるタンパク質可視化 第14回 内耳・中耳のバイオイメージング② - 蛍光プローブ・遺伝子導入によるイオン動態観察 第15回 内耳・中耳のバイオイメージング③ - ライブイメージング技術による細胞内イオン計測 授業及び学習の方法: 講義において配布するプリントやマルチメディアによる情報提供等により学習する。			

2026 医学系研究科

最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成する。

具体的な実験手法に関しては、実験のサポートなどを行い習得を目指す。

この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。

【自学自習のためのアドバイス】 耳の解剖について、あらかじめ立体的に把握できておくと、耳の生理（聴覚、平衡感覚）、イメージングについて理解しやすい。（60時間）

教科書・参考書等

教科書 稲沢 譲治：顕微鏡フル活用術イラストレイテッド—基礎から応用まで（秀潤社）

参考書 山下 敏夫：内耳研究（金原出版）

Willott, JF :Handbook of mouse auditory research（CRC Press）

オフィスアワー

月～金 12-17時 耳鼻科医局：アポイントにより質問の時間を設ける。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

受講者同士の日本語での議論を予定している。

教員の実務経験との関連

担当教官は、ヒトの耳手術を執刀している医師であり、手術技術を生かして、動物実験でバイオイメージング研究を実施している。臨床医ならではの豊富な経験と知識、そしてクリニカルエクステンションを有しており、各々の教育環境に応じて適切な研究を遂行できるよう導くことができる。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Ef 授業科目名 (講義コード:L687304-1) 形成外科におけるバイオイメージング Application of Bioimaging for Plastic Surgery	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ef	単位数 2	
担当教員名 久富 信之・永竿 智久	関連授業科目 物理学・解剖学		
	履修推奨科目 物理学・解剖学		
学習時間 講義60分×5回+自学自習120時間			
授業の概要 形成外科においていかに画像データを使用しているかにつき学びます。			
授業の目的 本講座は形成外科を専攻する医師を対象に行います。患者のCTデータなどから3次元モデルもしくは有限要素モデルを作成する方法を習得し、それを形成外科の臨床に応用します。			
到達目標 ・stlファイルの扱い方に習熟する ・3次元モデルの作成法を習得する ・有限要素解析の技術について学ぶ			
成績評価の方法 論文の作成をもって本講座の遂行とみなします。論文は和文・英文を問いませんが、完成しない場合には不可としますのでご注意ください。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 形成外科を受診する患者さんのCTデータをDICOMデータに置き換え、それをもとに3次元モデルを構築する手法を学んでいただきます。モデル作成のノウハウは指導教官の経験の蓄積から得たもので、書籍などになっていないために、講義および演習の形で説明します。余裕があれば3次元モデルをさらに有限要素モデル化し、それを用いて構造解析を行う方法についても学びます。本講座の卒業の可否については、論文完成をもって卒業とします。すなわち、基本的な技術が習得できた場合でも、論文の形態にまとめていない場合には、不可とします。演習時間も長く、内容も硬度です。きわめてハードルが高い講座であることをご理解ください。			
教科書・参考書等 使用しません			
オフィスアワー 火曜日15時から17時			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 本講座においては論文の完成をもって合格とみなします。すなわち、たとえ3次元モデルの作成ができるようになって、それに関連する論文がかけていなければ、不可と判定します。ハードルの高い講座であることをご理解ください。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687305-1) 細胞シグナル伝達学に基づくトランスレシヨナルリサーチ Translational Research of Cellular Signaling	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 倉原 琳	関連授業科目 呼吸循環生理学 循環生理シグナル伝達学 履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 30回 + 自学自習 (準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 細胞の生死、増殖、機能は、細胞内シグナル伝達機能により巧妙かつ柔軟に制御され、生体の生理機能と恒常性の維持に重要な役割を果たす。がん、糖尿病、肥満、高血圧などの疾患は、正常の細胞シグナル伝達機能の破たんにより発症すると理解できる。本授業では、生理的な細胞シグナル伝達の仕組みを解説するとともに、病態における異常とその発生機構を示し、それに基づいて新たな疾患治療法を立案、開発する能力を培う。			
授業の目的 細胞シグナル伝達の基本的な仕組みを理解する。 疾患におけるシグナル伝達の異常とその発生機構を理解する。 シグナル伝達を標的とする新たな疾患治療法の原理を理解する。			
到達目標 1. 細胞シグナル伝達の基本的な仕組みを説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応) 2. 疾患におけるシグナル伝達の異常とその発生機構を説明できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応) 3. シグナル伝達を標的とする新たな疾患治療法を立案できる。 (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート100% (期末テストは実施しない)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 すべての講義を、対面および遠隔で実施する。対面講義を収録した動画を遠隔講義として配信する。 第1回：細胞シグナル伝達の基礎① 受容体 第2回：細胞シグナル伝達の基礎② 蛋白質 第3回：細胞シグナル伝達の基礎③ カルシウムシグナル 第4回：細胞シグナル伝達の基礎④ サイクリックヌクレオチドシグナル 第5回：細胞シグナル伝達の基礎⑤ 蛋白質リン酸化反応 第6回：細胞シグナル伝達の基礎⑥ 蛋白質脱リン酸化反応 第7回：細胞シグナル伝達の基礎⑦ 細胞周期制御機構 第8回：細胞シグナル伝達の基礎⑧ 細胞増殖制御機構 第9回：細胞シグナル伝達の基礎⑨ アポトーシスのシグナル伝達 第10回：細胞シグナル伝達の基礎⑩ 細胞死のシグナル伝達 第11回：細胞シグナル伝達の基礎⑪ 蛋白質分解酵素 第12回：細胞シグナル伝達の基礎⑫ プロテアソーム・オートファジー 第13回：細胞シグナル伝達の基礎⑬ オートファジー 第14回：疾患のシグナル伝達① 循環器疾患①：虚血性心臓病 第15回：疾患のシグナル伝達② 循環器疾患②：心不全 第16回：疾患のシグナル伝達③ 循環器疾患③：不整脈 第17回：疾患のシグナル伝達④ 循環器疾患④：高血圧 第18回：疾患のシグナル伝達⑤ 悪性腫瘍①：固形がん 第19回：疾患のシグナル伝達⑥ 悪性腫瘍②：軟部腫瘍 第20回：疾患のシグナル伝達⑦ 悪性腫瘍③：血液疾患			

2026 医学系研究科

- 第21回：疾患のシグナル伝達⑧ 炎症免疫疾患①：炎症性疾患
第22回：疾患のシグナル伝達⑨ 炎症免疫疾患②：自然免疫
第23回：疾患のシグナル伝達⑩ 炎症免疫疾患③：自己免疫疾患
第24回：疾患のシグナル伝達⑪ 炎症免疫疾患④：慢性免疫疾患
第25回：疾患のシグナル伝達⑫ 代謝・生活習慣病①：糖尿病
第26回：疾患のシグナル伝達⑬ 代謝・生活習慣病②：肥満
第27回：疾患のシグナル伝達⑭ 代謝・生活習慣病③：高脂血症
第28回：シグナル伝達標的治療① 分子標的薬
第29回：シグナル伝達標的治療② 新規化合物探索
第30回：シグナル伝達標的治療③ 個別化医療

【自学自習のためのアドバイス】

一つの教科書もとに講義内容のキーワードを理解して講義に望むことが推奨されます（準備学習30時間）。講義の後、複数の教科書や文献を当たることでより深い理解に至ることができます（事後学習30時間）

教科書・参考書等

Signal Transduction 2nd Ed. 2009, Academic Press, ISBN: 978-0-12-369441-6

シグナル伝達 第2版, 2011, メディカル・サイエンス・インターナショナル, ISBN: 978-4-89592-692-8

標準生理学第9版 医学書院 ISBN978-4-260-03429-6

ギャノン生理学 原著24版 2014, 丸善出版 ISBN: 978-4-621-08717-6

Ganong's Review of Medical Physiol

オフィスアワー

木曜日4時限目

事前にメール（研究室：physiol2@kagawa-u.ac.jp）、電話（087-891-2100）にて訪問日程を調整することが望ましい

【研究室の場所】

三木町医学部キャンパス 基礎臨床研究棟6階 616号室

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業においては双方向性の講義を心がけます。講義内容について教員に質問したり、討論して講義に積極的に取り組んでください。

研究室ホームページ：<http://www.med.kagawa-u.ac.jp/~cardiovasc-physiol/index.html>

メールアドレス

医学部自律機能生理学講座：physiol2@kagawa-u.ac.jp

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687306-1) 生活習慣病診断・治療の前臨床開発 Preclinical studies for life style disease	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 西山 成, 宮武 伸行	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回 + 自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 腎臓病、心不全、脳卒中、高血圧、糖尿病、メタボリックシンドローム、がんなどの生活習慣病に対する薬剤の効果 を評価する際に必要な知識を習得させる。 具体的には、培養細胞を使用した分子機構の解明、動物実験による薬効評価の検討等に対する知識を身につけさせる。 さらに、これらをいかに臨床研究に結びつけるのかについて議論させる。			
授業の目的 本講義を学んだ大学院生が、「どのようなステップにて、生活習慣病に対する薬剤を基礎研究から臨床研究へと進めて 行かなければならないのか」について、考え、提案できることができる。(AB)			
到達目標 1. 実際に行っている生活習慣病の基礎研究を総合的に説明することができる。(DPの「専門・理解」に対応) 2. 関連分野における独自の研究展開を考察し、実行にうつすことができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート70%、発表及び討議30%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおり とする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 培養細胞を用いた研究法 (1): 細胞の培養方法の一般的知識 第2回 培養細胞を用いた研究法 (2): iPS細胞の作製方法の一般的知識 第3回 培養細胞を用いた研究法 (3): Fucci導入細胞による薬剤評価法 第4回 培養細胞を用いた研究法 (4): レポーターアッセイによる薬剤評価法 第5回 培養細胞を用いた研究法 (5): マウスがん細胞を用いた薬剤評価の実際 第6回 培養細胞を用いた研究法 (6): ラット心筋細胞を用いた薬剤評価の実際 第7回 培養細胞を用いた研究法 (7): ヒトがん細胞を用いた薬剤評価の実際 第8回 培養細胞を用いた研究法 (8): EPO産生細胞を用いた薬剤評価の実際 第9回 培養細胞を用いた研究法 (9): マクロファージを用いた薬剤評価の実際 第10回 モデル動物を用いた研究法 (1): モデル実験動物の一般的知識 第11回 モデル動物を用いた研究法 (2): 胆がんモデルを用いた薬剤評価の実際 第12回 モデル動物を用いた研究法 (3): 遺伝子改変動物を用いた薬剤評価の実際 第13回 モデル動物を用いた研究法 (4): 慢性腎臓病モデル動物を用いた薬剤評価の実際 第14回 モデル動物を用いた研究法 (5): 腸炎モデル動物を用いた薬剤評価の実際 第15回 モデル動物を用いた研究法 (6): 心不全モデル動物を用いた薬剤評価の実際 第16回 モデル動物を用いた研究法 (7): 心肥大モデル動物を用いた薬剤評価の実際 第17回 モデル動物を用いた研究法 (8): 高血圧モデル動物を用いた薬剤評価の実際 第18回 モデル動物を用いた研究法 (9): 急性腎障害モデル動物を用いた薬剤評価の実際 第19回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (1): 一般的な考え方 第20回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (2): 抗がん剤開発の実際 第21回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (3): 希少疾患治療薬開発の実際 第22回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (4): 貧血治療薬開発の実際 第23回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (5): 降圧薬開発の実際 第24回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (6): 心不全治療薬開発の実際 第25回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (7): 慢性腎臓病治療薬開発の実際 第26回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (8): 腸炎治療薬開発の実際			

2026 医学系研究科

- 第27回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (9) : 老化抑制薬開発の実際
第28回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (10) : 皮膚疾患治療薬開発の実際
第29回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (11) : 利尿薬開発の実際
第30回 トランスレーショナル・リサーチの実際 (12) : フレイル防止薬開発の実際

【授業及び学習の方法】

薬理学研究室などで実施される。

基本的に対面授業（一部リモート）とする。なお状況によっては授業形態を変更する可能性がある。

【自学自習のためのアドバイス】

当該分野における興味のあることについてあらかじめ下調べを行い、実習の事例と照らし合わせながら学習を進めていくと理解が進む。

(各回 事前学習2時間+事後学習2時間)

教科書・参考書等

新しい薬理学 西村書店 石井邦明、西山成監修

Goodman and Gilman's : The Pharmacological Basis of Therapeutics McGraw-Hill Professional Publishing

オフィスアワー

月曜日8:30-12:30内であらかじめ担当教員に確認し訪問すること。メールでの連絡は、教室 (yakuri-m@kagawa-u.ac.jp)に問い合わせること。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

20年の実務経験をもつ。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-M 授業科目名 (講義コード:L688018-1) 加齢の分子機序 Pathology for aging	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 M	単位数 2	
担当教員名 門田 球一, 宮井 由美, 横平 政直	関連授業科目 医科学概論		
	履修推奨科目 医科学概論		
学習時間 講義・演習90分 × 15回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 老化は成熟期以降に加齢とともに各臓器の機能と統合性が低下し、個体の恒常性維持が不可能となる状態であり、最終的に死に至る過程である。教員は学生がこれらのメカニズムを理解できるように、病理学的な観点から病的な加齢の分子機構に関して講義する。			
授業の目的 本科目では加齢に伴う変化の病理学的意義を理解することが目的である。本授業で学習した結果、加齢に伴う様々な疾患の機序や病態を説明できるようになる。最終的には加齢のメカニズムに関して、病態病理に立脚した医学的知識の獲得を目的として、研究的視野の拡大に繋げていく。			
到達目標 加齢に伴う組織や細胞の形態的变化の特徴を述べることができる (大学院課程のDP「専門知識・理解」に対応する)。 加齢に伴う組織や細胞の形態的变化の意義を説明することができる (大学院課程のDP「専門知識・理解」に対応する)。 加齢に伴う組織や細胞の形態的变化に関して、研究的な解析方法を実践できる (大学院課程のDP「研究能力・応用力」に対応する)。			
成績評価の方法 レポート (100%) で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は原則として対面授業を行います。一部の回では遠隔授業を行います。なお、状況によっては全ての回を対面又は遠隔に変更する可能性があります。 自学自習としては下記の講義・実習内容に関連した教科書 (Robbins Basic Pathology, 11th ed. ELSEVIERなど) を読み、各講義の前に2時間程度の準備学習を行う (15回の講義に対して、準備学習は合計30時間)。各講義の後には、インターネットなどで講義に関連した最近の英語論文の知識を得て理解を深めるため、2時間の事後学習を行う (15回の講義に対して、事後学習は合計30時間)。 1. 加齢における病理組織学的変化の概要 2. 加齢に関わる分子の変化の概要 3. 加齢に関連する病理組織学的な解析方法 4. 病理標本の見方 5. 病理標本作成: 切り出し 6. 病理標本作成: 固定 7. 病理標本作成: 切片作成 8. 標本染色法: HE染色 9. 標本染色法: 特殊染色 10. 標本染色法: 免疫染色の原理 11. 標本染色法: 免疫染色の実際 12. 画像解析: 写真撮影方法 13. 画像解析: 計測方法 14. 画像解析: 統計処理 15. 病理学研究における分子生物学的検査			
教科書・参考書等 Robbins Basic Pathology, 11th ed. ELSEVIER			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

門田：毎週木曜日 16:30 ～ 17:30 分子腫瘍病理学（あらかじめメール等で照会すること：ichibyou-m@kagawa-u.ac.jp）

横平：毎週水曜日 16:30 ～ 17:30 医学部教育センター（あらかじめメール等で照会すること：yokohira.masanao.tm@kagawa-u.ac.jp）

宮井：毎週火曜日 16:30 ～ 17:30 分子腫瘍病理学（あらかじめメール等で照会すること：miyai.yumi@kagawa-u.ac.jp）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

関連する研究について、教科書や文献などで自主学習してください。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687310-1) 免疫機能を調整する薬剤の開発 Development of molecular targeted agents which modulate the innate immune responses	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 4	
担当教員名 星野 克明	関連授業科目 免疫制御学		
	履修推奨科目 微生物ゲノム科学、実験動物学・動物遺伝学、微生物共生システムと応用		
学習時間 講義90分×23回 + 自学自習 (準備学習45時間+事後学習45時間) 実験・実習300分×6回			
授業の概要 本授業では、自然免疫および獲得免疫の活性化を調節する分子メカニズムを解説する。さらに、動物モデルを用いた検討結果を解説する。現状の知識を基盤として、難治性免疫疾患の治療を目的とした新規治療法の開発について議論する。			
授業の目的 自然免疫を担当する樹状細胞は、様々な免疫反応の開始点を司っている。そのため、樹状細胞の活性を調節する分子メカニズムを理解することは、免疫疾患の治療手段を開発するために不可欠である。本授業では、樹状細胞の活性化メカニズムを理解する。続いて、難治性免疫疾患の中で、樹状細胞の活性化状態が病態の悪化と関連している疾患について、樹状細胞を標的とする治療が可能か探索する。未解決の問題を見出し、基礎研究により、問題を解決する能力を身に着けることを目的とする。			
到達目標 1) 自然免疫細胞として樹状細胞の活性化メカニズムを説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2) 獲得免疫細胞の活性化メカニズムを説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3) 自然免疫細胞に特異的に発現する膜タンパク質の機能を説明できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応) 4) 実験動物をモデルとして、免疫疾患の病態について説明できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート提出やグループ討論、実習結果の発表などにより総合評価を行う(レポート60%、実験結果の発表など40%)。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 講義 第1回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムについて1: 受容体・アダプター 第2回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムについて2: キナーゼ 第3回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムについて3: 転写因子 第4回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムについて4: サイトカイン 第5回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムについて5: まとめ、関連する疾患 第6回 自然免疫細胞の膜タンパク質について1: Toll様受容体 第7回 自然免疫細胞の膜タンパク質について2: C型レクチン 第8回 自然免疫細胞の膜タンパク質について3: 特異的マーカー 第9回 自然免疫細胞の膜タンパク質について4: フローサイトメトリー 第10回 自然免疫細胞の膜タンパク質について5: まとめ 第11回 免疫細胞の代謝系について1: グルコース代謝 第12回 免疫細胞の代謝系について2: 希少糖の代謝 第13回 免疫細胞の代謝系について3: アミノ酸代謝 第14回 免疫細胞の代謝系について4: 脂肪酸代謝 第15回 免疫細胞の代謝系について5: まとめ 第16回 モデル動物を用いる評価系について1: 遺伝子改変マウス 第17回 モデル動物を用いる評価系について2: Crispr/Cas 第18回 モデル動物を用いる評価系について3: 疾患モデル 第19回 モデル動物を用いる評価系について4: まとめ			

2026 医学系研究科

第20回 自主学習（レポート作成）1

第21回 自主学習（レポート作成）2

第22回 自主学習（レポート作成）3

第23回 総括

授業及び学習の方法:文献の精読による学習とディスカッションにより知識の整理を行い、現在の問題点の把握と、その解決法を探る。グループ討論ディスカッションやレポート提出を行う。

実験・実習

第1回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムの解析-1日目

第2回 自然免疫細胞のシグナル伝達メカニズムの解析-2日目

第3回 自然免疫細胞の膜タンパク質の解析

第4回 免疫細胞の代謝系の解析-1日目

第5回 免疫細胞の代謝系の解析-2日目

第6回 モデル動物を用いる免疫応答の解析

レポート提出を行う。

この科目は基本的に対面授業を行います。一部の授業回では遠隔授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。

自学自習のためのアドバイス（準備学習45時間+事後学習45時間）

関連する文献検索と、その精読により情報収集に努めて下さい。そして、問題点の把握をできるようにして下さい。

また、参考図書の精読により基盤的知識を補って下さい。

講義の後は復習に努め、関連する領域について探索して下さい。

教科書・参考書等

教科書 特になし

参考書 Kenneth Murphy. Janeway's Immunobiology. 10th Edition, W. W. Norton & Company, 2022.

参考書 Raif Geha, Luigi Notarangelo. Case Studies in Immunology. 7th Edition. Garland Science, 2016.

オフィスアワー

月曜日17時から18時

それ以外でも在室時に随時対応できますが、念のためメール連絡して下さい。

免疫学共通アドレス immunol-all-m@kagawa-u.ac.jp

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性がある。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687311-1) 微生物共生システムと応用 Microbial symbiotic system	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 今大路 治之・桑原 知巳	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 人体の外環境に接する部位には多種多様な細菌が存在し、常在細菌叢を形成しています(ヒトマイクロビオーム)。特に腸内細菌叢はヒトにおける最大のマイクロビオームですが、近年の次世代シーケンシング技術を用いた解析により、肥満・2型糖尿病などの代謝性疾患や大腸癌との関連が明らかになってきています。本授業科目では、遺伝子を用いた微生物の分類や系統解析の基礎を概説するとともに、具体的な解析事例を挙げてその医学的意義を解説します。また、マウス腸内細菌叢の配列データを使用し、マイクロビオーム解析パイプラインQIIMEを用いた解析方法を説明します。			
授業の目的 ヒトマイクロビオーム解析は医学領域においても重要な研究と位置づけられるようになってきています。ヒトマイクロビオームと健康や疾患との関連について講義を通して理解を深めます。また、近年のマイクロビオーム解析技術の進歩の背景を学び、その技術的基盤を理解した上で簡単なマイクロビオーム解析を行えるようになるのが本授業の目的です。			
到達目標 1. 細菌の遺伝子分類について説明できる。(DPコード: ABに対応) 2. ヒトの常在菌叢(マイクロビオーム)について説明できる。(DPコード: Aに対応) 3. 16S rDNAを用いた菌叢解析の原理が説明できる。(DPコード: Bに対応) 4. 次世代シーケンシング技術について解説できる。(DPコード: ABに対応) 5. マイクロビオーム解析パイプラインQIIMEを利用した基本的な解析ができる。(DPコード: Bに対応)			
成績評価の方法 授業内容に関する理解度を口頭試問(50%)および討論(50%)により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 1回 細菌・真菌の遺伝子配列にもとづく分類について: 遺伝子の変異と進化(講義) 2回 細菌・真菌の遺伝子配列にもとづく分類について: 生物種の命名について(講義) 3回 細菌・真菌の遺伝子配列にもとづく分類について: 系統分類法(講義) 4回 細菌・真菌の遺伝子配列にもとづく分類について: 新種の記載について(講義) 5回 ヒトマイクロビオームと細菌の16S rDNAメタゲノム解析について: ヒトマイクロビオームの特徴(講義) 6回 ヒトマイクロビオームと細菌の16S rDNAメタゲノム解析について: ヒトマイクロビオームの解析手法(講義) 7回 腸内細菌叢の機能と疾病との関連について: 代謝性疾患(講義) 8回 腸内細菌叢の機能と疾病との関連について: 自己免疫疾患(講義) 9回 腸内細菌叢の機能と疾病との関連について: がん(講義) 10回 次世代シーケンシング技術について: 原理(講義) 11回 次世代シーケンシング技術について: シーケンサーの種類と使用法(講義) 12回 次世代シーケンシング技術について: データ解析(講義) 13回 CLC Genomics WorkbenchとPRIMER-eを用いたマイクロビオーム解析: シーケンシングデータの前処理(演習) 14回 CLC Genomics WorkbenchとPRIMER-eを用いたマイクロビオーム解析: 多様性解析(演習) 15回 CLC Genomics WorkbenchとPRIMER-eを用いたマイクロビオーム解析: 群間比較(演習)			
【授業及び学習の方法】 1~12回までは講義や文献紹介によりヒトマイクロビオームと疾患との関連性やその解析技術についての基本的事項を学びます。13~15回の演習では、演習用データと解析ソフトを使用してマイクロビオーム解析を体験します。この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て遠隔へ変更する可能性があります。			

2026 医学系研究科

【自主学習のためのアドバイス】

講義・演習の内容を十分理解するために、その日の講義・演習の振り返りを行ってください。また、次の講義・演習内容についての基本的な知識をあらかじめ自主学習により習得しておいてください。各授業の内容を修得するためには、事前学習2時間と事後学習2時間が必要です。

教科書・参考書等

教科書 NGSアプリケーション 今すぐ始める！メタゲノム解析～実験プロトコール～ヒト常在細菌叢から環境メタゲノムまでサンプル調製と解析のコツ 服部正平（編）実験医学別冊

参考書 常在細菌叢が操るヒトの健康と疾患～メタゲノムなどの革新的解析法，大野 博司，服部正平（編）実験医学増刊 Vol. 32 No. 5

オフィスアワー

月曜日17時から18時。

場所：医学部基礎臨床研究棟7階分子微生物学研究室。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

13～15回までは、自身のPCを持参して下さい。

教員の実務経験との関連

担当教員は微生物学の教育研究に25年間従事。腸内細菌のゲノム解析を中心に研究を行っている。細菌のゲノム解析に関する経験をもとに、細菌ゲノム解析の現状や今後の展望につき解説を行う。また、簡単な細菌のゲノム解析の手法を実演する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Ex 授業科目名 (講義コード:L687312-1) 健康測定・アセスメント Method of Assessing Health	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 2	
担当教員名 宮武 伸行	関連授業科目 生活習慣病予防論		
	履修推奨科目 臨床疫学、生物統計学		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 健康や健康に与える環境因子を評価する様々な方法を紹介し、体験させ、実際の調査で応用、実施、評価を実施できるようにさせる。			
授業の目的 1) 生活習慣病予防、改善のための測定法、評価法を理解する。 2) 環境保健に関連する測定法、評価法を理解する。 3) 産業保健に関連する測定法、評価法を理解する。 4) 実際に得られたデータの統計解析法を含めた扱い方、解釈の仕方、表現方法を理解する。			
到達目標 1) 生活習慣病予防、改善に必要で、役立つ健康測定法、評価法を説明できる。 2) 環境保健関連の基本的事項、環境評価手法を説明できる。 3) 産業保健関連の基本的事項、評価手法を説明できる。 4) 実際に得られたデータの扱い方を説明できる。 (DP: 専門知識・理解、研究能力・応用力に対応)			
成績評価の方法 提出されたレポート(70%)、発表(20%)、講義参加時の議論内容(10%)で総合評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回: 健康測定法(1): 運動・身体活動(講義) 2回: 健康測定法(2): 食事(講義) 3回: 健康測定法(3): ストレス(講義) 4回: 健康測定法(4): Quality of Life(QOL)(講義) 5回: 環境測定法: 水、大気、土壌、建築物・住居、食の安全(講義) 6回: 有害要因の労働衛生管理: 有害要因の労働衛生管理(化学物質、放射線等)(講義) 7回: 職場の健康管理体制: 健診、適正配置、職場復帰、健康増進、作業環境測定、職場巡視、安全衛生委員会、産業医・産業保健スタッフの役割、地域との連携(講義) 8回: 産業精神保健: メンタルヘルス(評価、復職支援)(講義) 9回: 健康測定法の実際: 体力・身体活動量データの取得方法(講義) 10回: 健康測定法の実際: 体力・身体活動量データの扱い方(講義) 11回: 健康測定法の実際: 体力・身体活動量データの解析方法(講義) 12回: 健康測定法の実際: 体力・身体活動量データの解析結果の解釈(講義) 13回: 環境測定方法の実際: 気象データと健康アウトカムとの関連に関するデータ取得方法(講義) 14回: 環境測定方法の実際: 気象データと健康アウトカムとの関連に関するデータの解析方法(講義) 15回: 環境測定方法の実際: 気象データと健康アウトカムとの関連に関するデータの解析結果の解釈(講義) 授業及び学習の方法 適宜提示する参考図書、資料を用いて学習を行う。 関連する文献を検索し、系統的に要約を作成する。 提示するデータによる分析を行い、発表、議論を行う。 この科目は遠隔授業と対面授業の併用で行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更したり、課題レポート等によって代替する場合があります。 自学自習のためのアドバイス			

2026 医学系研究科

社会医学の参考書、資料等も活用して予習、復習を行ってください。
自学自習（準備学習30時間＋事後学習30時間）

教科書・参考書等

なし

オフィスアワー

基礎臨床研究棟7階724、木曜日16時から17時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

一部外部施設での講義実習等（実費負担、要相談）となる場合がある。授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

社会医学（産業医）や内科の実務経験のある教員が担当します。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-LP 授業科目名 (講義コード:L687315-1) 死因究明技術の開発 Development of death investigation technology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 LP	単位数 2	
担当教員名 村瀬 壮彦	関連授業科目 法医学特論		
	履修推奨科目 法医学特論		
学習時間 講義・実習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 社会構造やライフスタイルの変化に伴い、近年、法医学の対象である、いわゆる「異状死体」が増加している。これら異状死体の死因究明の重要性についての社会的認識も高くなり、CT検査の活用など、従来の形態学的検査にとどまらない各種の検査の活用が求められている。さらに、生化学、免疫学、分析化学等を活用した検査についても現場におけるニーズは高く、その適応と限界もふまえた上で、精度の高い死因究明技術の開発に必要な事項とその発展的応用について考えていく。			
授業の目的 この授業では、法医学領域で用いられる各種検査について理解し、新規技術の応用・開発につなげる。 1) 各種法医学的検査を理解する。 2) 形態学的な手法を用いた検査を理解する。 3) 生化学的、免疫学的手法を用いた検査を理解する。 4) 分析化学的手法を用いた検査を理解する。			
到達目標 1) 各種法医学的検査ができる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応) 2) 形態学的検査の意義を理解し、死因究明に活用できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応) 3) 生化学的、免疫学的検査の意義を理解し、死因究明に活用できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応) 4) 分析化学的検査の意義を理解し、死因究明に活用できる。(DPの「①専門知識・理解」「②研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 口頭試問、レポート、グループ討論を総合的に評価する。 (口頭試問50%、レポート25%、グループ討論25%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 授業形態は対面授業で行う。 1回 死因究明技術総論 (死因究明技術開発の背景) 2回 死因究明技術概論 (解剖検査) 3回 法医学的検査概論 (組織学的検査) 4回 形態学的検査技術とその応用 (特殊染色) 5回 形態学的検査技術とその応用 (免疫組織化学) 6回 形態学的検査技術とその応用 (プランクトン検査) 7回 分析化学的検査技術とその応用 (ガスクロマトグラフィー) 8回 分析化学的検査技術とその応用 (液体クロマトグラフィー) 9回 分析化学的検査技術とその応用 (質量分析) 10回 分析化学的検査技術とその応用 (元素分析) 11回 免疫学的検査の各種病態への応用 12回 生化学検査の各種病態への応用 13回 画像診断技術の応用 (単純X線検査の応用) 14回 画像診断技術の応用 (CT検査) 15回 簡易検査の応用と技術開発			

2026 医学系研究科

【授業及び学習の方法】

講義、見学及びグループ学習。興味ある病態に関する最新の知見について系統的に文献検索し、考察したものをまとめる。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

参考書や文献を読み、法医学的検査として用いている各種検査法について、アウトラインを理解できるよう準備する（2時間×15回）。

授業や見学で示された検査法について、その応用や最新の手法について考察する。さらに課題となる点についてまとめる（2時間×15回）。

教科書・参考書等

教科書 特に指定なし

参考書 Madea B(ed). Handbook of Forensic Medicine (2nd Ed), John Wiley & Sons Ltd, 2022.

オフィスアワー

時間帯：月曜日 17:00-18:00（事前にアポイントメントを取ること）

場所：基礎臨床研究棟1階 法医学研究室

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

基本的事項をベースに、新しい技術の応用を考えます。

講義・配布資料で利用する言語は基本的に日本語となります。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687317-1) 精神神経疾患の創薬科学 Drug Discovery and Development for Neuropsychiatric Disorders	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 高橋 弘雄, 山本 融	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 神経系は再生能には乏しいものの、1度形成されると種によっては100年以上にもわたってその機能を維持し続けることができる。しかしながら、こうした顕著な機能維持機構も、加齢や外的侵襲による破綻および制御系の異常には抗し得ず、各種の神経変性疾患・精神神経疾患が発症していくこととなる。本授業科目では、基礎生物学的な観点から、正常な神経回路網の成り立ちとその維持機構について講述するとともに、分子病態についての解析が比較的進んでいる疾患について解説する。さらに、こうした知見を得るに至った解析について実際の実験事実に基づいて理解するとともに、治療薬開発を目指して進められている研究に関する最新の知見を自ら把握する力を育む。			
授業の目的 1. 神経回路網の形成とその多年にわたりうる維持を可能にしている分子機構を理解する。 2. 上記機構の破綻として現れる神経変性疾患・精神神経疾患において共通に認められる分子病態を理解する。 3. 各神経変性疾患・精神神経疾患の分子病態解明をめざした解析とその結果に基づいた創薬がどのように進められているかを理解する。 4. 上記の理解に基づいて論文の内容を正しく把握し、紹介する。			
到達目標 1. 神経回路網の形成・維持の分子機構を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 神経変性疾患・精神神経疾患において共通に認められる分子病態を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 神経変性疾患・精神神経疾患の分子病態解明をめざした解析がどのように進められているかを理解できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 4. 上記の理解に基づいて論文の内容を正しく把握し、紹介することができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 口頭等による試問にて評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 第1回 神経の発生 ①: 初期発生の概略と神経誘導 第2回 神経の発生 ②: 神経細胞とグリア細胞の発生と分化 第3回 神経の発生 ③: 中枢神経系と末梢神経系 第4回 軸索伸長と標的認識機構 ①: 細胞極性と軸索の決定 第5回 軸索伸長と標的認識機構 ②: 軸索伸長の制御機構 第6回 軸索伸長と標的認識機構 ③: 軸索伸長経路の選択機構と標的認識 第7回 中枢神経系の形成 ①: 脊髄神経の形成機構 第8回 中枢神経系の形成 ②: 大脳皮質の形成機構 - 3つの特徴 第9回 中枢神経系の形成 ③: 大脳皮質の形成機構 - 脳の「シワ」と生存戦略 第10回 神経回路網の形成とその制御 ①: シナプスと伝達物質 第11回 神経回路網の形成とその制御 ②: シナプスの形成と刈り込み 第12回 神経回路網の形成とその制御 ③: シナプス伝達の修飾 第13回 神経機能維持の分子機構 ①: 細胞内輸送機構 第14回 神経機能維持の分子機構 ②: 恒常性維持機構 第15回 神経機能維持の分子機構 ②: 外的擾乱とその対処機構 第16回 神経細胞死とその誘発・保護機構 ①: 細胞内恒常性維持機構の破綻と細胞死 第17回 神経細胞死とその誘発・保護機構 ②: 虚血再灌流障害と保護機構			

2026 医学系研究科

- 第18回 神経細胞死とその誘発・保護機構 ③：過興奮性細胞死とその保護機構
第19回 神経変性疾患の発症機構 ①：ポリグルタミン病・ALSなど
第20回 神経変性疾患の発症機構 ②：パーキンソン病・パーキンソン症候群
第21回 神経変性疾患の発症機構 ③：アルツハイマー病
第22回 精神神経疾患の病態生理 ①：興奮抑制バランス異常と精神神経疾患
第23回 精神神経疾患の病態生理 ②：統合失調症
第24回 精神神経疾患の病態生理 ③：自閉スペクトラム症
第25回 神経変性疾患治療薬の創薬と課題 ①：総論
第26回 神経変性疾患治療薬の創薬と課題 ②：パーキンソン病
第27回 神経変性疾患治療薬の創薬と課題 ③：アルツハイマー病
第28回 精神神経疾患治療薬の創薬と課題 ①：総論
第29回 精神神経疾患治療薬の創薬と課題 ②：統合失調症
第30回 精神神経疾患治療薬の創薬と課題 ③：自閉スペクトラム症

上記の内容を中心とした講義・試問および演習による。

この科目は基本的に対面で行います。なお、状況によっては授業形態の一部または全てを遠隔ないしはオンデマンドに変更する可能性があります。

【自学自習のためのアドバイス】

各回1時間程度、講義資料を中心に講義・演習の該当範囲を参考書等で確認すると良いでしょう。

教科書・参考書等

特に定めませんが、下記参考書記載の図版を随時利用する。

- ・Molecular Biology of the Cell (Garland Science)
- ・Principles of Neural Science (McGraw-Hill)

オフィスアワー

月曜日・17:00-18:00

これ以外でも随時受け付けるので、講義棟3Fの居室へ気軽に立ち寄りたい。なお、不在の場合も多いので、あらかじめ在室をメール (yamamoto.toru@kagawa-u.ac.jp) で確認されると確実である。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業は日本語にておこないます。

教員の実務経験との関連

研究業績はresearchmap (https://researchmap.jp/Tohru_Yamamoto) を参照されたい。なお、香大HP (カダイラボ) に研究成果の一部が紹介されている (<https://www.kagawa-u.ac.jp/kadailab/22025/18695/>) 。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687320-1) 睡眠(終夜脳波システム)の臨床開発 Clinical Development of Polysomnography	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 石川 一朗・中村 祐	関連授業科目 精神病学 神経病学 履修推奨科目 精神病学 神経病学		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 本授業では「睡眠」について、その生理学的な基礎から年齢に伴う変化、各種睡眠障害の特徴や治療法について概説する。 また睡眠検査のゴールドスタンダードたる終夜睡眠ポリグラフ検査や反復睡眠潜時検査の検査手技・判読法などについても実習を交えて説明する。			
授業の目的 生物において必要不可欠な睡眠は、未だその全容解明はなされていない。また臨床医学場面では専門科を問わずみられる睡眠障害については、その知識習得の不足から不適切な対応をしている場面も散見される。 医療者であればだれもが目にする睡眠障害について、適切な知識と対応方法を学び、さらに新たな研究課題を探ることを本授業の目的とする。			
到達目標 1) 睡眠について生理学的特徴を述べることができる。(DPの「専門知識・理解」に対応する) 2) 睡眠構造を理解し、またその加齢による変化・特徴を述べることができる。(DPの「専門知識・理解」に対応する) 3) 睡眠障害国際分類を基に睡眠障害の症候学的特徴や病態生理について述べるができる。(DPの「専門知識・理解」に対応する) 4) 睡眠障害の適切な治療方法(薬物療法・非薬物療法ともに)を複数選択・列挙することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応する) 5) 終夜睡眠ポリグラフ検査や反復睡眠潜時検査を実施、評価・判定することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応する) 6) 各原因疾患の病態に基づく合理的な睡眠障害についての診断技術を開発できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応する)			
成績評価の方法 レポートを提出する。 (レポート100%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 講義(15回) 第1回 生理的な睡眠と睡眠構造 第2回 睡眠覚醒リズムと概日リズム 第3回 終夜睡眠ポリグラフ検査(PSG) 第4回 反復睡眠潜時検査(MSLT) 第5回 睡眠医学的検査 第6回 不眠症の病態と非薬物療法 第7回 不眠症の薬物療法 第8回 中枢性過眠症の病態 第9回 中枢性過眠症の検査・診断と治療 第10回 睡眠時随伴症の病態と治療 第11回 睡眠関連運動障害の病態と治療 第12回 概日リズム睡眠・覚醒障害の病態と治療 第13回 睡眠関連呼吸障害の病態と治療			

2026 医学系研究科

第14回 老年期における睡眠障害の病態

第15回 老年期における睡眠障害の治療

実習（実習時間は計45時間）

1. 睡眠ポリグラフ（PSG）や反復睡眠潜時検査（MSLT）の手技を習得する
2. PSG、MSLTの解析と評価手法を習得する

授業及び学習の方法:対面授業（状況により遠隔授業）。講義、実習形式で行う。

【自学自習のためのアドバイス】

終夜脳波システムの仕組み、実施方法を事前に学習する

事後として、終夜脳波システムに関する最新の学術論文を検索し、読む

事後として、終夜脳波システムを実際の臨床現場で実践する

教科書・参考書等

教科書 「睡眠学」 日本睡眠学会編 朝倉書店 ISBN：978-4-254-30090-1

参考書 Principles and Practice of Sleep Medicine (6thEdition) Elsevier, (Kryger MH, et al.) ISBN:978-0-323-24288-2

オフィスアワー

アポイントメントにより質問を受け付ける

場所：精神神経医学講座医局

時間帯：水曜日（12：00～13：00）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687321-1) 認知症診断の技術研究 Technical Research of diagnosis of Dementia	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 石川 一朗, 中村 祐	関連授業科目 精神病学・神経病学 履修推奨科目 精神病学・神経病学		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 講義を中心として認知症疾患の病態の理解度を深め診断の技術研究を行う。			
授業の目的 近年認知症の新しい治療法の開発が社会的に注目されている。このような最先端の研究開発を理解するためには、認知症の原因疾患の病態、診断技術、従来の治療を理解しておくことが必要である。本授業により認知症の病態、診断技術、治療について十分な知識を得ることを目的とする。(AB)			
到達目標 1. 認知症の原因疾患の病態を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応する) 2. 各原因疾患の病態に基づく合理的な認知症診断技術を開発できる。(DPの研究能力・応用力)に対応する)			
成績評価の方法 レポート80%、口頭試問20%により評価を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 臨床に必要な神経解剖、生理 第2回 臨床に必要な症候学 第3回 認知症と鑑別すべき疾患(1) 正常老化、MCI 第4回 認知症と鑑別すべき疾患(2) うつ病、せん妄、てんかん 第5回 脳血管障害、感染症による認知症(1) 血管性認知症 第6回 脳血管障害、感染症による認知症(2) 神経梅毒、脳炎、HIV脳症 第7回 神経変性疾患(1) アルツハイマー型認知症の病態、検査 第8回 神経変性疾患(2) アルツハイマー型認知症の治療 第9回 神経変性疾患(3) レビー小体型認知症の病態、検査 第10回 神経変性疾患(4) レビー小体型認知症の治療 第11回 神経変性疾患(5) 前頭側頭葉変性症の病態、検査 第12回 神経変性疾患(6) 前頭側頭葉変性症の治療 第13回 神経変性疾患(7) 進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症 第14回 神経変性疾患(8) 嗜銀顆粒性認知症、神経原線維変化型老年期認知症等 第15回 神経心理学的検査(1) スクリーニング検査(HDS-R、MMSE等) 第16回 神経心理学的検査(2) 認知機能の評価尺度 第17回 神経心理学的検査(3) ADL、BPSDの評価尺度 第18回 画像検査(CT、MRI)(1) 総論 第19回 画像検査(CT、MRI)(2) 各論 第20回 画像検査(SPECT、PETなど)(1) 脳血流SPECT、ドパミントランスポーターシンチ 第21回 画像検査(SPECT、PETなど)(2) アミロイドPET、タウPET 第22回 電気生理検査(1) 脳波 第23回 電気生理検査(2) 脳磁図等 第24回 神経病理(1) 総論 第25回 神経病理(2) 各論 第26回 遺伝子診断(1) アポリポ蛋白E4 第27回 遺伝子診断(2) その他の遺伝要因 第28回 開発中の診断と治療薬(1) アミロイドβを標的とした抗体医薬			

2026 医学系研究科

第29回 開発中の診断と治療薬 (2) アミロイドβ以外を標的とした治療法

第30回 まとめ

授業及び学習の方法:対面授業(状況により遠隔)各領域における基本的知識の確認を行うとともに、最新の基礎的、臨床的知見を文献的に検索し系統的に要約を行う。

【自学自習のためのアドバイス】

認知機能検査などの内容、実施方法を事前に学習する

診療ガイドラインなどの内容を事前に学習する

事後として、認知症の診断に関する最新の学術論文を検索し、読む

事後として、認知症の診断を実際の臨床現場で実践する

授業の各回ごとの自学自習時間は、事前の学習が2時間、事後の学習が2時間を目安とする。

教科書・参考書等

教科書 DSM-5 医学書院、老年精神医学講座 総論・各論 ワールドプランニング

参考書 高橋茂樹(著)・岸本年史(監修)STEP精神科 海馬書房、認知症—神経心理学的アプローチ 中山書店、認知症ハンドブック第2版 医学書院

オフィスアワー

場所:精神神経医学講座

水曜日(12:00~13:00)

対応できない場合があるため、アポイントメントをとることが望ましい。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687322-1) 脂質異常症と心血管病 Lipid disorder and cardiovascular diseases	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 野間 貴久, 南野 哲男	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+事前学習30時間 事後学習30時間			
授業の概要 南野教授は、香川県生活習慣病予防検診からリバースカスケードスクリーニングにて家族性高コレステロール血症の診断率を向上させる取り組みを行っている。この授業では、担当教官は脂質異常症の発症機序、分類、診断基準、治療法を学生に講義し、議論の中からunmet needsに対して研究課題を創造する。			
授業の目的 脂質異常症は、糖尿病・高血圧などと並ぶcommon diseaseの一つである。固有の臨床症状を呈することが稀であり、健康診断などの機会に指摘されても治療の意義を正しく理解されていない場合もある。家族性高コレステロール血症は早期診断・治療が必要な疾患の一つと考えられている。近年、脂質異常治療にもPCSK9阻害薬とMTP阻害薬という全く新しい作用機序の治療薬が登場し、脂質異常症診療は変革期を迎えている。授業には脂質異常の病態生理・診断法・治療法について過去の業績と最近の進歩を知り、新たな研究課題を創造する。			
到達目標			
到達目標1：学生はリポタンパク代謝を説明し、脂質異常症の分類、診断と病態評価の進め方を説明する。脂質異常と心血管疾患と遺伝子変異との関連について考察する。ガイドラインに沿った治療方法、管理基準を説明する。(DPのA:専門知識・理解に対応)			
到達目標2：学生は新たな治療の可能性、研究課題を創造する。(DPのB:研究能力・応用力に対応)			
成績評価の方法 レポート75%(主に到達目標1に対応)、発表及び討議25%(主に到達目標2に対応)。 成績の評価は、次のとおり到達目標の達成度により行う。 秀(90点以上100点まで)到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満)到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満)到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満)到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満)到達目標を達成していない。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで)到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満)到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満)到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満)到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満)到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 オリエンテーション 第2回 リポタンパク代謝 第3回 血清脂質検査法 第4回 脂質異常症の診断基準 第5回 病態評価の進め方 第6回 脂質異常症と遺伝子変異 第7回 遺伝子変異と心血管病 第8回 エビデンスに基づいた治療方法①：エビデンスと管理目標 第9回 エビデンスに基づいた治療方法②：新規治療薬の適応症、効果 第10回 講義のまとめ 第11回 新たな検査法、治療法の可能性：討議 第12回 研究課題の提案：発表 第13回 研究課題の背景調査：発表、討議 第14回 研究計画の提案：発表、討議 第15回 研究計画書の作成：発表、討議 第16回～第30回 研究計画書の実施、評価			

2026 医学系研究科

毎週水曜日14時開始

【授業及び学習の方法】

上記目標項目に対し、講義形式、FH患者外来参加、FH研究会議参加と論文・文献による自主的な学習を行う。この科目は原則として対面授業、または、遠隔授業を行う。

【自学自習のためのアドバイス】

講義に挑む前に予習（各回1時間程度の事前学習）をしてきちんと講義についてくること、そしてその内容を自主学習でしっかりと確認することが重要です。指示された標準学習時間以降に自主的に事後学習（各回1時間程度）を行うと効率よく学べます。

教科書・参考書等

教科書・参考書等

教科書 日本動脈硬化学会：動脈硬化性疾患予防のための脂質異常症診療ガイド2022年版

参考書 臨床研究の道標 7つのステップで学ぶ研究デザイン：福原俊一著 認定NPO法人 健康医療評価研究機構 (iHope International) 発行2013

オフィスアワー

オフィスアワー 毎週月曜日 14時～16時30分

上記以外の時間は、事前の連絡をシェアポイントメントをとる

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

病院内では白衣着用とする。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687324-1) 周産期の脳発達と子供の健康 Brain development and child health	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 岩瀬 孝志, 日下 隆, 三木 崇範	関連授業科目 発達神経科学、分子神経病理学		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 周産期の脳発達障害に起因する疾患を理解するために、脳の発達や機能の基礎医学的知見に立脚した視点で臨床医学の事象を洞察できる能力を養える学際的授業を行う。			
授業の目的 ヒトの脳発達の特性を基礎医学の観点から理解した上で、周産期の脳発達障害に起因する疾患の原因に対する理解と、子供の健康増進の認識を深める。			
到達目標 脳の発達の特異性・特徴を、他種実験動物と比較してcomparative neurobiologyの説明ができる。特に、脳の発達障害の本質的な部分の説明ができることを目標とする。(ABX) 上記目標のすべてはDP「A:専門知識・理解」「B:研究能力・応用力」に対応している。			
成績評価の方法 授業や学修への取り組み姿勢(50%)、レポート(50%)で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。 *成績評価にあたり、学生に不利益が生じない策(レポートや補習授業等)を講じる。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業形態は対面と遠隔授業を、社会的状況により選択して行う。 授業計画 第1回 発達神経科学1 ヒトの中樞神経の概説ー正常構造と機能 1 第2回 発達神経科学2 ヒトの中樞神経の概説ー正常構造と機能 2 第3回 発達神経科学3 ヒトの中樞神経の概説ー正常構造と機能ー最新知見を踏まえて 3 第4回 発達神経科学4 ヒトの脳発達 正常発達 1 第5回 発達神経科学5 ヒトの脳発達 正常発達一種による差異からの理解 2 第6回 発達神経科学6 ヒトの脳発達 遺伝子に制御される発達 第7回 発達神経科学7 ヒトの脳発達 環境に制御される発達 第8回 発達神経科学8 ヒトの脳発達 Epigenetics と発達 第9回 発達小児科学1 : 小児の成長と発達 第10回 発達小児科学2 : 母子相互作用・母乳・小児の栄養 第11回 発達小児科学3 : 出生の適応生理・新生児仮死 第13回 発達小児科学4 : 胎児・新生児の循環 第14回 発達小児科学5 : 先天奇形・染色体異常・遺伝性疾患 第15回 発達小児科学6 : マスククリーニング、予防接種 第16回 発達小児科学7 : 乳児健診 第17回 小児病態神経学1 新生児黄疸・周産期脳障害 第18回 小児病態神経学2 新生児呼吸障害・適応障害 第19回 小児病態神経学3 小児感染症・垂直感染症・新生児感染症 第20回 小児病態神経学4 熱性けいれん・てんかん・脳炎脳症・髄膜炎 第21回 小児病態神経学5 先天代謝異常症・内分泌代謝疾患 第22回 小児病態神経学6 小児救急・SIDS・虐待 第23回 小児病態神経学7 腎・尿路系の先天異常症 第24回 小児病態神経学8 先天性心疾患・後天性心疾患(川崎病) 第25回 小児病態神経学9 小児の消化器疾患 第26回 臨床学的発達小児診断学1 : 新生児の診察			

2026 医学系研究科

- 第27回 臨床学的発達小児診断学 2 : 乳児の発達
- 第28回 臨床学的発達小児診断学 3 : 小児の発達障害
- 第29回 臨床学的発達小児診断学 4 : 小児の心身症
- 第30回 まとめ

発達神経科学では主に、基礎医学の立場から、神経系の発達を遺伝子レベルから行動までを双方向的視座で解説する。

発達小児科学では、発達神経科学の基礎医学的知識を基盤として、周生期、新生児期の脳発達と疾病との関連を解説する。

小児病態神経学では病態生理学的見地からの、乳児期以降に認められる身体的および精神的発達障害の病因や、周産期との関連性を解説する。

臨床学的発達小児診断学では、実際の身体的および精神的発達障害の診断、治療に関する臨床的実習を、主治医と一緒に行う。

まとめでは、脳発達機構の解明と基礎—臨床医学の学際的視点からの総括を行う。

*基礎医学と臨床医学を区別することなく学際的視点で、脳発達を基盤に脳が統合する臓器の発達と疾病の成り立ちについて学ぶ。

授業及び学習の方法

オムニバス形式の講義と演習で行われる。授業は綿密な打ち合わせにより行われるため一貫性のある内容で行われる。授業内容を中心とした学習に加え、自ら探求する学習姿勢が望まれる。

[自学自習のためのアドヴァイス]

講義に臨む前に予習（各回2時間程度の事前学習）をしてきちんと講義についてくること（実際雑誌に掲載されている論文を読むことが求められ、一編につき2時間程度の時間は必要）。そして、その得た知識を基にして、さらに論文等でその研究テーマを発展的に調べた後、興味あるテーマで正確に実験できるようノートに記載するなどして整理すると効率よく身に付きます（各回2時間程度の事後学習）。

教科書・参考書等

Avery's Diseases of the Newborn (English Edition) Kindle版英語版 第11版 2023 Taylor Sawyer (編集), Christine A. Gleason (編集) 形式: Kindle版 Elsevier
カandel神経科学 第2版 2022 宮下保司, Eric R. Kandel・John D. Koester・Sarah H. Mack・Steven A. Siegelbaum他 メディカルサイエンスインターナショナル

オフィスアワー

特別には定めませんが、授業終了後の時間を有効に利用してほしい。場所は、小児科学講座及び神経機能形態学の教室とし、担当教員に適宜アポイントメントをとりコンタクトをとること。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特別には定めませんが、担当教員に適宜アポイントメントをとりコンタクトをとること。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687325-1) 高速液体クロマトグラフィーの臨床応用 Clinical application of high performance liquid chromatography	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 岩瀬 孝志・日下 隆・小谷野 耕佑	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 高速液体クロマトグラフィーの原理、装置の構成、解析方法など講義し実習を行う。 検出機器として紫外/可視分光光度法や質量分析法の原理や同定法について講義実習を行う。			
授業の目的 医療において、高速液体クロマトグラフィーは、代謝物質、医薬品中有効成分の分析など広範囲に用いられています。高速液体クロマトグラフィーについて、原理や検出法の特徴、検体の前処理の知識を学習し、さらに臨床検体の前処理などの基礎的手法を学習する。それらの専門知識に加えて、臨床応用として臨床検体を用い、さまざまな物質の同定、定量検査を行う研究能力の基礎を身につける。			
到達目標 1) 高速液体クロマトグラフィーの原理が説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 2) 紫外可視分光光度計、質量分析計について長所短所が説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 3) 臨床検体における除タンパクと抽出方法について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 4) 臨床応用について説明できる (DPの「研究能力・応用」に対応)			
成績評価の方法 レポート50%、講義・演習への参加態度50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 高速液体クロマトグラフィーの原理? 第2回 高速液体クロマトグラフィーの原理② 第3回 高速液体クロマトグラフィーの原理③ 第4回 移動相の選定 第5回 カラムの性質 第6回 カラムの選定 第7回 分離モード 第8回 吸光光度法 第9回 質量分析計 第10回 実習講義と実習 (ビリルビンの分画?) 第11回 実習講義と実習 (ビリルビンの分画②) 第12回 実習講義と実習 (ステロイド?) 第13回 実習講義と実習 (ステロイド②) 第14回 実習講義と実習 (薬物?) 第15回 実習講義と実習 (薬物②) 授業及び学習の方法:各項目の講義を行い、実習を行う。実習では機器の操作上の注意点について説明の後物質の定性定量を行う。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) 高速液体クロマトグラフィーの基礎的、臨床的研究に関して論文を検索し系統的に要約を作成する。			
教科書・参考書等 教科書 プリント配布 参考書 著者庄野利之ら。入門機器分析化学。三共出版			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

火曜日12:00~16:00 事前連絡によりアポイントメントを取り、質問、論議の時間を設定する。特に講義終了後の時間を有効に利用して欲しい。場所は小児科学講座の教室。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配布する資料の一部は日本語になることがあります。

計測機器、試薬などは指導教員の指導の下に使用すること。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687326-1) 近赤外分光法を用いた臨床研究 Clinical research using near infrared spectroscopy	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 岩瀬 孝志, 日下 隆, 小谷野 耕佑	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 近赤光とは生体透過性の強い波長領域(600-900nm)であり、脳、筋肉、乳房、肝臓における循環、酸素代謝の計測が可能である。この測定方法は安全な光を利用しているため非侵襲的な生体計測が可能であり、短時間での測定が可能であるため脳機能評価にも応用されている。 本授業では、近赤光を用いた生体計測に関する、原理的な理解と応用方法についての最新の見に基づき講義を行う。そして実習においては、各種の計測機器の操作方法を習得し、測定方法有用性と限界を理解するとともに、今後の研究課題を論議する。			
授業の目的 本授業を通じて、非侵襲的な光学的生体計測の医療応用の知識を習得することを目的とする。 1) 近赤外光測定の原理を理解する。 2) 各種の近赤外光測定の長所と短所を理解する。 3) 生体計測応用方法を理解する。 4) 新たな研究方法の手段として、応用方法を考えることができる。 本講義実習において教官の指導の下で実際の機器を使用し、測定を実施することで上述の目的を達成する。			
到達目標 疾患予防、診断に関係する生体計測の必要性を考慮し、より非侵襲的な方法を選択できる知識、方法の習得に努めることが目標である。 1) 近赤外光測定の原理を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2) 各種の近赤外光測定の長所と短所を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3) 生体計測応用方法を説明できる。(DPの「研究能力・応用」に対応) 4) 新たな研究方法の手段としての応用方法が説明できる。(DPの「研究能力・応用」に対応)			
成績評価の方法 レポート50%、発表および討議50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (1) Principle of optical measurements (2) Principle of near-infrared spectroscopy (3) Near-infrared topography (4) Near-infrared time-resolved spectroscopy (5) Near-infrared optical tomography (6) Oxygen metabolism in infants and adults (7) Cerebral hemodynamic changes in infants - cerebral blood flow and cerebral blood volume (8) Cerebral functional assessments in infant - visual (9) Cerebral functional assessments in infant - auditory (10) Cerebral functional assessments in infant - olfactory (11) Cerebral functional assessments in infant - sensory and motor (12) Pathophysiology and oxygen metabolism of brain damage in infant - Hypoxic-ischemic encephalopathy (13) Pathophysiology and oxygen metabolism of brain damage in infant - Intraventricular hemorrhage and Periventricular leukomalacia (14) Bilirubin metabolism in infant-assessments for hepatic function (15) Assessments for Muscle and Breast functions			

2026 医学系研究科

授業及び学習の方法:講義 教員と共に各種の近赤外光測定に関する基礎的、臨床的研究に関する論文を検索し、系統的に要約を作成する。授業は主に対面で行うが、状況により遠隔授業を行う。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）特に生体近赤外光測定に関する基礎的、臨床的研究に関する論文を検索し、系統的に要約を作成する。

教科書・参考書等

教科書・参考書 特になし

オフィスアワー

月曜日～金曜日 12:00～16:00 事前連絡によりアポイントメントを取り、質問、論議の時間を設定する。特に講義終了後の時間を有効に利用して欲しい。場所は小児科学講座の教室。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配布する資料の一部は日本語になることがあります。

計測機器は、指導教員の指導の下に操作を行うこと。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687328-1) 前立腺がんの新規マーカーの開発 Development of new bio marker for prostate cancer	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 杉元 幹史	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 前立腺がん患者数は増加の一途をたどっている。わが国では2015年にはついに胃がん、肺がんを抜いて男性がんの罹患数で前立腺がんがトップになった。食生活の欧米化や人口の高齢化も罹患数増加の要因であるが、なかでも前立腺特異抗原 (PSA) の普及が大きな影響をおよぼしていることは間違いない。だが一方、PSAは炎症や良性の前立腺肥大症においても変動する非特異的なマーカーである。さらにPSAでは前立腺がんの悪性度の評価は困難である。つまりPSAは感度・特異度および治療の可否を決定する悪性度の判定という意味では十分マーカーとはいえない。現在、このPSAの欠点を補うべくいくつかの新たな前立腺がんマーカーが開発されつつある。ここでは研究段階のものから臨床応用されつつあるマーカーについて理解を深められるように、我が国および欧米の現状を経時的に解説する。そして今後必要とされるマーカーの条件や特性を述べられるように指導する。			
授業の目的 前立腺癌の病態および現行のマーカーであるPSAの利点・欠点を理解し、新規マーカーの必要性を考察する。			
到達目標 1) 前立腺がんの病態に関する知識の包括的整理を行う。現在の診断方法の問題点を明らかにし、新規マーカーの必要性を理解できるようになる。DPA 2) 現在開発中のマーカーから、臨床応用されつつあるものまでを網羅的に検討し、それぞれの特性を理解できる DPB			
成績評価の方法 レポート100%で評価する。 目標到達が不十分だと判断した場合には、2,000字以内のレポートを提出して理解の程度を判定する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業及び学習の方法 講義形式(遠隔授業の可能性あり) 授業計画 1) 前立腺がんの診断・治療についての一般的な知識についての講義 (1～7回) 2) 新規マーカー開発の現状と今後の展望についての講義 (8～15回) 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) 「前立腺癌診療ガイドライン2016」および「前立腺癌取扱い規約」を参考にして、 前立腺癌の疫学、診断について事前学習：15時間 前立腺癌の治療法について事前学習：15時間 現在の診断における問題点について授業内容を中心にまとめる：15時間 今後の新規マーカーの展望についてまとめる：15時間			
教科書・参考書等 教科書 特になし 参考書 「前立腺癌診療ガイドライン2016」メディカルビュー社(日本泌尿器科学会編) 4,400円 「前立腺癌取扱い規約」メディカルビュー社(日本泌尿器科学会、日本病理学会、日本医学放射線学会) 5,060円			
オフィスアワー (月)～(金) 9:30-17:00			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687330-1) 癌とマイクロRNA Cancer and microRNA	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 小原 英幹・森下 朝洋	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 microRNAは小分子RNAであり、さまざまな癌の発生、進展に関与していることを講義する。さらに、学生に、これに関する論文をできるだけ読ませ、担当教員がmicroRNAに関する実験を見せ、説明する。			
授業の目的 1. microRNAと癌の発生、進展の関与について理解する (DPの「専門知識・理解」に対応) 2. microRNAの実験手法について理解する (DPの「専門知識・理解」「研究能力・応用力」に対応)			
到達目標 microRNAの役割と、消化器癌の進展に関連するmicroRNAの関係について理解する レポートによって講義内容の理解を高め、学生の学習成果の評価とする			
成績評価の方法 レポート提出: 100%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (1) マイクロRNAと癌の発生、進展の関与についての講義Ⅰ (2) マイクロRNAと癌の発生、進展の関与についての講義Ⅱ (3) マイクロRNAと癌の発生、進展の関与についての講義Ⅲ (4) マイクロRNAと肝癌 (5) マイクロRNAと胆のう癌 (6) マイクロRNAと膵癌 (7) マイクロRNAと大腸癌 (8) マイクロRNAと胃癌 (9) マイクロRNAと食道癌 (10) メトホルミンの癌の抑制とマイクロRNAⅠ (11) メトホルミンの癌の抑制とマイクロRNAⅡ (12) メトホルミンの癌の抑制とマイクロRNAⅢ (13) gal-9の癌の抑制とマイクロRNAⅠ (14) gal-9の癌の抑制とマイクロRNAⅡ (15) マイクロRNAの網羅的解析(組織、血清)の実験手法の見学 授業及び学習の方法: 授業形態は対面授業。 最近、出版された論文を用いての講義とマイクロRNAの実験手法についての見学 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) PubMedを利用して「microRNA、cancer、review」で論文を検索し、興味ある文献を最低3論文精読する。			
教科書・参考書等 教科書・参考書 特に必要としない			
オフィスアワー 木曜日17時以降 消化器・神経内科学教室			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 特になし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Ex 授業科目名 (講義コード:L687332-1) 分子イメージングの臨床応用 Clinical molecular imaging	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 4	
担当教員名 西山 佳宏, 山本 由佳	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 分子イメージングとは、生体内で起こる様々な生命現象を外部から分子レベルで捉えて画像化することであり、生命の統合的理解を深める新しい研究分野である。分子イメージングとして代表的なポジトロン断層撮影(PET)を主として原理や測定方法、データ解析などについて解説する。			
授業の目的 PETなど分子イメージング法を用いて、脳、腫瘍、心臓などの機能を画像化するための原理や測定方法、データ解析などについて理解する。			
到達目標 1. PETに関する最新の技術・知見を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. PETに関する現状の課題に対して、対策を示すことができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート(50%)(特に到達目標1に対応)、データ解析の発表の内容(50%)(特に到達目標2に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は基本的に対面授業を行う。なお状況によっては授業形態を遠隔へ変更する可能性がある。 [授業計画] 第1回：オリエンテーション、第2回：放射能・放射線の基礎、第3回：放射性医薬品、第4回：核医学装置、第5回：画像解析、第6回：脳神経、第7回：脳血管障害、第8回：心筋血流、第9回：心臓糖代謝、第10回：腫瘍糖代謝、第11回：腫瘍アミノ酸代謝、第12回：腫瘍低酸素、第13回：腫瘍細胞増殖、第14回：腫瘍DNA合成、第15回：頭頸部、第16回：肺癌、第17回：乳癌、第18回：食道癌、第19回：胃癌、第20回：大腸癌、第21回：肝癌、第22回：膵癌、第23回：悪性リンパ腫、第24回：前立腺癌、第25回：子宮癌、第26回：卵巣癌、第27回：骨・軟部腫瘍、第28回：炎症、第29回：サルコイドーシス、第30回：認知症 以上の計画に関しては、進捗状況、内容の理解度等によって変更することがある。 [授業及び学習の方法] 授業は講義を中心に進めるが、受講者の理解を深めるために発表と討議を取り入れる。また授業で学んだ内容及び授業外で自ら学んだ内容の整理を促すために、レポートにまとめる。 [準備学習及び事後学習のためのアドバイス] 分子イメージングとは何か、PETの原理、測定方法について記載されている参考書、文献を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) PETの原理、測定方法について、自分なりに考えられる課題を抽出し、考察する。(10時間) PETの原理、測定方法について、要点をレポートにまとめる。(10時間) PETのデータ解析法について記載されている参考書、文献を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) PETのデータ解析法について、自分なりに考えられる課題を抽出し、考察する。(10時間) PETのデータ解析法について、要点をレポートにまとめる。(10時間) 具体的に行う中枢神経PETのデータ解析について、方法、結果についてまとめ、参考文献を読んで考察を行う。(20時間) PETをはじめとする分子イメージングについて、原理、測定方法ならびに結果の分析について考察を含めレポートにまとめる。(20時間)			
教科書・参考書等 わかりやすい核医学(文光堂)、編集 玉木長良ほか、2022年発行、定価 13,200 円			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

火曜日・木曜日 (10:00~16:00)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

1. 授業の言語は日本語であり、英語で実施することができない。
2. 授業等で配付する資料は日本語である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687333-1) 動脈硬化症への遺伝子治療 Translational research for atherosclerosis	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 井町 仁美, 村尾 孝児	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習30回 自主学习(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 この授業では、動脈硬化症への遺伝子治療の技術を習得する。受講者は、担当教員からの解説を聞き、基礎的な知識の習得、書籍、ネット情報を収集して、実際に研究手技を見学・体験することで遺伝子導入技術の習得を行う。担当教員は、以下の1～5の授業解説をおこない、受講者は実践する。 1、プラスミドの生成 2、遺伝子導入試薬の取り扱い 3、遺伝子を導入する細胞の処理 4、遺伝子導入の手技 5、導入効率のモニタリング			
授業の目的 遺伝子導入方法には様々な方法がある。それぞれの方法について学習し、理論を理解し、最適な遺伝子導入手法を選択し、それらに関する専門知識に加えて、研究能力の基礎を身につける。			
到達目標 1、動脈硬化のメカニズムが理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 2、遺伝子導入の手技を習得し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 3、遺伝子導入効率をモニターし、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 4、ターゲット遺伝子を選択し、その応用を適切に提示できる (DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 受講時の取り組み姿勢50%、実技50%			
成績評価の基準 担当教官は、手技の理解度、実践度を口頭試問し成績を評価する。 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 動脈硬化のメカニズム① 第2回 動脈硬化のメカニズム② 第3回 動脈硬化のメカニズム③ 第4回 動脈硬化のメカニズム④ 第5回 脂質代謝異常と動脈硬化① 第6回 脂質代謝異常と動脈硬化② 第7回 脂質代謝異常と動脈硬化③ 第8回 脂質代謝異常と動脈硬化④ 第9回 動脈硬化に対する遺伝子治療の概論① 第10回 動脈硬化に対する遺伝子治療の概論② 第11回 動脈硬化に対する遺伝子治療の概論③ 第12回 動脈硬化に対する遺伝子治療の概論④ 第13回 動脈硬化に対する遺伝子治療の概論⑤ 第14回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論① 第15回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論② 第16回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論③ 第17回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論④ 第18回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論⑤ 第19回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論⑥			

2026 医学系研究科

- 第20回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論⑦
- 第21回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論⑧
- 第22回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論⑨
- 第23回 動脈硬化に対する遺伝子治療の各論⑩

実習

- 第1回 血管内皮細胞の培養①
- 第2回 血管内皮細胞の培養②
- 第3回 血管内皮細胞の培養③
- 第4回 内皮への血管導入
- 第5回 遺伝子発現検索
- 第6回 遺伝子発現見にターニング
- 第7回 遺伝子導入効率の検討

授業及び学習の方法:座学としての動脈硬化学、実習としての遺伝子導入方法の実習を行う。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)

仲嶋一範 目的別で選べる遺伝子導入プロトコール Bookを一読する

教科書・参考書等

Williams Textbook of Endocrinology 15th ed.; Endocrinology & metabolism

[edited by]Peter W.F Wilson Atlas of Atherosclerosis: Risk Factors and Treatment

仲嶋一範, 北村義浩, 武内恒成/編 目的別で選べる遺伝子導入プロトコール Book

オフィスアワー

火曜日 午後13～18時 随時アポイントによる質問をうける

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

講義で学んだことを、学生自身の研究テーマへ応用するように考えること。

教員の実務経験との関連

主な担当教員は、長年にわたり本領域に携わった経験を有している。

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687334-1) 病理診断学の臨床応用 Clinical application of diagnostic pathology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 羽場 礼次	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 病院教授(病理部長)が、癌細胞の組織学的あるいは細胞学的な形態変化を説明し、様々な病変の組織学的あるいは細胞学的な特徴について理解を深めるよう指導する。また、病理組織診断時に併用される特殊染色や免疫組織化学な補助診断法に関して、実際の実例をあげながら説明する。さらに、組織学的な癌の予後判定や治療効果判定についても説明する。			
授業の目的 (1)腫瘍の定義と分類法を理解する。 (2)癌の組織学的な形態像を理解する。 (3)癌の細胞学的な形態像を理解する。 (4)癌の予後や治療効果判定法を理解する。 (5)特殊染色、免疫組織化学な手法を理解する。			
到達目標 (1)腫瘍の定義と分類法を説明できる。Aと関連。 (2)癌の組織学的な形態像を説明できる。Aと関連。 (3)癌の細胞学的な形態像を説明できる。Aと関連。 (4)癌の予後や治療効果判定法について説明できる。ABと関連。 (5)特殊染色、免疫組織化学な手法について説明できる。ABと関連。			
成績評価の方法 レポートと発表により総合的に判断する。 (レポート80点、発表20点)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (1) 組織診断の現状と役割 (2) 組織の形態と機能 (3) 組織標本作製の実際 (4) 特殊染色の実際 (5) 免疫染色の実際 その1(技術) (6) 免疫染色の実際 その2(組織型の判定) (7) 免疫染色の実際 その3(治療薬の評価) (8) コンパニオン診断の実際 その1(概念) (9) コンパニオン診断の実際 その2(病理診断への応用) (10) 遺伝子パネル検査の実際 その1(腫瘍細胞量・割合の判定) (11) 遺伝子パネル検査の実際 その2(腫瘍品質の評価) (12) 病理正常組織 その1(呼吸器) (13) 病理正常組織 その2(消化器) (14) 病理正常組織 その3(泌尿器) (15) 病理正常組織 その4(婦人科) (16) 腫瘍の定義 (17) 腫瘍の分類 (18) 肺癌の切り出し法 (19) 肺癌の病理組織学的分類 その1(腺癌、扁平上皮癌、小細胞癌)			

2026 医学系研究科

- (20) 肺癌の病理組織学的分類 その2 (大細胞癌、神経内分泌癌、特殊型)
- (21) 肺癌の細胞像と評価法
- (22) On site cytologyの実際
- (23) 肺癌の病理診断と分子標的治療薬
- (24) 肺癌の予後判定
- (25) 肺癌の治療効果判定
- (26) 演習1 (肺癌の病理組織学的判定)
- (27) 演習2 (肺癌の細胞学的判定)
- (28) 演習3 (肺癌の予後判定)
- (29) 演習4 (肺癌の治療効果判定)
- (30) 最終的な授業のまとめの提出と評価

授業及び学習の方法(対面あるいはWEB)

講義において様々の病変や腫瘍の組織形態像について基礎から学ぶ。

演習や実習では、実際の組織標本を用いて組織診断学の知識を獲得する。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)

推薦する教科書あるいはネットにて基本的な事項を予習あるいは復習する。

教科書・参考書等

教科書

1. 坂本穆彦、他(編). 標準病理学、第7版. 医学書院、2023
2. 牛木辰男、他(編). カラー図解 人体の正常構造と機能 I 呼吸器. 日本医事新報社 2021.
3. 向井清、他(編). 外科病理学、第5版. 文光堂. 2020.
4. 日本肺癌学会(編): 臨床・病理 肺癌取扱い規約、第9版. 金原出版、2025.

参考書 特に指定せず、必要に応じてその都度推薦の予定。

オフィスアワー

随時アポイントメントにより質問をうけつける。

また、病理部で講義終了後にうけつける。

毎週月曜日午後4時から5時 (病院3階: 病理部診断科・病理部)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

自らの研究テーマへの応用を考えながら履修すること

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

教員は大学病院内で日常的に全臓器の病理組織診断、細胞診断、術中迅速診断などを行っていますが、特に専門は呼吸器病理です。現在、日本肺癌学会の肺癌取扱い規約委員(細胞診判定基準改定委員会委員長)、ガイドライン検討委員会委員、肺癌診療ガイドライン作成委員として日本全体をリードする立場で活動しています。大学院の授業では、呼吸器領域の最新的话题を提供しながら研究の基礎的な能力を身につけることを目的としています。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687335-1) 神経保護薬の臨床開発 Development of neuroprotective drug	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 鈴木 潔, 山下 彩奈, 中野 裕貴	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 担当教員が神経変性疾患に対する神経保護治療の現状と今後の展望を講義する。			
授業の目的 1) 網膜神経細胞死の機序を理解する。 2) 軸索輸送障害について理解する。 3) 網膜の解剖およびその機能を理解する。			
到達目標 1) 網膜神経細胞死の機序を説明できる。(AB) 2) 軸索輸送障害について説明できる。(AB) 3) 網膜の解剖およびその機能を説明できる。(AB)			
成績評価の方法 演習に関しては提出されたレポートを評価する。 また実習に関してはグループ討論と提出されたレポートの総合評価。プレゼン50%、レポート50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1～6回 網膜虚血再灌流障害による細胞死のメカニズム (1～2回 基礎、3～4回 病理、5～6回 分子機構) 7～14回 慢性高眼圧モデルによる細胞死のメカニズム (7～8回 基礎、9～11回 病理、12～14回 分子機構) 15～22回 アルドステロン全身投与による細胞死のメカニズム (15～16回 基礎、17～19回 病理、20～22回 分子機構) 23～30回 各動物モデルにおける細胞死を抑制する薬剤 (23～24回 基礎、25～27回 病理、28～30回 分子機構) 授業及び学習の方法 網膜虚血再灌流障害、慢性高眼圧、アルドステロン全身投与における網膜障害モデルの網膜標本の分析的観察。 加齢黄斑変性や緑内障に関する最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 自学自習(準備学習(関連情報収集) 60時間 + 事後学習(プレゼンスライドのまとめ) 60時間)			
教科書・参考書等 教科書 標準眼科学 医学書院 参考書 生体の科学 細胞表面受容体 医学書院			
オフィスアワー 水曜 16:30～17:30: アポイントメントにより質問の時間を設ける。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687337-1) 救急・生体侵襲制御 Emergency medicine and control over biological invasion: Neurocritical care	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 河北 賢哉	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 神経集中治療は死亡率の減少だけではなく、社会復帰率の増加を目指した急性期(重症)脳障害への治療戦略であり、神経集中治療では全身重要臓器(肺、心、腎、肝、血液)と障害脳とのインターアクションが重要です。本講義の総論では脳を意識した全身管理、各論では代表的な疾患別に系統的管理を実例に基づき講義し、診療技術が身につくようにします。そして、最新文献考察を踏まえて研究テーマをみつけデータをとり論文文化していく過程を学べるようにします。			
授業の目的 脳障害はその後の低酸素状態や低血圧などにより二次性脳障害を受ける。二次性脳障害の原因はいろいろでありそれを理解しその異常を指摘し解決策を提示できるように文献を読み、考え、まとめる能力を身につける。それをもとに代表的疾患別に神経集中治療を行う際に注意すべきことを整理できる。最後に神経集中治療の研究テーマをみつける。			
到達目標 1) 二次性脳障害を起こさない全身管理ができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 2) 代表的疾患別に重要ポイントを外さない神経集中治療が実践できる。(DPの「専門知識・理解」に対応)。 3) 神経集中治療の研究テーマをみつけPICOを作り、論文化することができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 取得した臨床診療の知識と技術、論文により評価する。 レポート80%(主に到達目標1、2に対応) 発表と討議20%(主に到達目標3に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 神経集中治療:総論 第9回 神経集中治療:てんかん重積状態 第2回 神経集中治療:呼吸管理 第10回 神経集中治療:クモ膜下出血 第3回 神経集中治療:循環管理 第11回 神経集中治療:敗血症関連脳障害 第4回 神経集中治療:代謝栄養管理 第12回 神経集中治療:熱中症 第5回 神経集中治療:脳循環代謝管理 第13回 神経集中治療:モニタリング 第6回 神経集中治療:体温管理療法 第14回 神経集中治療:研究の進め方 第7回 神経集中治療:心拍再開後脳障害 第15回 神経集中治療:統括 第8回 神経集中治療:頭部外傷 授業及び学習の方法(遠隔授業) 講義および診療を行う。神経集中治療に必要な診療スキルを身につける。最近の基礎的、臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成し知識を深め、データをとり論文化する。 【自学自習に関するアドバイス】 講義の前には救急医療・集中治療・災害医療テキストの関連箇所を予習して、授業を受けること(2時間×15回)。 授業中の質問に答えられなかった箇所については、テキストで確認すること(2時間×15回)。			
教科書・参考書等 参考書 黒田泰弘 監修 Neuro ICUブック Kiwon Lee 編著 2021 メディカルサイエンスインターナショナル 黒田泰弘編 神経集中治療 救急・集中治療vol 28 No 11/12, 2016 総合医学社,			

2026 医学系研究科

黒田泰弘編 エキスパートに学ぶ神経集中治療 救急・集中治療vol 30 No 4, 2018 総合医学社,
Kiwon Lee, The NeuroICU Book, Second Edition (Neurology) 2018 McGraw-Hill Education

オフィスアワー

南病棟1階 救命救急センター医局。河北のメール kawakita.kenya@kagawa-u.ac.jp に連絡ください。毎週水曜日13～14時にwebセミナーを開催しています。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

積極的に参加、発言してください。

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687350-1) 可塑性病態論 An Introduction to Plasticity and Pathology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 藤村 篤史・神鳥 和代	関連授業科目 特になし		
	履修推奨科目 特になし		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習 30時間)			
授業の概要 細胞の可塑性は、正常な生体反応としての現象から病因としての機能まで、さまざまな役割を担っています。可塑性病態論では、細胞の可塑性というキーワードに着目して、担当教員はさまざまな疾患の成り立ちを分子レベルから概説し、学生諸兄は可塑性の関連する生命現象について理解を深めるための演習を行います。 Cellular plasticity plays a variety of roles, ranging from the phenomenon as a normal biological response to a function in pathogenesis. In Plasticity Pathophysiology, we will outline the origins of various diseases from the molecular level, focusing on the key concept of cellular plasticity.			
授業の目的 可塑性が関連するさまざまな生命現象に関して、分子レベルでの理解を深めることで、科学の進歩を学習するとともに、新たな課題を明確化することで、学生諸兄の専門知識・理解力を向上させつつ、研究能力・応用力の底上げを図ることで、研究及び診療における視点を広げることを目的とします。 The aim of this course is to learn about scientific advances and clarify new questions by deepening our understanding a			
到達目標 1. 生命の成り立ちを理解するとともに細胞内部の構築と機能を説明することができる。 2. 生命現象に必要な細胞内外の物質の輸送機構を説明することができる。 3. 細胞内情報伝達機構の種類とその各々の概略を説明することができる。 (1~3までDP「専門知識・理解」に対応) 4. 生理学の知見を基に、疾患について関連付けて説明することができる。 (DP「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 可塑性病態論の全講義数の3分の2以上に出席し、かつ、各回の講義に関するレポート(*)を提出した場合にのみ、可塑性病態論試験(本試験、再試験)の受験資格を与える。可塑性病態論の本試験では、100点満点の試験素点が60点以上のものを合格とする。本試験に不合格の場合には一度だけ再試験を行い、100点満点の試験素点が60点以上のものを合格とする。再試験の後、再再試験は実施しない。なお、本試験、再試験のいずれもマークシート形式による出題を行う予定である。 (*)レポートの様式は初回講義内で明示する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 「授業計画」 1. 細胞可塑性の分子病態生理学(1/3)シグナル伝達概論 (藤村) 2. 細胞可塑性の分子病態生理学(2/3)可塑性を司る転写因子 (藤村) 3. 細胞可塑性の分子病態生理学(3/3)細胞の可塑性と組織・個体の恒常性 (藤村) 4. 神経系細胞の可塑性と疾患(1/3)神経幹細胞の未分化維持能と分化能 (藤村) 5. 神経系細胞の可塑性と疾患(2/3)グリア細胞の可塑性と脳腫瘍 (藤村) 6. 神経系細胞の可塑性と疾患(3/3)神経細胞の可塑性と脳腫瘍 (藤村) 7. 上皮細胞の可塑性と疾患(1/3)上皮-間葉移行(EMT)を司る分子機構 (藤村) 8. 上皮細胞の可塑性と疾患(2/3)間葉-上皮移行(MET)を司る分子機構 (藤村) 9. 上皮細胞の可塑性と疾患(3/3)上皮細胞の可塑性と皮膚組織の恒常性 (藤村) 10. Hippoシグナル経路の分子病態生理学 (1/3)Hippoシグナル例路の概説 (藤村) 11. Hippoシグナル経路の分子病態生理学 (2/3)分化状態の責任因子YAP/TAZ (藤村)			

2026 医学系研究科

12. Hippoシグナル経路の分子病態生理学 (3/3) 癌生物学におけるHippoシグナル (藤村)

13. 細胞内代謝の可塑性と疾患 (藤村)

14. 組織微小環境の可塑性と疾患 (藤村)

15. 分化・脱分化・転分化の分子病態生理学 (藤村)

本試験・再試験

講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習 30時間)

「授業及び学習の方法」

授業は講義中心で実施します。各回の講義内容に関して、各自1問以上選択肢形式の問題及び正答案を作成し、次回講義の冒頭でそれらを用いた小テストを実施することで知識のインプットとアウトプットを図ります。授業では基本となる知識目標が設定され、これを理解するために必要な資料がweb配布されます。また、各講義のテーマに沿った論文を読むことで、その領域の現状と課題を俯瞰します。ただし、受講者の状況によりレポート課題の提出をもって講義に置き換える場合があります。

「自学自習のためのアドバイス」

本講義では研究の作法について学び、自らが企画立案できる方法を学ぶ。学生諸兄は、自らの専門科に関係なく、とにかく日頃から論文を読む習慣をつけるべきであります。

教科書・参考書等

特定のものは指定しません。

オフィスアワー

毎週木曜日12:00~13:00。直前に電話(087-891-2095)で在室を確認してください。お急ぎでなければ各教員のアドレスまでメールにてお問い合わせください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

「自学自習のためのアドバイス」に記載の通りです。

なお、本授業の教授言語は日本語であり、英語での実施には対応しておりません。

教員の実務経験との関連

生理学エデュケーターによる講義

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687351-1) セレンディピティを高める: Clinical QuestionsをAnswersへつなぐ尿路上皮癌研究の試み Enhancing Serendipity	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 田岡 利宜也	関連授業科目 なし		
	履修推奨科目 なし		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(事前学習 30時間、および事後学習 30時間)			
授業の概要 本講義では、尿路上皮癌領域において臨床現場の疑問(Clinical Questions)を研究課題へ落とし込み、臨床研究(データ収集・解析)および基礎研究(実験・解析)を論文文化までつなげた実例を通して、セレンディピティを意図的に高める思考と手順を共有する。受講者が自身の専門分野へ水平展開できるよう、仮説生成研究、多施設データベース解析、国際共同ならびに企業共同研究、酸化ストレスや蒸留水の抗癌効果の検証などを題材に、CQの絞り込み、アウトカム設計、研究倫理・実現可能性評価、共同研究体制の構築、英語論文執筆および査読対応の要点を解説し、必要に応じて支援する。			
授業の目的 受講者は、各専門分野の研究課題を作成し、データ収集、あるいは基礎実験を介して解析・論文文化まで到達する。			
到達目標 1) Clinical Questions立案に繋がるセレンディピティを意図的に高める思考を高める(DPのA:専門知識・理解、B:研究能力・応用力に対応) 2) Clinical Questionsを作成し、データ収集、あるいは基礎実験を介して論文文化まで到達する。(DPのA:専門知識・理解、B:研究能力・応用力に対応)			
成績評価の方法 ・Clinical QuestionsをAnswerにつなげる研究案の立案・発表(レポート提出を含む):最大6課題、各10点(計60点) ・Clinical Questionsを研究を介して論文文化につなげる最終成果物:論文形式の原稿1本(投稿規定に準拠、抄録・図表案を含む)40点 ※掲載可否や採択の有無は評価対象とせず、提出物(原稿)の完成度に基づいて評価する。			
成績評価の基準 績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで)到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満)到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満)到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満)到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満)到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業及び学習の方法:講義形式(遠隔授業の可能性あり) 1) セレンディピティを高める研究思考法:CQの見つけ方と構造化 2) 実例①(臨床研究):CQからデータ収集・解析へ(症例/コホート) 3) CQ→仮説→研究目的:PICO/PECOとリサーチクエスションの言語化① 4) 実例②(質改善研究):手術チェックリスト等の開発と評価 5) CQ→仮説→研究目的:PICO/PECOとリサーチクエスションの言語化② 6) 実例③(企業共同研究):研究体制、役割分担、著者順、合意形成 7) CQ→仮説→研究目的:PICO/PECOとリサーチクエスションの言語化③ 8) 実例④(国際共同研究):研究体制、役割分担、著者順、合意形成 9) CQ→仮説→研究目的:PICO/PECOとリサーチクエスションの言語化④ 10) 実例⑤(基礎研究):酸化ストレス等を題材とした実験設計・解析 11) CQ→仮説→研究目的:PICO/PECOとリサーチクエスションの言語化⑤ 12) 英語論文執筆:IMRaD、図表作成、投稿規定への適合① 13) 英語論文執筆:IMRaD、図表作成、投稿規定への適合② 14) 英語論文執筆:IMRaD、図表作成、投稿規定への適合③ 15) 査読対応と総合演習:リバイス戦略、最終原稿のブラッシュアップ 【自学自習のためのアドバイス】 各回の学習効果を高めるため、事前にCQの立案や論文文化作業を進めたうえで、講義中は受講者自身のCQを持参し、積極的なディスカッションにつなげる。講義後は、得られた助言を基にCQをブラッシュアップし、必要に応じて研究計画の具体化や論文文化をさらに推進する。尚、自学自習は事前・後学習を各講義前後で約4時間、計60時間			

2026 医学系研究科

を目安とする

教科書・参考書等

なし。担当教員が適宜紹介する。

オフィスアワー

火曜日 12:15～12:45、および金曜日 12:30～13:00（泌尿器科医局）

※上記時間帯は事前予約なしで訪問可能。その他の時間帯は泌尿器科医局にて事前に予約すること。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語（英語で実施も可能だが、情報提供が不十分となる可能性あり）

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688002-1) 慢性腎臓病の進展抑制・機序の解明 Inhibition of the progression of chronic kidney disease and clarification of the mechanism	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻				
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40				
	授業形態 Lx	単位数 2					
担当教員名 祖父江 理, 南野 哲男	関連授業科目 履修推奨科目						
学習時間 講義・演習90分×15回+事前学習30時間 事後学習30時間							
授業の概要 当院における腎臓病データベースを用いた臨床研究と最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究の実際を知ること で基礎臨床研究の立案、実施の実際に触れる。							
授業の目的 最新腎臓病学についての知識を深めることを目標とし、到達目標は腎臓疾患に関する基礎臨床研究の立案に必要な 研究リテラシーを確立することである。							
到達目標 到達目標 <ul style="list-style-type: none"> 腎臓病学における基礎・臨床研究の手法（細胞実験、動物モデル、臨床デザイン、統計解析など）を理解し、実践的に活用できる。 基礎研究の成果を臨床研究に応用し、新たな課題設定と解決方法を提案できる。 DPとの関連性 <ul style="list-style-type: none"> 本授業の到達目標は、DPの①「専門知識・理解」と②「研究能力・応用力」に対応し、腎臓病学の基礎・臨床研究の知識と応用力を育成する。 さらに、③「倫理観・社会的責任」に基づき、動物実験や臨床試験における倫理的配慮についての理解を深める。 また、④「グローバルマインド」に基づき、国際的な研究動向を把握し、成果を発信する力を養う。 具体的には、腎臓病学における基礎研究・臨床研究を理解し、独創的な発想と新しい課題への挑戦をもって独自に基礎研究・臨床研究を計画・立案できる能力を身につけた者に学位を授与する。この方針は、学生が修了する際に達成すべき専門的な能力と態度を明確に示し、大学院教育の質と一貫性を確保するために重要な役割を果たす。							
成績評価の方法 口頭試問にて知識が十分に達成目標に到達しているかを評価する。加えて、授業終了後2週間以内に講義演習の内容 についてのレポートの提出を求める。口頭試問、レポートの内容から成績の評価を行う。							
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 <ul style="list-style-type: none"> 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 30%;">合格又は了</td> <td>到達目標を達成している。</td> </tr> <tr> <td>不合格</td> <td>到達目標を達成していない。</td> </tr> </table>				合格又は了	到達目標を達成している。	不合格	到達目標を達成していない。
合格又は了	到達目標を達成している。						
不合格	到達目標を達成していない。						
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス <ol style="list-style-type: none"> 腎臓病データベースを用いた臨床研究 講義① ～腎臓病全般について～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 講義② ～腎臓病各論について～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 講義③ ～臨床研究立案について～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 講義④ ～統計解析技法について～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 SGD① ～実際のデータベースを用いた実習①～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 SGD② ～実際のデータベースを用いた実習②～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 SGD③ ～実際のデータベースを用いた実習③～ 腎臓病データベースを用いた臨床研究 SGD④ ～データベース研究の発表、総括～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 講義① ～基礎研究の基礎知識について～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 講義② ～腎構成細胞について～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 講義③ ～腎臓病で行われている基礎研究～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 SGD① ～細胞を用いた研究①～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 SGD② ～細胞を用いた研究②～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 SGD③ ～ラットを用いた研究①～ 最新技術を駆使した腎臓病領域の基礎研究 SGD④ ～ラットを用いた研究②～ 【自学自習のためのアドバイス】 講義に臨む前に予習をしてくる。そしてその内容を実習でしっかりと確認することが重要です。							

2026 医学系研究科

事前学習は下記教科書・参考書などを用いて、それぞれ30時間の事前学習と事後学習を目安とする。

教科書・参考書等

Brenner and Rector's The Kidney: Expert Consult - 2-Volume Set, 10e, 2015

臨床研究の道標 7つのステップで学ぶ研究デザイン 福原俊一著 認定NPO法人 健康医療評価研究機構 (iHope International) 発行2013

オフィスアワー

基礎臨床研究棟 4階 403研究室(腎臓内科医局) 水曜日・金曜日午後 14時から17時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特にありません。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688003-1) がん薬物療法 Chemotherapy	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 奥山 浩之・辻 晃仁	関連授業科目 臨床検査、病理、放射線診断学、臓器別がん治療各論、がん緩和治療		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 「がんのベーシックサイエンス」 ・がんの生物学と遺伝子、がん免疫、がんの病因・疫学・スクリーニング・予防等の基礎科学について解説する。 「がんの臨床薬理学」 ・薬物動態学、薬力学、薬物代謝とクリアランス、pharmacogenomics、抗がん剤の種類と分類、投与量と投与スケジュール、薬剤耐性、効果と毒性の予測について解説する。			
授業の目的 「がんのベーシックサイエンス」 ・正常細胞の生物学を理解する。発癌過程を理解する。 ・遺伝子の構造・構成・発現・制御を理解する。 ・細胞周期、腫瘍形成による細胞周期の制御、細胞増殖とのバランスを理解する。 ・腫瘍細胞の動態・増殖・プログラム細胞死・細胞死と細胞増殖とのバランスを理解する。 ・分子技術（PCR法、染色体分析）その他の分子生物学、腫瘍細胞生物学を理解する。 ・腫瘍と宿主の免疫系の関連（腫瘍抗原、免疫を介した腫瘍細胞毒性、サイトカインの作用）を理解する。 ・発がんにおける遺伝子および環境因子の病			
到達目標 ・がんの生物学と遺伝子、がん免疫、がんの病因・疫学・スクリーニング・予防などについて説明・対応できる。 ・がんの臨床薬理動態について説明・対応できる。 (DPのABに対応)			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、講義内容あるいは講義担当教員の出題に解答したものを提出する。レポート提出(100%)で評価する。なお、単位の認定はがん専門共通科目を総合して行う。(4単位)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業及び学習の方法:当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である。この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。 授業計画 1. がんのベーシックサイエンス 薬剤部との共同講義 2. がんの発生メカニズム・病態生理 3. がんの疫学 4. 頭頸部がんの診断と治療 5. 肝胆膵がんの診断と治療 6. 大腸がん・肺がん・胃がんの診断と治療 7. マイクロバイオーム 8. 原発不明がん 9. がん免疫療法 10. がんゲノムパネル検査 11. 遺伝子変異と分子標的薬剤 12. 遺伝性癌とカウンセリング 13. 「がんの臨床薬理学」薬剤部との共同講義 14. がん薬物療法総論			

2026 医学系研究科

15. 抗がん剤のPK/PD、臨床薬理

その他e-learning を利用

【自学学習のためのアドバイス】

がん薬物療法に関する最新の教科書、診療ガイドライン、学術論文、学会資料等を日常的に参照し理解を深めるとともに、学習内容についてノート作成や症例の振り返り・分析を行い、自学自習を継続することが望ましい。(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)

教科書・参考書等

教科書等は基本的には無いが、講義の際に関連文献の紹介を行う。

オフィスアワー

火・水・木曜日8:30~9:00であれば対応可だが、もし時間に余裕があるなら事前にアポイントメントを取得することを勧める。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

当該コースの学生の必修科目である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Ex 授業科目名 (講義コード:L688014-1) 放射線医学 Radiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 4	
担当教員名 西山 佳宏, 山本 由佳	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 単純X線検査、消化管造影検査、コンピュータ断層撮影 (CT) 検査、磁気共鳴イメージング (MRI) 検査といった画像法について、原理、各種疾患の所見、適応ならびに総合診断における位置づけについて解説する。			
授業の目的 画像診断検査の原理、方法、適応、判定法、安全管理を理解し、それらの知識を応用し、自ら画像診断を実践する能力を身につける。			
到達目標 1. 画像診断検査の最新の技術・知見を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 画像診断検査の現状の課題に対して、対策を示すことができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート(50%)(特に到達目標1に対応)、読影診断レポート、症例検討会の発表の内容(50%)(特に到達目標2に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は基本的に対面授業を行う。なお状況によっては授業形態を遠隔へ変更する可能性がある。 [授業計画] 第1回:オリエンテーション、第2回:放射線傷害・防護・安全管理、第3回:診断総論、第4回:X線検査総論、第5回:磁気共鳴検査総論、第6回:脳、第7回:頭蓋骨、第8回:脊髄、第9回:頭頸部、第10回:甲状腺、第11回:副甲状腺、第12回:呼吸器、第13回:縦隔、第14回:乳房、第15回:心臓、第16回:大血管、第17回:末梢血管・リンパ管、第18回:消化管、第19回:腹部一般、第20回:肝臓、第21回:胆嚢、第22回:膵臓、第23回:脾臓、第24回:腎尿路、第25回:前立腺、第26回:副腎、第27回:子宮、第28回:卵巣、第29回:骨・関節・軟部組織、第30回:救急疾患 以上の計画に関しては、進捗状況、内容の理解度等によって変更することがある。 [授業及び学習の方法] 授業は講義を中心に進めるが、受講者の理解を深めるために発表と討議を取り入れる。また授業で学んだ内容及び授業外で自ら学んだ内容の整理を促すために、レポートにまとめる。 [準備学習及び事後学習のためのアドバイス] 単純X線検査、消化管造影検査、コンピュータ断層撮影 (CT) 検査、磁気共鳴イメージング (MRI) 検査の原理、方法等について記載されている参考書を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) 各種画像診断検査の適応について、禁忌項目等を含めまとめる。(10時間) 各種画像診断検査について、要点をレポートにまとめる。(10時間) 各種画像診断検査での各種疾患における特徴的な所見について記載されている参考書を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) 各種画像診断検査での適応を学習し、総合診断における位置づけについて、自分なりに考えられる課題を抽出し、考察する。(10時間) 各種画像診断検査について、造影剤やX線被ばくなどの安全管理についてレポートにまとめる。(10時間) 画像診断検査の最新の技術・知見について、参考文献を読んで考察を行う。(20時間) 自ら選択した画像診断検査について、検査の原理、測定方法、所見、課題についてレポートにまとめる。(20時間)			
教科書・参考書等 放射線医学 放射線医学総論(金芳堂)、編集 富山憲幸ほか、2012年刊行、定価 5,060円			
オフィスアワー 火曜日・木曜日(10:00~16:00)			

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

1. 授業の言語は日本語であり、英語で実施することができない。
2. 授業等で配付する資料は日本語である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687401-1) 希少糖医学 Rare sugar medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 星川 広史	関連授業科目 希少糖科学特論		
	履修推奨科目 希少糖科学特論		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 希少糖の生理活性には様々なものがあるが、中でもD-alloseは各種癌細胞に対して抗腫瘍効果を有することが明らかとなっている。D-alloseの抗腫瘍効果のメカニズムを理解し、臨床に応用するための課題を明らかにし、解決方法を議論する。			
授業の目的 1) 希少糖の種類、それぞれの生理活性を学習する。 2) 抗腫瘍効果を有するD-alloseの性質と、抗腫瘍効果のメカニズムを学習する。 3) 現在までに明らかになっている知見をもとに、今後の臨床応用に向けての課題と解決策を考察する。			
到達目標 1) 希少糖の種類、それぞれの生理活性を理解し説明できる。(A) 2) 抗腫瘍効果を有するD-alloseの性質と、抗腫瘍効果のメカニズムを説明できる。(AB) 3) 今後の臨床応用に向けての課題を挙げ、それに対する解決策を提示できる。(AB)			
成績評価の方法 与えられたテーマに関するレポート等により評価する。(80%) 合わせて口頭試問を行い、総合的に評価する。(20%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 希少糖に関する最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成する 第1回 希少糖の定義、イズモリングの理解 第2回 希少糖の生理活性 第3回 希少糖と疾病との接点 第4回 希少糖と抗がん作用 第5回 D-alloseの各種癌細胞に対する効果と分子機構の検索1 第6回 D-alloseの各種癌細胞に対する効果と分子機構の検索2 第7回 D-alloseの各種癌細胞に対する効果と分子機構の検索3 第8回 D-alloseの各種癌細胞に対する効果と分子機構の検索4 授業及び学習の方法: 講義において配布するプリントやマルチメディアによる情報提供等により学習する。 この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。			
【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習 15時間 + 事後学習 15時間) これまでに報告のある希少糖の生理活性に関する論文を検索、通読し、これまでの知見を整理するとともに、今後の解決すべき課題の抽出と、方法論について学習する。			
教科書・参考書等 教科書参考書 特になし			
オフィスアワー 月～金 12-17時 耳鼻科医局:アポイントにより質問の時間を設ける。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 1. 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。 2. 授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。			

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687402-1) 地域医療学 Regional Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 市来 智子	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習(準備学習15時間 + 事後学習15時間)			
授業の概要 日本の医療は、国際的に高く評価されてきたが、今日各地で地域医療崩壊が問題となっている。その実態を知り、解決策を見いだすことは重要かつ喫緊の課題である。医療関係者の立場から、現在の地域医療を考察し、国民に安心で安全な質の高い医療提供システムを構築するための方策を考察する。また近年構築されつつある地域包括ケアシステムの問題点について調査検討する。			
授業の目的 香川県の地域医療の実態と問題点を考察し、地域医療システムの実態について調査検討する。地域中核病院の機能、大学病院の機能について考察する。病診連携など地域医療活性化のために必要なシステムを考察する。大学病院の地域医療連携担当部門の業務を調査検討し、地域包括ケアシステムのあり方について調査検討する。さらに在宅医療の問題点を考察する。(AB)			
到達目標 1. 地域医療連携における大学病院の役割を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 高齢化社会における地域包括ケアシステムの概要を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 大学病院の地域医療連携担当部門の業務内容、機能、問題点を説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 4. 地域医療連携における多職種連携の重要性を説明できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応) 5. 地域医療と医療連携の今後の課題の提唱できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 授業時の討論とレポート (討論20%、レポート80%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画： 1) 地域医療の実態と問題点を考察する 2) 地域医療がなぜ崩壊しているか調査検討する 3) 地域医療システム(医療者の確保と育成)について実態を知る 4) 地域医療の責任機関の創設について考察する 5) 地域医療の再生に向けてなすべき事を考察する 6) 地域包括ケアシステムのあり方について調査検討する 7) 大学病院の地域医療連携担当部門の業務を調査検討する 8) 在宅医療の問題点を考察する 授業及び学習の方法： 講義および収集した資料、医療統計等の公示資料をもとに自らのデータベース構築を図り、上記のテーマについて討論と考察を行う。レポートを作成し、発表する。講義は遠隔授業で行う。 自学自習のためのアドバイス： 資料収集・調査には香川大学医学部附属病院総合地域医療連携センターのホームページ等にて業務を参考にしてください。 1)～8)まで1項目あたり3.75時間の自習を行ってください。			
教科書・参考書等 教科書 スーパー総合医「在宅医療のすべて」中山書店、専門編集：平原佐斗司 参考書 新・総合診療医学「家庭医療学編」カイ書店、編集：藤沼康樹			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

木曜日午後

場所：香川大学総合診療科医局（研究棟2階）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

資料収集・調査には香川大学医学部附属病院総合地域医療連携センター業務を参考にしてください。

教員の実務経験との関連

香川大学医学部附属病院総合地域医療連携センターに所属し、大学病院の地域医療連携に関する実務経験をもとに講義・演習を行います。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687403-1) 高齢者医療学 Elderly Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 星川 広史	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間)			
授業の概要 日本は世界に類をみない急速な超高齢化社会を迎えており、高齢者に対する医療ニーズが急激に高まっている。特に、高齢者は多疾患に罹患しており、画一的な治療法が困難である。また、高齢者に特有な疾患については、その病態についての医学的な解析が必須である。高齢者に特有な疾患それぞれの病態、治療法、予防法を理解するとともに、我が国における医療・介護制度の現状とその限界を理解することで、今後の課題・対応策についても検討する。			
授業の目的 高齢者医療の現状・課題を理解し、高齢者の生理機能を理解する。			
到達目標 1) 高齢者医療制度を説明できる。(A) 2) 介護保険制度を説明できる。(A) 3) 高齢者に特有の疾患を説明し、医療制度、介護制度との連携について議論できる。(A, B)			
成績評価の方法 レポート(80%)、グループ討論(20%)などを総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回 高齢者医療の概論1 2回 高齢者医療の概論2 3回 高齢者の生理機能1 4回 高齢者の生理機能2 5回 加齢による特有の病態1 6回 加齢による特有の病態2 7回 高齢者医療制度と介護保険制度1 8回 高齢者医療制度と介護保険制度2 授業及び学習の方法: 講義及び、グループ学習。興味ある病態に関する最新の知見について系統的に文献検索し、考察したものをまとめる。 この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。			
【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習(準備学習 15時間 + 事後学習 15時間) 教科書的な内容の理解、過去の論説、論文を検索、通読し、疾患と制度との整合性について理解を深めるとともに問題点を抽出し、解決策を議論できるように学習する。			
教科書・参考書等 教科書 特になし 参考書 老年医学系統講義テキスト(日本老年医学会 2013/04)、高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015(日本老年医学会)			
オフィスアワー 随時: アポイントにより質問の時間を設ける(月~金 12~17時 地域医療教育支援センター)			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 1. 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。 2. 授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ACBM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687404-1) 医療倫理 Medical ethics	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ACB・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 隈元 謙介	関連授業科目 研究・生命倫理		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×8回+事前学習・事後学習各回2時間程度(16時間+16時間)			
授業の概要 医療倫理は、ヒトを対象とした臨床研究においては、研究者の基本的資質・学識として備えていなければならない事項である。担当教員は、ヒトを対象とした研究を実施するにあたって求められる倫理規範とその臨床研究の実施について授業を行う。			
授業の目的 基礎医学研究や臨床研究は、実施、データ解析、報告に至るまで、倫理規範に反するものであってはならない。本授業では、正しい倫理観・社会的責任の下、基礎研究・臨床研究を実施するために必要な医療倫理についての専門知識を身につける。			
到達目標 基礎研究・臨床研究における医療倫理を理解し、独創的な発想と新しい課題への挑戦をもって独自に基礎研究・臨床研究を計画・立案できる能力を身につけることを到達目標とする(DPのA:専門知識・理解、C:倫理観・社会的責任、B:研究能力・応用力に対応)。			
成績評価の方法 レポート50%、期末テスト50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 月曜日15時開始。 1回: 医学・生命科学研究における倫理観念の基本的考え方(1) 2回: 医学・生命科学研究における倫理観念の基本的考え方(2) 3回: 医学・生命科学研究における倫理観念の基本的考え方(3) 4回: 臨床研究の実際(1) 5回: 臨床研究の実際(2) 6回: 臨床研究の実際(3) 7回: 臨床研究の実際(4) 8回: まとめ * 不定期開催予定の倫理教育講習会(年間4回程度、1回90分)への出席が望まれる。 【授業及び学習の方法】 講義方式で行われる(対面または遠隔授業)。ただし、状況によりレポート課題の提出をもって講義に置き換える場合がある。 また、香川大学医学部倫理委員会が開催する倫理講習会(年間3回程度開催予定)に出席することが望ましい。 【自学自習のためのアドバイス】 講義に挑む前に予習をしてきちんと講義についてくること(事前学習2時間程度)、そしてその内容を講義でしっかりと確認することが重要である。記載された講義に加え、自主的に事後学習(各回2時間程度)行うと効率よく学習できる。			
教科書・参考書等 教科書・参考書特に定めないが、適宜推薦・指示する。			
オフィスアワー 金曜日16時から17時			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ なし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

本講義は、研究・大学院担当副医学部長が担当する。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687405-1) 生活習慣病学 Life style related disease	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 村尾 孝児	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・自学自習 (90分×8回) (準備学習 各2時間 + 事後学習 各2時間)			
授業の概要 この授業では、最近患者が増加している生活習慣病(糖尿病、高血圧症、肥満、脂質異常症)について知識を習得する。担当教員は、最近の糖尿病、高血圧症、生活習慣病の概要を解説し、受講者は書籍、ネット情報を収集して、参考書を読み、自らの考えをまとめてレポートを書き他の受講者と話し合う。			
授業の目的 生活習慣病には様々な要因、疾患がある。それぞれの疾患について学習し、理論を理解し、生活習慣病の病態の把握、身体所見、検査データの解析の方法、治療方法の概要、予防方法を身につける(AB)。			
到達目標 1、香川県生活習慣病の特性を理解し、その要点を適切に説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応) 2、香川県に生活習慣の問題点を挙げ、その要点を適切に説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応) 3、生活習慣病の診断、治療ができ、その要点を適切に説明できる(DPの「専門知識・理解」に対応) 4、生活習慣病の予防が概説でき、その応用を適切に提示できる(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 小テスト25%、レポート75%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 講義を行う。 第1回 香川県における生活習慣病の特徴 第2回 香川県における生活習慣病の実態 第3回 香川県における生活習慣病対策の現状 第4回 生活習慣病としても糖尿病の理解 第5回 生活習慣病としても高血圧症の理解 第6回 生活習慣病としても脂質異常症の理解 第7回 生活習慣病としても肥満の理解 第8回 生活習慣病の予防 授業は講義を中心に進めるが、受講者の理解のために発表と討論を取り入れる。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習(準備学習 2時間 + 事後学習 2時間) Williams Textbook of Endocrinology (14th edition) 2023の糖尿病、高血圧症、生活習慣病の項を一読する。			
教科書・参考書等 教科書Williams Textbook of Endocrinology (14th edition) 2023 厚生労働省発行 生活習慣白書2022			
オフィスアワー 火曜日午後13時—18時。原則として授業中、授業後に質問を受けるが、事前にアポイントメントを取れば随時対応したい。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 論文の解説を担当する学生は、論文を簡単に説明できるようにレジюмеを作って授業当日に配布できるようにする。担当学生以外も事前に当該論文を読んで理解しておくことが望ましい。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687406-1) 災害医療・災害医学 Basics of prehospital medicine and disaster medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 河北 賢哉	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×8回+自学自習30時間 (準備学習15時間+事後学習15時間) 準備学習8時間+事後学習8時間 (30時間)			
授業の概要 病院前救急医療・災害医療の講義演習を行う。研究テーマを提出し、データをとって論文化を行う。			
授業の目的 南海トラフ巨大地震をはじめとする大規模災害に備え、医学的視点からの災害対応能力を養うことを目的とする。南海トラフ巨大地震における病院および地域における具体的なリスクや被害、医療機関の対応、地域医療連携、行政・防災機関との協働などについて実践的に理解を深める。			
到達目標 1) 大規模災害時の医療機関や地域におけるリスクや被害を具体的に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2) 大規模災害に関する災害医療の研究テーマをみつけPICOを作り、データを集積、論文化することができる (DPの「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 取得した知識と技術、論文により評価する レポート80%および発表と討議20% (到達目標1、2に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 病院前救急医学：総論 第5回 災害医療：総論 第2回 病院前救急医学：各論1 第6回 災害医療：各論1 第3回 病院前救急医学：各論2 第7回 災害医療：各論2 第4回 病院前救急医学：総括 第8回 災害医療：総括 授業及び学習の方法 (遠隔授業) 講義および演習を行う。病院前救急医療・災害医療に必要なスキルを身につける。最近文献を検索し、系統的に要約を作成し知識を深め、データをとり論文化する。 【自学自習に関するアドバイス】 講義の前には救急医療・集中治療・災害医療テキストの関連箇所を予習して、授業を受けること (2時間×8回)。 授業中の質問に答えられなかった箇所については、テキストで確認すること (2時間×8回)。			
教科書・参考書等 教科書 なし 参考書 総務省消防庁 救急活動データ: http://www.jaam.jp/html/info/2017/info-20170410.htm			
オフィスアワー 南病棟1階 救命救急センター医局。河北のメール kawakita.kenya@kagawa-u.ac.jp に連絡ください。毎週水曜日13~14時にセミナーを開催しています。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 積極的に参加、発言してください。 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABDM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687407-1) 神経病学 Neurology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻																
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40																
	授業形態 Lx	単位数 2																	
担当教員名 石川 一朗, 中村 祐	関連授業科目 履修推奨科目																		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間)																			
授業の概要 この授業では、臨床神経学に必要な神経系の解剖と生理を復習し、神経学的所見から得られた情報から責任病巣を的確に類推できるように修練する。また電気生理学的検査、画像診断など諸検査の手技と解釈についても学び、病変の性質を決定するための方法を習得する。最終的にはこれらの知識に基づいて臨床診断が系統的に行えることを目標とする。次に、種々の神経系疾患における病態生理および治療に関する最近の進歩についてもふれ、今後の研究課題について討議する。																			
授業の目的 神経系機能の理解に基づいた系統的な臨床診断・検査の技能を修得することを通じて、現状の神経系疾患における新たな診断法・治療法を開発する。(AB)																			
到達目標 1) 3段階診断法を習得する。(DPの専門知識・理解に対応) 2) 筋電図、末梢神経伝導検査、脳波、誘発電位の手技、解釈について理解する。(DPの専門知識・理解に対応) 3) 代表的な疾患の画像診断について理解する。(DPの専門知識・理解に対応) 4) 代表的な疾患の病理所見(生検を含む)について理解する。(DPの専門知識・理解に対応) 5) 遺伝子診断の適応と実際について理解する。(DPの専門知識・理解に対応) 6) 各原因疾患の病態に基づく合理的な神経疾患診断技術を開発できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応する) 7) 国際誌などから、神経疾患についての最新の診断・治療情報を習得することができる。(DPの「グローバルマインド」に対応する)																			
成績評価の方法 レポートによる評価を行う。																			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。																			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 <table style="width:100%; border:none;"> <tr> <td style="width:50%;">第1回 臨床に必要な神経解剖、生理</td> <td style="width:50%;">第8回 末梢神経障害 症候論</td> </tr> <tr> <td>第2回 臨床に必要な症候学</td> <td>第9回 末梢神経障害 治療学</td> </tr> <tr> <td>第3回 脳血管障害</td> <td>第10回 筋疾患 症候論</td> </tr> <tr> <td>第4回 神経系の感染症</td> <td>第11回 筋疾患 治療学</td> </tr> <tr> <td>第5回 変性疾患 症候論</td> <td>第12回 頭痛、てんかん</td> </tr> <tr> <td>第6回 変性疾患 治療学</td> <td>第13回 電気生理検査の実際</td> </tr> <tr> <td>第7回 脱髄疾患</td> <td>第14回 神経病理の実際</td> </tr> <tr> <td></td> <td>第15回 遺伝子診断の実際</td> </tr> </table> 授業及び学習の方法:各領域における基本的知識の確認を行うとともに、最新の基礎的、臨床的知見を文献的に探索し系統的に要約を行う。(対面授業、状況により遠隔授業) 【自学自習のためのアドバイス】 神経病学に関する最新の学術論文を検索し、読む 神経病学を実際の臨床現場で実践する 授業の各回ごとの自学自習時間は、事前の学習が2時間、事後の学習が2時間を目安とする。				第1回 臨床に必要な神経解剖、生理	第8回 末梢神経障害 症候論	第2回 臨床に必要な症候学	第9回 末梢神経障害 治療学	第3回 脳血管障害	第10回 筋疾患 症候論	第4回 神経系の感染症	第11回 筋疾患 治療学	第5回 変性疾患 症候論	第12回 頭痛、てんかん	第6回 変性疾患 治療学	第13回 電気生理検査の実際	第7回 脱髄疾患	第14回 神経病理の実際		第15回 遺伝子診断の実際
第1回 臨床に必要な神経解剖、生理	第8回 末梢神経障害 症候論																		
第2回 臨床に必要な症候学	第9回 末梢神経障害 治療学																		
第3回 脳血管障害	第10回 筋疾患 症候論																		
第4回 神経系の感染症	第11回 筋疾患 治療学																		
第5回 変性疾患 症候論	第12回 頭痛、てんかん																		
第6回 変性疾患 治療学	第13回 電気生理検査の実際																		
第7回 脱髄疾患	第14回 神経病理の実際																		
	第15回 遺伝子診断の実際																		
教科書・参考書等 教科書 神経内科ハンドブック 第3版 医学書院 ベッドサイドの神経の診かた 南山堂 参考書神経疾患の最新医療 先端医療技術研究所 Clinical Neuroscience 中外医学社																			

2026 医学系研究科

神経研究の進歩 医学書院

オフィスアワー

随時：アポイントメントにより質問の時間を設ける。

場所：精神神経医学講座

水曜日（12:00～13:00）

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性がある。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABDM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688015-1) 脳神経外科学 Neurological surgery	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABD・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 川西 正彦, 三宅 啓介	関連授業科目 神経解剖学特論、臨床神経学特論、神経化学特論		
	履修推奨科目 実験てんかん学特論、神経変性疾患特論、脊髄損傷疾患特論、神経細胞内シグナリング特論		
学習時間 講義90分 × 30回 + 自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 ①悪性脳腫瘍に対する抗がん剤の効果と薬剤耐性遺伝子の発現の関係や機序を概説すると共に、実際の研究方法や手技について実習する。 ②神経幹細胞を用いた神経再生の原理を講義するとともに、実験動物を用いての応用や実際の研究手技を実習する。 ③悪性脳腫瘍の診断における陽電子断層撮影法(PET)の役割について説明し、実際の検査にたずさわる。 ④種々の脳疾患(脳梗塞、脳内出血、頭部外傷など)による発生する二次的脳損傷のメカニズムを分子生物学的レベルで概説し、それらに対する脳保護法を講義するとともに、実験動物を用いての検証手技を実習する。また現在臨床現場で用いられている脳低温療法を含めた脳保護法を説明する。 ⑤脳循環代謝に関する基礎的知見を講義するとともに、臨床現場で用いられる種々のモニタリング(頭蓋内圧測定、頸静脈酸素飽和度測定、脳内微小透析法、PETなど)の原理、手技を説明する。 ⑥脳神経外科領域の最新の医療技術(ナビゲーションシステム、内視鏡手術)についての臨床応用手技について説明する。 ⑦てんかんの生理学的発生機序から診断、治療、社会的問題について説明する。			
授業の目的 ①薬剤耐性遺伝子を免疫染色や RT・PCR法により検索する手技を理解できる。 ②神経幹細胞における神経再生の原理を理解し、実験動物を用いて研究する技術を身につける。 ③悪性脳腫瘍の診断におけるPET検査の役割を理解し、実際に検査を行うことができる。 ④二次的脳損傷のメカニズムを分子生物学的レベルで理解できる。また種々の脳保護法の効果を実験動物で確認できる技術を身につける。 ⑤種々のモニタリング法の原理を理解できる。 ⑥最新の医療技術を実際に臨床応用することができる。 ⑦てんかんの診断、治療を理解できる。			
到達目標 ①薬剤耐性遺伝子を免疫染色や RT・PCR法により検索する手技を理解できる。また結果を臨床現場における悪性脳腫瘍の患者にあてはめ、適切な抗癌剤の選択ができる。これらにより、専門知識を理解するだけでなく、研究能力および応用力を獲得することができる(DPの「専門知識・理解」「研究能力・応用力」に対応)。 ②神経幹細胞における神経再生の原理を理解し、実験動物を用いて研究する技術を身につけることで、研究能力を獲得できる(DPの「専門知識・理解」「研究能力・応用力」に対応)。 ③悪性脳腫瘍の診断におけるPET検査の役割を理化学し、実際に検査を行うことにより専門知識を理解することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 ④二次的脳損傷のメカニズムを分子生物学的レベルで理解できる。また種々の脳保護法の効果を実験動物で確認できる技術を身につける。重症脳損傷患者において適切な脳保護手段を選択し、その効果を臨床的に確認することにより、専門知識を理解し、研究能力および応用力の獲得することができる(DPの「専門知識・理解」「研究能力・応用力」に対応)。 ⑤種々のモニタリング法の原理を理解し、出てきたデータの持つ意味を理解し適切に治療にフィードバックすることができ、専門知識を理解することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 ⑥最新の医療技術を実際に臨床応用することができ、臨床研究に結びつけ、研究の応用力を獲得することができる(DPの「研究能力・応用力」に対応)。 ⑦てんかんの診断を行い、それぞれの診断に対する治療など臨床応用ができ、専門知識を理解することができる(DPの「専門知識・理解」に対応)。 ⑧研究した内容を論文発表および国際学会への発表を通して、自分の研究が世界的にどの程度評価されているか、あるいは臨床に応用することにより世界的な観点から疾患にどのように役立つのか評価できる(DPの「グローバルマインド」に対応)。			
成績評価の方法 授業において小テストや簡単な実技試験を行い、理解度や実習の習熟度を確認する。授業の内容のまとめと感想をレポートとして提出し、成績の評価とする。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。			

可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。

不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。

ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。

合格又は了 到達目標を達成している。

不合格 到達目標を達成していない。

授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス

まず講義にて基本的原理を十分に理解し、その後簡単な動物実験を行ったり、臨床現場に出向いて実際の手技を実習し、得られた結果をどの様に理解するかを議論し理解を深める。特に興味のある分野に関してはマンツーマンで指導し、将来の研究テーマを決定する。

基本的に授業形態は、対面授業である。しかし、コロナ禍など状況に応じて遠隔授業の形態が必要となれば、臨機応変に授業形態を対面から遠隔にも変更して行う。

下記講義を順次行い (30回)、必要に応じて自主学習を行う。

- (1) 悪性脳腫瘍に対する薬剤耐性遺伝子
 - (1-1) 脳腫瘍のWHO分類 (特に遺伝子変異について)
 - (1-2) 各脳腫瘍 (特に悪性脳腫瘍) に対する治療 (外科的治療・放射線治療・化学療法)
 - (1-3) 各種化学療法に対する薬剤耐性メカニズム (遺伝子変異を含め)
 - (1-4) 脳腫瘍細胞の培養テクニックおよび抗がん剤に対する腫瘍細胞効果
 - (1-5) 脳腫瘍細胞における遺伝子発現の解析 (PCR解析、West blottingによる蛋白発現解析)
 - (1-6) フローサイトメトリーによる脳腫瘍細胞の抗がん剤治療における細胞周期の変化
 - (1-7) 脳腫瘍細胞のマウス等へのin vivo研究 (抗がん剤の反応など)
- (2) 神経幹細胞を用いての神経再生
 - (2-1) 神経幹細胞の培養テクニックについて
 - (2-2) 神経幹細胞の遺伝子変化に伴った形態の変化
 - (2-3) 脳損傷マウスモデルへの神経幹細胞移植における神経幹細胞の生着および神経学的変化
- (3) 悪性脳腫瘍に対するPET検査
 - (3-1) FDG-PETについて・各種悪性脳腫瘍との関連
 - (3-2) メチオニン-PETについて・各種悪性脳腫瘍との関連
 - (3-3) FLT-PETについて・各種悪性脳腫瘍との関連
 - (3-4) FMISO-PETについて・各種悪性脳腫瘍との関連
 - (3-5) THK5351-PETについて・各種悪性脳腫瘍との関連
 - (3-6) 各種PET検査と腫瘍摘出率および予後との関係
 - (3-7) 各種PET検査と放射線化学療法の効果判定および予後との関係
- (4) 二次的脳損傷のメカニズムと脳保護法
 - (4-1) 二次的脳損傷マウスモデルの作成法
 - (4-2) 二次的脳損傷マウスにおける脳損傷メカニズム
 - (4-3) 二次的脳損傷に対する脳保護メカニズムおよび脳保護療法の開発
- (5) 脳循環代謝と脳モニタリング法
 - (5-1) 脳虚血マウスモデルの作成
 - (5-2) 脳虚血マウスモデルによる虚血メカニズムの解明
 - (5-3) 脳虚血マウスモデルにおける脳モニタリング法
 - (5-4) 脳虚血マウスモデルにおける新たな治療法の開発
- (6) 脳神経外科領域の最新の技術
 - (6-1) MRIおよびPET検査をナビゲーションシステムに導入した脳外科手術法
 - (6-2) 5-アミノレブリン酸を用いた脳腫瘍の蛍光診断および腫瘍摘出
 - (6-3) 術中MRI検査におけるbrain shiftの改善
 - (6-4) 術中MRI検査における腫瘍残存の改善
- (7) てんかん学ハンドブック
 - (7-1) てんかんの分類および抗てんかん薬の使用法
 - (7-2) てんかんのメカニズム・新たな脳波診断

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間) については、担当教員が作成した資料をもとに行っていただきます。

教科書・参考書等

特に指定せず、必要に応じてその都度推薦の予定

オフィスアワー

火曜日、木曜日は手術日ですので避けてください

月曜日、水曜日、金曜日の午後夕方方希望 (脳神経外科秘書に確認してください)

場所は脳神経外科医局 (再開発時は西病棟6階 (609))

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

教員の実務経験との関連

担当教員 (教授、准教授) が授業を担当する予定である。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687409-1) 運動器病学 Evaluation of bone property	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 石川 正和, 岩田 憲	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 骨の強度に影響を与える種々の疾患を紹介し、それぞれの疾患がどのようなメカニズムで骨強度の低下をきたすのかについて授業を行う。骨強度を生体力学的に計測する方法や骨の組織学的変化を紹介し、どのような病態が生物学的に生じているかについて授業を行う。			
授業の目的 超高齢社会に突入した日本において高齢者の骨折は健康寿命に多大な影響をおよぼす。整形外科領域では骨組織の特性を理解し、骨粗鬆症による脆弱性骨折、外傷による多発骨折、骨欠損、腫瘍などによる病的骨折に対して適切な治療と新規治療法の開発が重要と考えており、以下の目的を掲げ知識を深める。 1) 骨強度に影響を及ぼす疾患について理解する。 2) 代謝性骨疾患の概要とその病態を生化学的に理解する。 3) 病的骨折をきたす疾患の概要と分類と予後について理解する。 4) 骨折の修復機転と修復を促進する因子また遅延させる因子を解明す			
到達目標 1. 骨の脆弱性を引き起こす疾患を列挙できる (A:専門知識・理解)。 2. 骨強度に影響を及ぼす代謝性疾患の機序を説明できる (A:専門知識・理解)。 3. 病的骨折を生じる疾患を列挙できる (A:専門知識・理解)。 4. 骨折の修復機転を説明でき、促進因子と遅延因子をのべることができる (A:専門知識・理解)。 5. 人工骨を臨床応用した時の病理学的変化を述べるができる (B:研究能力・応用力)。 1から5を通して専門知識・理解を深めるとともに、研究能力・応用力を身につける			
成績評価の方法 上記テーマに関して課されたレポートと個別の口頭試問によって行う。 (レポート40%、口頭試問40%、授業への取組姿勢20%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回 骨の腫瘍性疾患 (1) 2回 骨の腫瘍性疾患 (2) 3回 病的骨折 (1) 4回 病的骨折 (2) 5回 病的骨折 (3) 6回 骨代謝性疾患 (1) 7回 骨代謝性疾患 (2) 8回 骨代謝性疾患 (3) 9回 炎症性骨疾患 (1) 10回 炎症性骨疾患 (2) 11回 骨折の修復に関与する因子 (1) 12回 骨折の修復に関与する因子 (2) 13回 人工骨による骨の修復過程 (1) 14回 人工骨による骨の修復過程 (2) 15回 人工骨による骨の修復過程 (3) 授業及び学習の方法 代謝性骨疾患、腫瘍性疾患、炎症性疾患における骨強度と、骨折発生および修復のメカニズムについて基礎的臨床			

2026 医学系研究科

的文献検索し比較検討する。授業は対面または遠隔授業により行う。

【自学自習及び事後学修のためのアドバイス】(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)

自学自習として参考図書をあらかじめ熟読し、基礎的臨床的研究に関しても推薦された論文を熟読し、各回につき2時間程度の準備学習をすすめる。事後学習として、授業で十分な理解が得られなかった内容に関して、参考図書や論文を再読することにより理解を深める。

教科書・参考書等

分子細胞生物学基礎実験法 南江堂 改訂第2版

オフィスアワー

毎週月曜日の9時から12時まではオフィスアワーとして研究室を訪問できる。随時アポイントメントにより質問を受け付ける。場所は整形外科研究室とする。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

なし

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687410-1) 精神病学 Psychiatry	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 4	
担当教員名 石川 一朗・中村 祐	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×23回+実習(30時間)+自学自習(準備学習40時間+事後学習80時間)			
授業の概要 精神疾患に含まれるものは多岐にわたる。ICD分類に基づいたカテゴリーとしては、認知症や器質性・症候性精神障害(F0)、アルコールをはじめとする薬物関連障害(F1)、統合失調症(F2)、躁うつ病(F3)、神経症性障害(F4)、摂食障害(F5)、パーソナリティ障害(F6)、知的障害(F7)、発達障害(F8)、多動性障害など(F9)、てんかん(G40-41)、睡眠障害(G47)などが挙げられる。これらの疾患は、心理学的要因、社会的要因、そして生物学的要因から病態を理解することが大切である。 本講座では、そのうち生物学的な病態の解明や治療法の開発をおこなう生物学的精神医学について理解することを目標としている。			
授業の目的 精神疾患のうち、生物学的成因、向精神薬の薬理学的作用機序を理解することから、精神疾患の新たな診断法・治療法を開発する。(AB)			
到達目標 各種精神疾患の生物学的成因を理解する。(DPの専門知識・理解に対応) 各種治療薬の神経精神薬理学的な作用機序を理解する。(DPの専門知識・理解に対応) 各種精神疾患の病態に基づく合理的な診断技術を開発できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応する) 各種精神疾患における患者の受ける社会的問題を理解し、社会福祉サービスの利用の実践や精神保健福祉法における法的解釈などを理解し、実践できる。(DPの「倫理観・社会的責任」に対応する)			
成績評価の方法 講義の理解を深めるため、レポートを課する。その内容で評価する。(レポート100%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 講義 第1回 生物学的精神医学概論 精神疾患の神経科学的成因 第2回 躁うつ病 症候論 第3回 躁うつ病 薬物療法と精神療法 第4回 統合失調症 症候論 第5回 統合失調症 薬物療法と精神療法 第6回 認知症 症候論 第7回 認知症 薬物療法と精神療法 第8回 神経症 第9回 睡眠障害(過眠症を中心として) 精神科治療薬の神経精神薬理学的作用 第10回 抗うつ薬 第11回 抗精神病薬 第12回 認知症治療薬 第13回 漢方薬 第14回 抗不安薬および睡眠薬 演習 第1回 睡眠構造の電気生理学的解析 終夜睡眠ポリグラフ検査の設定 第2回 睡眠構造の電気生理学的解析 終夜睡眠ポリグラフ検査の解析			

2026 医学系研究科

- 第3回 睡眠構造の電気生理学的解析 睡眠潜時測定の設定
第4回 睡眠構造の電気生理学的解析 睡眠潜時測定の解析
第5回 認知機能障害の神経化学的・神経生理学的解析
第6回 認知機能障害の神経放射線学的解析 形態画像検査 (CT・MRI など)
第7回 認知機能障害の神経放射線学的解析 機能画像検査 (SPECT・MIBG心筋シンチ・アミロイドPET など)
第8回 認知機能障害の神経心理学的解析 簡易評価スケール・ADAS・WMS-R など
第9回 認知機能障害の神経心理学的解析 COGNISTAT・ABC認知症評価スケール・前頭葉機能検査 など

実習

以下のいずれかの実習科目を選択する (複数選択可能: 実習時間は計30時間)

- 睡眠ポリグラフ検査 (PSG) や睡眠潜時測定 (MSLT) の手技を習得する。
- 認知症患者で認知機能、精神症状の評価、それらの治療後の経過を評価する。

授業及び学習の方法: 対面授業 (状況により遠隔授業)。講義形式、検査施行や解析を主体とした演習、治療効果を判定する実習などからなる。

【自学自習のためのアドバイス】

精神病学に関する最新の学術論文を検索し、読む

精神病学を実際の臨床現場で実践する

授業の各回ごとの自学自習時間は、事前の学習が2時間、事後の学習が2時間を目安とする。

教科書・参考書等

教科書Stahl's Essential Psychopharmacology (3rd Edition)

Edited by Stephen M Stahl, Cambridge University Press, 2008. (ISBN: 9780521673761)

参考書Sleepiness (Causes, Consequences and Treatment)

Edited by Michael J Thorpy and Michel Billiard, Cambridge University Press

オフィスアワー

随時アポイントによる

場所: 精神神経医学講座

水曜日 (12:00~13:00)

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687411-1) 腎・泌尿器病学 Urological disease (benign disease and urologic cancer)	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 祖父江 理・田岡 利宜也・西山 成・南野 哲男	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分+自学学習(事前学習2時間程度 事後学習2時間程度)×30回			
授業の概要 人口の高齢化にともない泌尿器科疾患患者は増加している。前立腺肥大症や頻尿、尿失禁などの良性疾患数は平均寿命の延長とともに増加が著しい。さらに高齢者がんといわれている泌尿器科がんの増加は特に顕著である。診断技術の向上と治療法の進歩によって、癌と診断された後の病期期間は以前と比較して明らかに長くなってきている。そのためQOLや医療経済学的側面にも配慮して診療に当たる必要がある。 この科目では、頻尿、尿失禁、前立腺肥大症などの下部尿路症状を呈する、いわゆるQOL疾患と呼ばれる良性疾患と、腎臓がん、膀胱がん、前立腺がんなど代表的な泌尿器科がんについてその病態、診断、治療法に関して各診療ガイドラインに基づき網羅的に解説する。			
授業の目的 泌尿器の解剖を理解し、良性および悪性泌尿器科疾患についての診断および治療方法の理解を深める。			
到達目標 1) 下部尿路症状の成因、診断および治療、前立腺肥大症と過活動膀胱を理解できる。(AB) 2) 上部尿路上皮がん(腎盂・尿管がん)、腎細胞癌の診断と治療について理解し、説明できる。(AB) 3) 膀胱がんの診断と治療について理解し、説明できる。(AB) 4) 前立腺がんの診断と治療について理解し、説明できる。(AB)			
成績評価の方法 小テストで判断する(100%)。 目標到達が不十分だと判断した場合には、2,000字以内のレポートを提出して理解の程度を判定する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画(遠隔の可能性あり) 1) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義① 2) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義② 3) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義③ 4) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義④ 5) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義⑤ 6) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義⑥ 7) 前立腺肥大症と過活動膀胱: 問診から診断、治療までのアルゴリズムについての講義⑦ 8) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義① 9) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義② 10) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義③ 11) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義④ 12) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義⑤ 13) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義⑥ 14) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義⑦ 15) 上部尿路上皮癌および腎細胞癌の診断と治療の現状と問題点についての講義⑧ 16) 膀胱がんの診断と治療: わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する① 17) 膀胱がんの診断と治療: わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する② 18) 膀胱がんの診断と治療: わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する③ 19) 膀胱がんの診断と治療: わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する④ 20) 膀胱がんの診断と治療: わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑤			

2026 医学系研究科

- 21) 膀胱がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑥
- 22) 膀胱がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑦
- 23) 膀胱がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑧
- 24) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する①
- 25) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する②
- 26) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する③
- 27) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する④
- 28) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑤
- 29) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑥
- 30) 前立腺がんの診断と治療：わが国および欧米のガイドラインに基づく標準治療を理解する⑦

授業及び学習の方法:講義形式

【自学自習のためのアドバイス】

講義に挑む前に予習（各回2時間程度の事前学習）をしてきちんと講義についてくること、そしてその内容を実習でしっかりと確認することが重要です。指示された標準実習時間以降に実習室で自主的に事後学習（各回2時間程度）行うと効率よく学べます。

尚、自学学習（事前学習2時間程度 事後学習2時間程度）×30回を目途とする。

教科書・参考書等

参考書前立腺癌診療ガイドライン、膀胱癌診療ガイドライン、腎盂尿管癌診療ガイドライン

オフィスアワー

火曜日 12時15分～12時45分、および金曜日 12時30分～13時（泌尿器科医局）

上記以外の時間は泌尿器医局にて事前にアポイントを行うこと

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688016-1) 血液病学 (血液・造血器・リンパ) Hematology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 門脇 則光	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 正常造血システムおよび腫瘍性・非腫瘍性血液疾患の発症機序および治療法について学ぶ。具体的には、骨髄の解剖と造血幹細胞の性質について概説した後、再生不良性貧血、骨髄増殖性腫瘍、急性白血病、悪性リンパ腫などの血液疾患と造血幹細胞移植療法を中心にスライド、ビデオ、写真などを用いて詳細に解説する。			
授業の目的 正常造血システムの解剖学と生理学を理解し、それをさまざまな血液疾患の病態の理解や治療法の開発に結びつける過程を、講義と実験を通じて習得する。			
到達目標 1. 骨髄の解剖を説明できる。 2. 造血幹細胞の性質、分離・同定法、未分化維持機構、各種血液細胞への分化に働く遺伝子・液性因子を説明できる (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)。 3. 再生不良性貧血の発症機序と治療法を説明できる (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)。 4. 骨髄増殖性腫瘍、急性白血病、悪性リンパ腫などの造血器腫瘍の発症機序について分子レベルで説明できる (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)。 5. 造血器悪性腫瘍に対する治療法 (薬物療法、造血幹細胞移植) について説明できる (DP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 提出レポートの内容により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 骨髄の解剖 (1) 第2回 骨髄の解剖 (2) 第3回 骨髄の解剖 (3) 第4回 骨髄の解剖 (4) 第5回 造血幹細胞の性質、分離・同定法 (1) 第6回 造血幹細胞の性質、分離・同定法 (2) 第7回 造血幹細胞の性質、分離・同定法 (3) 第8回 造血幹細胞の性質、分離・同定法 (4) 第9回 造血幹細胞が未分化状態で維持される機構、各種血液細胞への分化に関わる遺伝子や液性因子 (1) 第10回 造血幹細胞が未分化状態で維持される機構、各種血液細胞への分化に関わる遺伝子や液性因子 (2) 第11回 造血幹細胞が未分化状態で維持される機構、各種血液細胞への分化に関わる遺伝子や液性因子 (3) 第12回 造血幹細胞が未分化状態で維持される機構、各種血液細胞への分化に関わる遺伝子や液性因子 (4) 第13回 再生不良性貧血の発症機序と治療法 (1) 第14回 再生不良性貧血の発症機序と治療法 (2) 第15回 再生不良性貧血の発症機序と治療法 (3) 第16回 再生不良性貧血の発症機序と治療法 (4) 第17回 骨髄増殖性腫瘍の発症機序と治療法 (1) 第18回 骨髄増殖性腫瘍の発症機序と治療法 (2) 第19回 骨髄増殖性腫瘍の発症機序と治療法 (3) 第20回 骨髄増殖性腫瘍の発症機序と治療法 (4) 第21回 急性白血病の発症機序と治療法 (1)			

2026 医学系研究科

- 第22回 急性白血病の発症機序と治療法 (2)
- 第23回 急性白血病の発症機序と治療法 (3)
- 第24回 急性白血病の発症機序と治療法 (4)
- 第25回 悪性リンパ腫の発症機序と治療法 (1)
- 第26回 悪性リンパ腫の発症機序と治療法 (2)
- 第27回 悪性リンパ腫の発症機序と治療法 (3)
- 第28回 悪性リンパ腫の発症機序と治療法 (4)
- 第29回 まとめ (1)
- 第30回 まとめ (2)

【授業及び学習の方法】

対面授業にて、スライド、ビデオ、写真などを用いて解りやすく講義する。最新の基礎および臨床研究に関する医学論文を抄読して知識を深める。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)

上記の各テーマに関連する論文を事前に読んで概略を頭に入れて授業に臨む。

事後には授業で学んだことを振り返って整理するとともに、自ら関連論文を読んで理解を深める。

教科書・参考書等

教科書 Wintrobe's Clinical Hematology, 15th edition, 2023, WOLTERS KLUWER

参考書 必要な学習資料を配付します。

オフィスアワー

平日の9時から17時

場所：基礎臨床研究棟4階 血液・免疫・呼吸器内科医局

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

これからの医療を自分が開発するという気概を持って研究に臨んでください。

面談・見学希望時は、随時アポイントメントを取ってください。血液・免疫・呼吸器内科医局 (基礎臨床研究棟4階) ichinai-m@kagawa-u.ac.jp

教員の実務経験との関連

附属病院での実務経験をもとに血液病学の講義・演習を行います。

ナンバリングコード -ADXM--Lx 授業科目名 (講義コード:L687414-1) 免疫・アレルギー疾患学 Rheumatology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 ・	DP・提供部局 ADX・M	対象学生・特定プログラムとの対応
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 土橋 浩章	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 自然免疫および獲得免疫のシステムとその破綻に伴い引き起こされる膠原病についてその発生機序・疾患の特徴ならびに治療法を学習する。具体的には免疫ネットワークについて概説した後、自己炎症症候群、関節リウマチ、全身性エリテマトーデスなどの診断および治療法について抗サイトカイン療法を中心にスライド、ビデオなどを用いて詳細に解説する。			
授業の目的 学生が免疫学の進歩からどのように膠原病疾患への治療応用を果たしているかを理解し説明し研究に応用できるかを考える能力を培う。			
到達目標 1. 免疫システムとサイトカインネットワークについて説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 各種膠原病の特徴について説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 免疫抑制療法について説明し、最新の治療を提示できる。(DPの「グローバルマインド」に対応) 4. 抗サイトカイン療法について説明し、最新の治療を提示できる。(DPの「グローバルマインド」に対応)			
成績評価の方法 レポート75% (主に到達目標1及び2に対応)、講義中の質問に対する応答25% (主に到達目標3および4に対応)。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 免疫システム概説 (1) 第2回 免疫システム概説 (2) 第3回 サイトカインと疾患概説 (1) 第4回 サイトカインと疾患概説 (2) 第5回 自然免疫システムの破綻と疾患の診断 第6回 自然免疫システムの破綻と疾患の治療 第7回 獲得免疫システムの破綻と膠原病リウマチ性疾患の診断 第8回 獲得免疫システムの破綻と膠原病リウマチ性疾患の治療 第9回 抗サイトカイン療法と膠原病リウマチ性疾患 (1) 第10回 抗サイトカイン療法と膠原病リウマチ性疾患 (2) 第11回 自己抗原と自己抗体 (1) 第12回 自己抗原と自己抗体 (2) 第13回 関節リウマチ 第14回 全身性自己免疫疾患 第15回 血管炎 授業及び学習の方法 スライド、ビデオなどを用いて解りやすく講義する。最新の基礎および臨床研究に関する医学論文を抄読し知識を深める。 第1回～第15回 各授業の内容について参考書を読み、疑問点を抽出する。(2時間×15回) 各授業で学んだ内容について、その要点をレポートにまとめる。(2時間×15回) 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) 上記の各テーマに関連する論文を事前に読んで概略を頭に入れて授業に臨む。 事後には授業で学んだことを振り返って整理するとともに、自ら関連論文を読んで理解を深める。			

2026 医学系研究科

教科書・参考書等

Firestein & Kelley's Textbook of Rheumatology, 11th ed.

オフィスアワー

火曜日10時-11時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

座学の講義を楽しめるようにしたいと思います。気楽に参加下さい。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687419-1) 母子周産期医学 Fetal behavioral science, Fetal echocardiography, Fetal echo	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 金西 賢治, 花岡 有為子	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 十分な臨床経験を持つ医師が正常妊娠・分娩・産褥経過及び異常について、また正常・異常胎児の生理病理について講義する。			
授業の目的 正常・異常妊娠、正常・異常分娩、正常・異常産褥、正常・異常胎児について知識を持ち、その正常・異常を理解し、最新の超音波検査を行うことができる。(AB)			
到達目標 学生が正常・異常妊娠、正常・異常分娩、正常・異常産褥、正常・異常胎児について知識を持ち説明することが出来る。(AB) その正常・異常を理解し、最新の超音波検査の意義について説明できる。(AB)			
成績評価の方法 口頭試問 50点 実技検査 50点			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 妊娠の生理 第2回 正常分娩について 第3回 合併症妊娠・妊娠高血圧 第4回 異常分娩について 第5回 まとめ 第6回 正常妊娠の実技 第7回 正常妊娠の3D/4D 第8回 正常妊娠の3D/4Dの実技 第9回 異常妊娠の2D超音波について 第10回 異常妊娠の2D超音波の実技 第11回 正常胎児の超音波について 第12回 異常胎児の超音波実技 第13回 正常胎児の3D/4D超音波について 第14回 正常胎児の3D/4D超音波の実技 第15回 超音波実技のまとめ 授業及び学習の方法:講義・超音波実技を行う。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) 講義前に産科学テキストの関連箇所を予習し、授業を受けること。 また、講義中に理解が不十分と思われる箇所についてはテキストで確認すること。			
教科書・参考書等 教科書 Kurjak A, Chervenao F. Donald School Textbook of Ultrasound in Obstetrics and Gynecology, 4th Edition, Jaypee Brothers, New Delhi, 2017 \$82.87 参考書 Cunningham FG, et al. Williams Obstetrics 24th Edition, McGraw-Hill Medical, New York, 2014 \$191.51			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

月曜日・火曜日の10時から16時の間に医局事務員を通じて担当教員に連絡してください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

準備として教科書などを参考に自習を1時間程度行い、事後は1時間程度復習を行ってください。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-BCXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687420-1) 皮膚病学 Dermatology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 BCX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 2	
担当教員名 大日 輝記	関連授業科目 解剖学、生理学、病理学		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 15回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 皮膚科関連領域では、皮膚が内外環境の様々な刺激や感染を常に受け、また身体内部の機能異常が反映する臓器であることから、主要な皮膚疾患の病因と病態、検査と診断、治療ならびに内臓病変との関連を理解させる。			
授業の目的 皮膚の構造と機能を理解し、主な疾患の病態生理、原因、症候、診断および治療について学ぶ。 皮膚科学領域の研究能力・応用力を身につける。 研究倫理・研究者の社会的責任について学ぶ。			
到達目標 皮膚の構造と機能を理解し、主な疾患の病態生理、原因、症候、診断および治療について説明できる (B: 研究能力・応用力)。 皮膚科学の知識を、研究のデザインおよび実施に応用できる (B)。 研究者に求められる倫理観・社会的責任について説明できる (C: 倫理観・社会的責任)。			
成績評価の方法 授業への取り組みの姿勢50%、期末のプレゼンテーション50% (レポートをもって代えることがある)。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 1. 皮膚科学の魅力 皮膚科学領域の位置づけ、皮膚科診療の使命を説明できる。 2. 皮膚の基本 皮膚科診療に必要な解剖、生理、診断過程、治療手段について概説できる。 3. 皮膚の炎症 湿疹・皮膚炎群に該当する疾患群の概念と概要を説明できる。 4. 炎症性角化症 炎症性角化症に該当する疾患群の概念と概要を説明できる。 5. 血管炎と膠原病 に該当する疾患群の概念と概要を説明できる。 6. 皮膚障害・薬疹 物理化学的損傷および薬疹の概念と概要を説明できる。 7. 皮膚感染症 皮膚感染症の概念と概要を説明できる。 8. 水疱症・膿疱症 水疱症・膿疱症の概念と概要を説明できる。 9. じんま疹・角化症・代謝異常 じんま疹・角化症・皮膚所見を呈する代謝異常の概念と概要を説明できる。 10. 皮膚腫瘍 皮膚良性腫瘍・悪性腫瘍の概念と概要を説明できる。 11. しみ・あざ・ほくろ 母斑・母斑症の概念と概要を説明できる。 12. 皮膚付属器疾患 皮膚付属器疾患の概念と概要を説明できる。 13. 症候論 記載皮膚科学のアルゴリズムについて説明できる。			

2026 医学系研究科

14. 全身と皮膚

各種の全身疾患と皮膚所見の関連について説明できる。

15. 皮膚科学と研究

皮膚科学領域の最新の取り組みを例を挙げて説明できる。

【自学自習のためのアドバイス】

毎回の授業該当領域について、各々前後2時間程度を目安に、学部での学習内容の予習、および以下の成書での復習が望ましい。

教科書・参考書等

1. JEAN L. BOLOGNIA Dermatology (5th edition)
2. Rook's Textbook of Dermatology (10th edition)
3. Fitzpatrick's Dermatology (9th edition)

オフィスアワー

研究棟4階 皮膚科学 水曜日 12:00-13:00 変更がある週は、事前に案内をします。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

各科の講義において呈示するスライドや配布資料、マルチメディアによる情報提示等により学習する。皮膚疾患の臨床像の呈示が多いので注目してほしい。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687421-1) 眼病学 Ophthalmic diseases	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 鈴間 潔, 山下 彩奈, 中野 裕貴	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 担当教員が眼球の解剖・機能、そこから発生する先天的あるいは後天的疾患について講義をする。 具体的には膜の解剖、神経細胞の構築、変性網膜や虚血網膜の代謝、網膜血管新生の機序などについての最新の知見やこれらの基礎研究の成果が実際の臨床にどのように生かされているかなどである。 また、担当教員と共に今後の研究課題を議論する。			
授業の目的 1) 網膜の解剖およびその機能を理解する。 2) 虚血網膜の代謝について理解する。 3) 緑内障の疫学、発生機序、進展に関与する分子機構を理解する。 4) 加齢黄斑変性の疫学、発生や進展に関与する分子機構を理解する。			
到達目標 1) 網膜の解剖およびその機能を理解し、専門知識を深めることができる。(AB) 2) 虚血網膜の代謝について理解し、専門知識を深めることができる。(AB) 3) 緑内障の疫学、発生機序、進展に関与する分子機構を理解し、研究能力を高めることができる。(AB) 4) 加齢黄斑変性の疫学、発生や進展に関与する分子機構を理解し、研究能力を高めることができる。(AB)			
成績評価の方法 演習に関しては提出されたレポートを評価する。100% また、実習に関してはグループ討論と提出されたレポートの総合評価。プレゼン 50%、レポート50%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1～3回 網膜の解剖およびその機能 (1回 基礎、2回 病理、3回 分子機構) 4～6回 網膜虚血の代謝 (4回 基礎、5回 病理、6回 分子機構) 7～9回 変性網膜の代謝 (7回 基礎、8回 病理、9回 分子機構) 10～12回 緑内障の疫学、発生機序、進展に関与する分子機構 (10回 基礎、11回 病理、12回 分子機構) 13～15回 加齢黄斑変性の疫学、発生や進展に関与する分子機構 (13回 基礎、14回 病理、15回 分子機構) 授業及び学習の方法 各種障害モデルの網膜標本の分析的観察。 加齢黄斑変性や緑内障に関する最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習(関連文献収集) 30時間 + 事後学習(プレゼンスライドのまとめ) 30時間)			
教科書・参考書等 教科書 標準眼科学 医学書院 参考書 血管新生研究の新展開 医薬ジャーナル社 タンパク実験法 羊土社			
オフィスアワー 水曜 16:30～17:30 : アポイントメントにより質問の時間を設ける。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ			

2026 医学系研究科

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687422-1) 口腔病学 Stomatology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 三宅 実	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 三宅教授が講義：顎・顔面・口腔諸器官の解剖・機能を理解させるとともに、そこから発生する先天的あるいは後天的疾患について知識を深めてもらう。具体的には顎口腔領域に発生する良性腫瘍・悪性腫瘍、特に顎骨に発生する歯原性、非歯原性良性腫瘍、歯に関連した炎症、歯髄炎に続発する歯根のう胞、歯原性嚢胞について講義を行う。また口腔癌の多くを占める扁平上皮癌に関して疫学的事項、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構などに関する最新の知見を学んでもらう。 さらに、助川准教授が顎口腔領域の腫瘍疾患に関する基礎的研究成果が実際の臨床にどのように生かされているか講義を行い、今後の研究課題を議論させる。人工知能の臨床応用について講義・実習を実施する。また顎顔面領域の外傷の概要治療法について講義を行い知識を学ばせる。			
授業の目的 香川大学共通教育スタンダードとして課題解決のための汎用的スキルを獲得するために 1) 顎・顔面・口腔諸器官の解剖およびその機能を理解する。 2) 咀嚼機能の重要性を理解する。 3) 顎口腔領域に発生する良性腫瘍、悪性腫瘍を理解する。 4) 顎骨に発生する歯原性、非歯原性良性腫瘍の病理組織所見を理解する。 5) 口腔癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構を理解する。 さらに、これらの学習により、“広範な人文・社会・自然に関する知識”を習得する。 6) 口腔癌の化学療法、放射線療法、手術療法を理			
到達目標 学生の学修成果の目標(DP)として下記の到達目標を挙げる。 A (専門的知識・理解) 1) 顎・顔面の解剖およびその機能を理解し説明できる。 2) 顎口腔領域に発生する腫瘍の分類が理解できる。 3) 顎骨に発生する歯原性、非歯原性腫瘍の病態と治療法が理解できる。 B (研究能力・応用力) 1) 咀嚼機能など口腔の生理的機能を評価でき、研究に活用できる。 2) 口腔癌の疫学、生物学的特性、治療方法を理解することで、臨床研究に応用できる。 3) 人工知能 (Ai) を利用した口腔外科領域疾患の解析の臨床応用を理解する。 大学院研究者として口腔病学の基礎的・臨床的知識を得て、臨床や医学研究に役立てることができる。			
成績評価の方法 講義に関しては随時小テストを実施し評価、演習に関しては提出されたレポートを評価、実習に関してはグループ討論と提出されたレポートの総合評価とする。出席は原則必須。レポート50%、小テスト50%で評価を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 顎・顔面・口腔領域の解剖 第2回 顎・顔面・口腔の機能 第3回 咀嚼機能 第4回 嚥下機能 第5回 顎・口腔領域に発生する良性腫瘍 第6回 顎・口腔領域に発生する悪性腫瘍 第7回 顎骨に発生する歯原性良性腫瘍の疫学			

2026 医学系研究科

第8回 顎骨に発生する歯原性良性腫瘍の生物学的特性、発生や進展に関する分子機構

第9回 咀嚼機能の生理検査

第10回 顎・口腔領域に発生する良性腫瘍の病理組織学的観察

第11回 顎・口腔領域に発生する悪性腫瘍の病理組織学的観察

第12回 咀嚼機能の生理実習

第13回 歯牙硬組織標本の作製

第14回 硬組織の脱灰法（有機酸およびEDTAによる脱灰）

第15回 非脱灰組織標本の作製と染色

授業及び学習の方法：顎口腔領域に発生する良性腫瘍、悪性腫瘍の最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成する。

授業は対面形式を原則とするが、状況によりWeb形式で実施することもある。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 30時間 + 事後学習 30時間）資料についてはPDFで一部配布を行う。また下記教科書および関連論文・資料をネットで検索し学習する。

教科書・参考書等

教科書最新口腔外科学、第4版、塩田 重利・富田 喜内監修、医歯薬出版、1999.

口腔顎顔面外科学総論、道 健一・野間 弘康他編、医歯薬出版、2000.

口腔外科学 白砂兼光，古郷幹彦編。-- 第3版。-- 医歯薬出版，2010.

口腔外科学 飯塚忠彦，吉武一貞編集。-- 第7版。-- 金芳堂，2010。-- (Minor textbook).

参考書口腔病理学Ⅰ、Ⅱ、石川 梧朗、秋吉 正豊、永末書店、1978-1982.

口腔顎顔面外科学各論、道 健一・野間 弘康他編、医歯

オフィスアワー

月曜日から木曜日で、15:00から18:00であれば基本的に対応が可能です。まず下記メールアドレスで事前確認をお願いします。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

なし

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード: L687423-1) 頭頸部病学 Head and neck cancer	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 星川 広史, 宮下 武憲	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 頭頸部領域(特に口腔、咽頭、喉頭)の解剖・機能を概説し、そこから発生する腫瘍性疾患について知識を深めるよう講義する。特に頭頸部領域の悪性腫瘍の疫学的事項、生物学的特性、発症機序や進展に関与する分子機構などに関する最新の知見を紹介する。 さらに、慢性炎症と癌との関連についての基礎的研究成果が実際の臨床にどのように生かされているかを教授し、今後の研究課題を議論する。			
授業の目的 1) 口腔、咽頭、喉頭の解剖およびその機能を理解する。 2) 発声、嚥下機能とその機能障害を理解する。 3) 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構を理解する。 4) 慢性炎症と癌との関連についてその分子機構を理解する。			
到達目標 1) 口腔、咽頭、喉頭の解剖およびその機能を説明できる。(A) 2) 発声、嚥下機能とその機能障害を説明できる。(A) 3) 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構を説明できる。(A, B) 4) 慢性炎症と癌との関連についてその分子機構を理解し、今後の研究課題を議論できる。(A, B)			
成績評価の方法 講義に関しては提出されたレポートを評価する。(80%) 合わせて口頭試問、グループ討論を行い提出されたレポートとの総合評価とする。(20%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回 口腔、咽頭、喉頭の解剖およびその機能ー口腔の解剖およびその機能 2回 口腔、咽頭、喉頭の解剖およびその機能ー咽頭の解剖およびその機能 3回 口腔、咽頭、喉頭の解剖およびその機能ー喉頭の解剖およびその機能 4回 発声、嚥下機能とその機能障害ー発声とその機能障害 5回 発声、嚥下機能とその機能障害ー嚥下機能とその機能障害 6回 発声、嚥下機能とその機能障害ー発声、嚥下機能をきたす病態と対応 7回 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構ー頭頸部癌の疫学 8回 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構ー頭頸部癌の生物学的特性 9回 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構ー頭頸部癌の発生に関与する分子機構 10回 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構ー頭頸部癌の進展に関与する分子機構 11回 頭頸部癌の疫学、生物学的特性、発生や進展に関与する分子機構ー頭頸部癌の特殊性と基礎研究への展開 12回 慢性炎症と癌との関連についてその分子機構ー慢性炎症の原因 13回 慢性炎症と癌との関連についてその分子機構ー慢性炎症の病態 14回 慢性炎症と癌との関連についてその分子機構ー慢性炎症と癌との関連 15回 慢性炎症と癌との関連についてその分子機構ー慢性炎症と癌の分子機構 授業及び学習の方法: 頭頸部腫瘍疾患の病理標本の分析的観察。 頭頸部腫瘍疾患に関する最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成する。 この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。			

2026 医学系研究科

【自学自習のためのアドバイス】

頭頸部腫瘍分野は、ここ数年で最も大きく進歩した分野である。腫瘍免疫や分子標的薬に関して学習するうえで、できるだけ新しい文献を参照することを推奨する。また、頭頸部病学で学習する内容は、口腔、咽頭、喉頭の解剖およびその機能である発声と嚥下を包括しており、それぞれの部位に生じた腫瘍そのもの、もしくは、手術で切除することによる機能障害についても学習する予定である。そのため、高齢化社会で特に対応が必要とされている嚥下障害とその評価方法、対応方法についても学習する予定であるため、これらのことを念頭におき、あらかじめ予習しておくことでより深く理解できる。(60時間)

教科書・参考書等

教科書新 図説耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座 4, 5 メディカルビュー社
耳鼻咽喉科・頭頸部外科病理カラーアトラス 金原出版
頭頸部腫瘍学入門 宮原 裕 東京医学社
参考書CLIENT 21-21世紀耳鼻咽喉科領域の臨床 中山書店
頭頸部腫瘍癌治療における化学療法役割 東京医学社

オフィスアワー

月、金 12～17時 場所 耳鼻科医局：アポイントメントにより質問の時間を設ける。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

1. 授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。
2. 授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687424-1) 耳鼻咽喉疾患学 Otorhinolaryngology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 星川 広史, 宮下 武憲	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 聴覚と平衡の生理学ならびに聴覚・平衡機能障害を起こす内耳疾患の病態生理、診断学、治療法に関する知識を深めるように講義する。聴覚・平衡機能検査を修得し、機能障害所見を理解できるよう説明、教授する。			
授業の目的 1) 聴覚・平衡機能を理解する。 2) 聴覚・平衡障害を起こす疾患の種類を学習する。 3) 聴覚・平衡機能検査法を学び、診断に応用する方法を学習する。			
到達目標 1) 聴覚・平衡機能を理解し、説明できる。(A) 2) 聴覚・平衡障害を起こす疾患を想起し、原因別、症状別に挙げることができる。(A, B) 3) 聴覚・平衡機能検査法を理解し、検査結果をもとに疾患の診断ができる。(A, B)			
成績評価の方法 与えられたテーマに関するレポートを作成し評価する。(80%) 合わせて口頭試問を行い、総合的に評価する。(20%)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 内耳の解剖と機能 第1回 内耳の解剖と機能① - 蝸牛の微細構造と音伝導機構 第2回 内耳の解剖と機能② - 前庭系の構造と平衡感覚の調節 聴覚・平衡神経路の解剖 第3回 聴覚平衡神経路の解剖① - 蝸牛神経・前庭神経の走行と接続 第4回 聴覚平衡神経路の解剖② - 中枢神経系における聴覚・平衡情報の伝達 聴覚・平衡機能の生理 第5回 聴覚・平衡機能生理① - 有毛細胞の機能と感覚変換メカニズム 第6回 聴覚・平衡機能生理② - 内リンパ・外リンパの役割と生理的調節 聴覚機能検査 第7回 聴覚機能検査① - 純音聴力検査と語音聴力検査の原理 第8回 聴覚機能検査② - 聴性脳幹反応 (ABR) と耳音響放射 (OAE) の応用 平衡機能検査 第9回 平衡機能検査① - 赤外線CCDカメラを用いた眼振検査 第10回 平衡機能検査② - 重心動揺計と温度刺激検査の臨床応用 内耳電位測定法 第11回 内耳電位測定法① - 蝸電図 (ECochG) 第12回 内耳電位測定法② - 内耳の生理学的評価と臨床応用 聴覚・平衡障害を起こす疾患 第13回 聴覚・平衡障害を起こす疾患① - 突発性難聴とメニエール病の病態 第14回 聴覚・平衡障害を起こす疾患② - 加齢性難聴、前庭神経炎、外リンパ瘻 内耳疾患の診断 第15回 内耳疾患の診断 - 画像診断・電気生理学的診断の最新技術 授業及び学習の方法: 講義において配布するプリントやマルチメディアによる情報提供等により学習する。			

2026 医学系研究科

最新の基礎的・臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成する。

この科目は基本的に対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を全て対面または遠隔へ変更する可能性があります。

【自学自習のためのアドバイス】

実際の臨床現場では、目の前の患者さんを診察し、症状を生じている病態を想起し、推理することが重要である。病態を想定できると、おのずとどのようにすればその病態を改善できるか、対応を検討することができる、つまり、治療法までつながる。この病態を考えるうえで、病態から改善させるゴールである正常な生理機能、そして、その生理機能を発揮することに有利な解剖学的構造になっていることを常に考えながら学習すると、より効果的である。(60時間)

教科書・参考書等

教科書八木聰明：新図説耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座 1. 内耳 (メディカルビュー社)

参考書神崎 仁：図説耳鼻咽喉科 NEW APPROACH 3 聴覚情報処理とその異常 (メディカルビュー社)

オフィスアワー

月、金 12～17時 場所 耳鼻科医局：アポイントにより質問の時間を設ける。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語で予定している。

教員の実務経験との関連

担当教官は、患者さんの診療に携わる耳鼻咽喉科医師（専門医、指導医）であり、基礎医学の視点と臨床医の視点をあわせもち、医療のニーズを把握しつつ今後の医学の発展に寄与できる人材を育成することができる。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687426-1) 痛み学 Pain Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 荻野 祐一	関連授業科目 呼吸循環制御学		
	履修推奨科目 呼吸循環制御学		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 1. 麻酔、意識と痛みに関連する神経機構の解剖、生理、病態生理 2. 麻酔・周術期の意識制御、急性痛治療、認知機能障害治療 3. 慢性痛治療 などについて授業する。 主として、痛みと麻酔に関する研究や臨床について講義を行う。			
授業の目的 痛みに関する研究や臨床に係わる研究者や臨床家に必要とされる知識： <ol style="list-style-type: none"> 意識と痛みに関わる神経機構の形態と機能 意識と痛み受容に影響する薬物とその作用機序 異常痛発生機序と治療 周術期認知機能障害の発症機序と治療 を身につける。(AB)			
到達目標 <ol style="list-style-type: none"> 意識と痛みに関わる神経機構の形態と機能 意識と痛み受容に影響する薬物とその作用機序 異常痛発生機序と治療 周術期認知機能障害の発症機序と治療 などについて説明することができる。 (AB)			
成績評価の方法 <ol style="list-style-type: none"> 必須知識についての評価 (50%) 授業テーマについてのレポート (50%) 			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業及び学習の方法】 <ol style="list-style-type: none"> 標準的教科書による知識整理 基礎的研究、臨床的研究の最新文献の講読 今後の研究の進むべき方向と可能性についての議論 基本的に対面講義を行います。場合によっては遠隔に変更する可能性があります。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) 麻酔科学・痛み学に関する最新の学術論文を検索し、読んでください。 麻酔科学・痛み学を実際の臨床現場で実践してください。			
教科書・参考書等 教科書： 痛み心理学：感情として痛みを理解する [編著] 荻野祐一 [著者] 荻野祐一 小山哲男 掛田崇寛 小林しのぶ 川道拓東 出版社：誠信書房 (発売日2023/3/15) ISBN: 441430024X 参考書： 麻酔科研修 実況中継! 第5巻 術後・ペインクリニック・緩和医療での痛み治療編			

2026 医学系研究科

駒澤 伸泰 (著), 荻野 祐一 (監修)
出版社 : 中外医学社 (2023/11/28)
まずはここから 鎮静管理 実況中継!
荻野 祐一 (監修), 駒澤 伸泰 (著)
出

オフィスアワー

月曜日15時~17時 場所: 麻酔科学講座 不在のことがあるので随時アポイントが望ましい。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

教員の実務経験との関連

荻野祐一 (OGINO Yuichi) (教授)

麻酔科専門医・指導医、ペインクリニック専門医

麻酔・周術期医学、痛み医学、集中治療医学、緩和医療における実臨床経験を踏まえて、講義・演習を行います。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687427-1) 呼吸循環制御学 Cardiorespiratory Control in Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 浅賀 健彦	関連授業科目 痛み学		
	履修推奨科目 痛み学		
学習時間 講義・演習90分×3回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 担当教官浅賀が、生成AIを用いた研究への入り方を講義する。			
授業の目的 研究や臨床に携わる研究者あるいは臨床家に必要なAI知識： 1. 生成AIと研究 2. 研究テーマの決め方 3. 研究資料を効率的な収集 4. 研究計画書の作成 などを身につける。(AB)			
到達目標 1. 生成AIと研究について理解する 2. 研究テーマの決め方を実践する 3. 研究資料を効率的に収集できるようになる 4. 研究計画書を作成する (AB)			
成績評価の方法 講義の取り組み姿勢(質問に対する応答、態度など)で総合的に評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画： 1回 生成AIと研究 2回 研究テーマの決め方(生徒の研究対象関連のトピック、トレンドを捉える) 3回 研究資料の集め方(Open evidence, ChatGPT等を用いて必要資料を集める) 15回 研究計画書の作成発表、討論 授業及び学習の方法： 学外の生徒においては、参考文献および推薦図書の該当部分を自学学習し、面談でカンファレンスを行い達成度を評価する。また、自身で最新の基礎的、臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成し知識を深める。 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) 授業時間については、担当学生と協議し行うこととする。			
教科書・参考書等 参考書： 医療者のためのChatGPT BEYOND、これだけでわかる!医療AI、医療AIの知識と技術がわかる本、ケースで学ぶ若手医師のAI活用ガイド、医師のChatGPT仕事革命			
オフィスアワー 救急現場での診療対応のため、固定のオフィスアワーを設けることができない。事前のアポイントメントを取ること。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 特になし			
教員の実務経験との関連 浅賀：現職)香大病院集中治療部部長(准教授)；麻酔科指導医、集中治療専門医 麻酔・周術期医学、集中治療医学における実臨床経験を踏まえて、講義・演習を行います。			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687428-1) 小児科学 Pediatrics	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 岩瀬 孝志・日下 隆	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 小児期の成長と発達に関する生理・代謝学的特徴、小児期特有の疾患に関する病態生理を概説する。 また胎児期、新生児期、幼児期の要因に起因する成人期の疾患に関する病態生理を概説する。 それらの理解を基礎に、疾患の診断、治療、予防方法を概説し、それらの新しい取り組み方を検討する。			
授業の目的 小児期の成長と発達に関する生理・代謝学的特徴を理解し、それらの特徴に起因する小児期特有の疾患に関する病態生理を理解する。 また胎児期、新生児期、幼児期の要因に起因する成人期の疾患に関する病態生理を理解する。			
到達目標 小児期の成長と発達に関する生理・代謝学的特徴を理解し、それらの特徴に起因する小児期特有の疾患に関する病態生理を理解し、説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) また胎児期、新生児期、幼児期の要因に起因する成人期の疾患に関する病態生理を理解し、説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 疾患の新しい診断、治療、予防方法の確立方法の基本的考え方や実施方法を習得し、研究に応用することができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート80%、発表・討議20%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 1回 総論 2回 発達小児科学：小児の成長・発達の特徴 3回 発達小児科学：小児の成長・発達の栄養 4回 新生児学：新生児期の循環・代謝の特異性とそれを基礎にした疾患とその管理 (1) 5回 新生児学：新生児期の循環・代謝の特異性とそれを基礎にした疾患とその管理 (2) 6回 新生児学：新生児期の循環・代謝の特異性とそれを基礎にした疾患とその管理 (3) 7回 小児薬物代謝学：小児期特有の薬物代謝とそれを基礎にした薬物治療 (1) 8回 小児薬物代謝学：小児期特有の薬物代謝とそれを基礎にした薬物治療 (2) 9回 発達神経学：小児期特有の神経疾患の病態生理、その治療と予防方法 (1) 10回 発達神経学：小児期特有の神経疾患の病態生理、その治療と予防方法 (2) 11回 発達精神学：発達障害等の小児期特有の精神疾患の病態生理、その治療と予防方法 (1) 12回 発達精神学：発達障害等の小児期特有の精神疾患の病態生理、その治療と予防方法 (2) 13回 症例検討 (1) 14回 症例検討 (2) 15回 症例検討 (3) 授業及び学習の方法:対面での講義を主体とする。また小児科学研究に関する論文等を検索し、項目毎に系統的に要約を作成する。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 2回～3回 小児の成長・発達の特徴について、教科書で確認しておく。(1時間×2) 小児の成長・発達の特徴について、要点をレポートにまとめる。(1時間×2) 4回～6回 新生児期の循環・代謝の特異性とそれを基礎にした疾患とその管理について、教科書で確認しておく。(1時間×3回)			

2026 医学系研究科

	新生児期の循環・代謝の特異性とそれを基礎にした疾患とその管理について、要点をレポートにまとめる。(1時間×3回)
7回～8回	小児期特有の薬物代謝とそれを基礎にした薬物治療について、教科書で確認しておく。 (1時間×2回) 小児期特有の薬物代謝とそれを基礎にした薬物治療について、要点をレポートにまとめる。 (1時間×2回)
9回～10回	小児期特有の神経疾患の病態生理、その治療と予防方法について、教科書で確認しておく。 (1時間×2回) 小児期特有の神経疾患の病態生理、その治療と予防方法について、要点をレポートにまとめる。 (1時間×2回)
11回～12回	発達障害等の小児期特有の精神疾患の病態生理、その治療と予防方法について、教科書で確認しておく。(1時間×2回) 発達障害等の小児期特有の精神疾患の病態生理、その治療と予防方法について、要点をレポートにまとめる。(1時間×2回)
13回～15回	症例検討について、要点をレポートにまとめる。(1時間×3回)

教科書・参考書等

教科書

標準小児科学 原 寿郎監修(日下隆執筆)第9版 医学書院

小児科学 大関、近藤総編集、第3版 医学書院

小児科 診断・治療指針 改定第2版 遠藤文夫 総編集 中山書店

講義録 小児科学 佐地 勉 編集 Medical view

新生児学 第2版 小川、多田ら編集 メディカ出版

ネルソン小児科学 衛藤 衛監修 原著第19版 エルゼビア・ジャパン

参考書 なし

オフィスアワー

木曜日：17～18時 医局

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687429-1) 内分泌代謝学 Endocrinology and Metabolism	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 井町 仁美, 村尾 孝児	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間)			
授業の概要 この授業では、内分泌代謝学（ホルモン異常）について知識を習得する。担当教員は最新の内分泌学の概要解説する。受講者は書籍、ネット情報を収集して、参考書を読み、自らの考えをまとめて、レポートを書き、他の受講者と話し合う。			
授業の目的 内分泌代謝学には様々な疾患がある。それぞれの疾患について学習し、理論を理解し、内分泌代謝の病態の把握、身体所見、検査データの解析の方法、治療方法の概要、予防方法を身につける (AB)。			
到達目標 1、内分泌臓器からのホルモン分泌のメカニズムを理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 2、内分泌疾患に関してホルモン分泌異常を理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 3、各種の内分泌代謝疾患におけるホルモン分泌異常について理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 4、各種の内分泌代謝疾患におけるホルモン分泌異常について理解し、その応用を適切に提示できる (DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 講義中の諮問100%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 内分泌代謝学総論 第2回 甲状腺疾患 第3回 副甲状腺疾患 第4回 視床下部疾患 第5回 下垂体疾患 第6回 肥満症 第7回 副腎皮質疾患 第8回 副腎髄質疾患 第9回 男性性腺疾患 第10回 女性性腺疾患 第11回 骨粗鬆症 第12回 糖尿病 第13回 脂質異常症 第14回 遺伝性内分泌疾患 第15回 内分泌疾患の最新治療 授業は講義を中心に進めるが、受講者の理解のために討論を取り入れる。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習30時間) Williams Textbook of ENDOCRINOLOGY 2023の関連の項目を一読する。			
教科書・参考書等 Williams Textbook of Endocrinology 15th ed.; Endocrinology & metabolism			

2026 医学系研究科

Therapy for Diabetes Mellitus and Related Disorders, 6th Edition

随時、最新論文を提供する

オフィスアワー

水曜日 午後13ー18時 随時アポイントによる質問をうける

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

講義で学んだことを、学生自身の研究テーマへ応用するように考えること。

教員の実務経験との関連

担当教員は、内分泌代謝・糖尿病の研究診療経験が20年以上あり、長年にわたり本領域に携わった経験を有している。

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687430-1) 糖尿病学 Diabetes	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 井町 仁美・村尾 孝児	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 この授業では、最近患者が増加している糖尿病について知識を習得する。担当教員は最新の糖尿病について解説をおこない、受講者は書籍、ネット情報を収集して、参考書を読み、自らの考えをまとめて、レポートを書き、他の受講者と話し合う			
授業の目的 糖尿病には様々な要因、分類がある。それぞれの病因、分類について学習し、理論を理解し、糖尿病の病態の把握、身体所見、検査データの解析の方法、治療方法の概要、予防方法を身につける (AB)			
到達目標 1、各人に必要な栄養素、カロリーを理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 2、糖尿病患者への療養を理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 3、糖尿病患者へ運動療法を理解し、その要点を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 4、糖尿病患者へ薬物療法を理解し、患者に即した治療に対して、その応用を適切に提示できる (DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 講義中の諮問100%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 糖尿病学総論 (世界的な糖尿病の動向を中心に疫学的な解説をおこなう) 第2回 栄養学総論 第3回 糖尿病の現状 第4回 糖尿病の分類 第5回 糖尿病の原因 第6回 糖尿病発症と肥満 第7回 糖尿病発症とインスリン抵抗性 第8回 糖尿病の食事療法 (先進の食事療法の考え方について解説する。また香川大学独自の希少糖による食事療法について解説する。) 第9回 糖尿病の運動療法 (先進の運動療法の考え方について解説する。また香川大学独自のモーションキャプチャリングによるサルコペニア予防について解説する。) 第10回 糖尿病の薬物治療 (先進の薬物療法の考え方について解説する。また香川大学独自のSAP療法について解説する。) 第11回 糖尿病のインスリン治療 第12回 糖尿病の最新のデバイス 第13回 糖尿病の療養指導 第14回 糖尿病患者の精神的な治療 第15回 糖尿病治療の今後 授業及び学習の方法: 教科書を学生とともに読み合わせた上で、教員は講義として全体をまとめて解説する。また、授業の最後に課題を与えてレポートを提出させる。演習は栄養代謝学講義を受けたことを前提に実施する。本演習では栄養素や栄養代謝疾患に関連した論文を学生に与えて、担当学生による論文の解説を行った後、論文を題材に参加者全員で議論する。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習30時間 + 事後学習 30時間)			

2026 医学系研究科

[edited by] Philip Felig, Lawrence A. Frohman; Joslin's Diabetes Mellitus 14th ed. とTherapy for Diabetes Mellitus and Related Disorders, 6th Edition関連する項目について一読する

教科書・参考書等

[edited by] Philip Felig, Lawrence A. Frohman; Joslin's Diabetes Mellitus 14th ed.
Therapy for Diabetes Mellitus and Related Disorders, 6th Edition
Williams Textbook of Endocrinology 15th ed.; Endocrinology & metabolism
随時、最新論文を提供する

オフィスアワー

火曜日午後13—18時。原則として授業中、授業後に質問を受けるが、事前にアポイントメントを取れば随時対応したい

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

論文の解説を担当する学生は、論文を簡単に説明できるようにレジュメを作って授業当日に配布できるようにする。担当学生以外も事前に当該論文を読んで理解しておくことが望ましい。

教員の実務経験との関連

担当教員は、内分泌代謝・糖尿病の研究診療経験が20年以上あり、長年にわたり本領域に携わった経験を有している。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687431-1) 救命救急医学 Pathophysiology and treatment of severe brain damage	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 河北 賢哉	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 1. 重症脳障害の病態と治療に関する実症例を具体的に提示し、その病態を理解させる。 2. 治療に関する過去の基礎研究や臨床試験を調べ、知識のアップデートをさせる。 3. 新しい治療法を開発するための基礎研究、臨床研究を提案させる。			
授業の目的 1) 重症脳障害の病態の研究テーマを見つけることができる。 2) 重症脳障害の治療の研究テーマを見つけることができる。 (AB)			
到達目標 1) 重症脳障害の病態を適切に説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 2) 重症脳障害の治療の研究テーマをみつけresearch questionを作り、データを集積して論文化することができる (DPの「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 取得した知識と技術、論文により評価する レポート80% (主に到達目標1に対応) 発表および討議20% (主に到達目標2に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 重症脳障害：総論 第9回 重症脳障害：脳内酸素飽和度 第2回 重症脳障害：心停止モデル 第10回 重症脳障害：頭蓋内圧 第3回 重症脳障害：虚血障害 第11回 重症脳障害：内頸静脈酸素飽和度 第4回 重症脳障害：再灌流障害 第12回 重症脳障害：経頭蓋ドップラー 第5回 重症脳障害：バイオマーカー 第13回 重症脳障害：脳マイクロダイアリシス 第6回 重症脳障害：脳循環代謝 第14回 重症脳障害：鎮痛鎮静 第7回 重症脳障害：体温管理 第15回 重症脳障害：総括 第8回 重症脳障害：脳波 授業及び学習の方法 (遠隔授業) 講義および演習を行う。重症脳障害の病態と治療に必要なスキルを身につける。最近文献を検索し、系統的に要約を作成し知識を深め、データをとり論文化する。 【自学自習に関するアドバイス】 講義の前には救急医療・集中治療・災害医療テキストの関連箇所を予習して、授業を受けること (2時間×15回)。 授業中の質問に答えられなかった箇所については、テキストで確認すること (2時間×15回)。			
教科書・参考書等 参考書 黒田泰弘 監修 Neuro ICUブック Kiwon Lee編著 2021 メディカルサイエンスインターナショナル 黒田泰弘編 神経集中治療 救急・集中治療vol 28 No 11/12, 2016 総合医学社, 黒田泰弘編 エキスパートに学ぶ神経集中治療 救急・集中治療vol 30 No 4, 2018 総合医学社, Kiwon Lee, The NeuroICU Book, Second Edition (Neurology) 2018 McGraw-Hill Education 文			
オフィスアワー 南病棟1階 救命救急センター医局。河北のメール kawakita.kenya@kagawa-u.ac.jp に連絡ください。毎週水曜			

2026 医学系研究科

日13～14時にセミナーを開催しています。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

積極的に参加、発言してください。

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688012-1) 脳卒中特論 Prevention and Treatment of Cerebrovascular Disease	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 川西 正彦, 三宅 啓介	関連授業科目 神経解剖学特論、臨床神経学特論 履修推奨科目 脳神経外科学、神経変性疾患特論		
学習時間 講義90分 × 15回 + 自主学習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 脳卒中の一次予防および二次予防が行えるように脳卒中の原因となる疾患とその病態について講義を行う。さらに、脳血管撮影や脳血流PETなどを用いた脳血管の機能解剖を指導する。脳血管障害の内科的な予防法、外科的な治療について講義指導を行う。特に脳循環代謝については、急性期または慢性期における疾患における病態と治療法について指導する。			
授業の目的 脳卒中の原因となる脳血管障害において、画像診断や神経症候学を駆使することで遅滞なく脳卒中の予防と治療が行えるようになる。また、緊急治療が必要な病態と待機治療が可能な疾患を学習することで必要な疾患を専門医へ遅延なく早急に紹介し得るようになる。			
到達目標 ①虚血性脳血管障害の原因となる疾患と病態を理解する (DPの「専門知識・理解」に対応)。 ②出血性脳血管障害の原因となる疾患と病態を理解する (DPの「専門知識・理解」に対応)。 ③原因を解明し、脳卒中の予防もしくは進行を防ぐことができるようになる (DPの「研究能力・応用力」に対応)。 ④脳卒中の原因となる脳血管の器質的な疾患を理解し、内科的または外科的な予防治療が選択できるようになる (DPの「研究能力・応用力」に対応)。 ⑤特に超急性期の虚血性脳血管障害に対する急性期治療の必要性和検査法、治療を選択できるようになる (DPの「研究能力・応用力」に対応)。			
成績評価の方法 レポート75% (到達目標④⑤を中心)、発表及び討議25% (到達目標全体を通して特に研究と応用について検討)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 講義にて脳卒中と脳血管障害の病態を理解する。特に虚血性脳血管障害においては、脳循環代謝について詳しく学ぶ。病態を理解し得た後に、それぞれの疾患による内科的または外科的な治療法について学習し、実際の臨床現場で見学または手技を実習し、得られた結果を議論して理解を深める。 授業・指導は対面で行い、特に急性期脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血について学習する。脳卒中ガイドライン2021を参考資料として準備学習を行い、講義資料と合わせて事後学習を行うことが効果的である。 脳血管内治療では、シミュレーターを使用して基礎的なカテーテルの操作方法や道具の使用方法を学ぶ。 特に興味のある分野に関してはマンツーマンで指導し、将来の研究テーマを決定する。 下記講義を順次行い (15回)、必要に応じて自主学習を行う。 1. 脳卒中と脳血管障害の総論 2. 虚血性脳卒中の総論 3. 出血性脳卒中の総論 4. 脳卒中の病態と原因となる内科的な疾患とそれぞれにおける予防について 5. 虚血性脳血管障害における脳循環代謝とその検査法と評価 6. 脳卒中の原因となる脳血管障害について 7. 虚血性脳卒中における内科的治療 8. 虚血性脳卒中における外科的治療 9. 出血性脳卒中における外科的な治療適応 10. 出血性脳卒中における外科的治療法 11. 脳血管内治療とは 12. 脳血管の正常解剖と多彩なバリエーション 13. 脳血管内治療の具体的な方法と症例への展望			

2026 医学系研究科

14. 脳卒中後のリハビリテーションと回復期施設

15. これからの脳卒中の予防と治療

自主学習について

準備学習（30時間）

とくに脳卒中ガイドライン2021を参考として、一般的な脳卒中の診断と治療法について、内科的及び外科的に分けて学習する。

事後学習（30時間）

脳卒中の急性期または慢性期の治療後、特に外科手術後の経過について、画像診断と臨床症状の変化について学習する。脳卒中の治療は予防的な治療の場合が多く、将来の脳卒中の予防にどの程度寄与しているか学習することで、新たな脳卒中治療の選択に役立てる。

教科書・参考書等

特に指定せず、必要に応じてその都度推薦予定

オフィスアワー

脳神経外科医局：月曜から金曜の9時から17時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

教員の実務経験との関連

担当教員（教授、准教授）が授業を担当する予定である。

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Px 授業科目名 (講義コード:L688005-1) 呼吸器病学 (内科学) Respiratory Medicine (Internal Thoracic Surgery)	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Px	単位数 2	
担当教員名 金地 伸拓	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 癌の基礎研究として、肺癌細胞の培養、抗癌剤やEGFR阻害薬の扱いについて実習する。また薬剤に対する癌細胞の反応について実験する。			
授業の目的 癌の基礎研究において、癌細胞の培養は基本的な手技である。細胞培養方法を学び、細胞毎の特性や遺伝子変異状態と分子標的治療薬の感受性との関連を調査することは、個別化医療、すなわち適切な治療選択につながる。細胞培養をマスターし、EGFR遺伝子変異状態とEGFR阻害薬の感受性との関連を調べることを目的とする。			
到達目標 細胞培養方法を覚え、肺癌細胞株毎のEGFR遺伝子変異とEGFR阻害薬の感受性との関連を調べることができる (DPのAB)。			
成績評価の方法 実技 20%、レポート 80%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了：到達目標を達成している。 不合格：到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 血液・免疫・呼吸器内科学の研究室において肺癌細胞株を用いて細胞培養方法を学ぶ。EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性を検討する。 (授業計画) 第1回 肺癌のEGFR遺伝子変異の種類と検出方法について① 第2回 肺癌のEGFR遺伝子変異の種類と検出方法について② 第3回 肺癌の分子標的治療、特にEGFR遺伝子変異陽性肺癌に対する治療について① 第4回 肺癌の分子標的治療、特にEGFR遺伝子変異陽性肺癌に対する治療について② 第5回 肺癌細胞株を用いた細胞培養① 第6回 肺癌細胞株を用いた細胞培養② 第7回 肺癌細胞株を用いた細胞培養③ 第8回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討① 第9回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討② 第10回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討③ 第11回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討④ 第12回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討⑤ 第13回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討⑥ 第14回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討⑦ 第15回 EGFR遺伝子異常とEGFR阻害薬の感受性との関連性の検討⑧ (準備学習、事後学習のためのアドバイス) 本講義に関連する最新の学術論文を検索し、読んでください。(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
教科書・参考書等 肺癌診療ガイドライン最新版 日本肺癌学会編 バイオ実験イラストレイテッド1巻 秀潤社			
オフィスアワー 火曜日15時から18時 水曜日15時から17時 場所は血液・免疫・呼吸器内科学の医局			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ			

2026 医学系研究科

内容は大学院生の希望にあわせて変更可能です。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L688004-1) 呼吸器病学 (外科学) Respiratory Medicine (General Thoracic Surgery)	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 4	
担当教員名 吸器・乳腺内分泌外科学 (喜多). 松浦 奈 都美. 三崎 伯幸	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 呼吸器の解剖・機能の理解を促すとともに、手術の基礎を教える。ビデオ、DVDなどの材料を用いて実際の呼吸器外科手術を供覧する。呼吸器外科の歴史、手術の成績を示し、新しい術式について説明する。			
授業の目的 肺癌を中心とした呼吸器外科の適応、内容を理解する。手術の具体的内容、術式の選択にいたる根拠を理解する。外科的治療にいたる疾患の背景を理解することにより治療に対する科学的な判断ができる医師を育成する。			
到達目標			
1) 呼吸器の解剖およびその機能を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2) 呼吸器外科の手術手技について述べる事ができる。(DPの「研究能力・応用」に対応) 3) 肺癌手術の手術手技について述べる事ができる。(DPの「研究能力・応用」に対応) 4) 呼吸器外科の歴史について述べる事ができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 5) 呼吸器外科の成績について述べる事ができる。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 講義に関しては提出されたレポート評価 (75%)と、講義内での討論あるいは小テスト (25%)の総合評価とする。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス			
授業計画 1回 呼吸器の解剖およびその機能 Over view 2回 呼吸器の解剖およびその機能 総論 3回 呼吸器の解剖およびその機能 気管～肺の構造と機能 4回 呼吸器の解剖およびその機能 肺区域構造の理解 5回 呼吸器の解剖およびその機能 組織学的考察 6回 視覚教材による呼吸器手術の理解 標準手術とは？肺葉切除について 7回 視覚教材による呼吸器手術の理解 肺区域切除について 8回 視覚教材による呼吸器手術の理解 亜区域切除について 9回 視覚教材による呼吸器手術の理解 拡大手術について 10回 視覚教材による呼吸器手術の理解 再建術について 11回 呼吸器手術の成績の理解 総論 12回 呼吸器手術の成績の理解 予後とは？統計解析の重要性 13回 呼吸器手術の成績の理解 アウトカムの設定 14回 呼吸器手術の成績の理解 手術を多角的にとらえる 15回 呼吸器手術の成績の理解 本当の手術成績を評価する 16回 呼吸器手術の歴史の講義 始まり 17回 呼吸器手術の歴史の講義 近世から現代にかけて 18回 呼吸器手術の歴史の講義 現在の手術手技 19回 呼吸器手術の歴史の講義 集学的治療の歴史 20回 呼吸器手術の歴史の講義 あるべき呼吸器外科手術、未来像とは？ 21回 新しい術式の開発に関する講義 現在の問題点 22回 新しい術式の開発に関する講義 チュートリアル 23回 新しい術式の開発に関する講義 必要とされる器具 24回 新しい術式の開発に関する講義 機器開発のパートナー 25回 新しい術式の開発に関する講義 スポンサーについて考える 26回 新しい術式の開発に関する講義 実験計画作成アドバイス 27回 新しい術式の開発に関する講義 実際の手術に必要なもの 28回 新しい術式の開発に関する講義 評価方法を考える			

2026 医学系研究科

29回 新しい術式の開発に関する講義 広報とは 30回 新しい術式の開発に関する講義 まとめ
授業及び学習の方法

この科目は基本的に対面授業とする。

ビデオ、DVDで手術理解をするとともに、実際の手術にも参加する。

自学自習のためのアドバイス

講義、実習に臨む前に十分予習を行う。教科書、参考書での学習時に疑問点が出た場合は事前に担当教員へ質問を行い、講義・実習がより有用なものになるよう心掛ける。講義・実習後は問題点を整理して事後学習を行うこと。

(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)

教科書・参考書等

教科書 呼吸器外科学 第3版 (南山堂)

参考書 呼吸器外科手術書 (金芳堂)

オフィスアワー

随時：アポイントメントにより質問の時間を設ける (内線2773)。場所：講座講師室 (326号)。

時間帯：平日 12時～13時, 17:00～18時。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

呼吸器外科手術を科学的に理解する事。授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。授業等で配付する資料の一部が、日本語の可能性はある。

教員の実務経験との関連

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688006-1) 消化器病学 (内科学) Gastroenterology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 小原 英幹	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 消化器諸臓器の解剖、生理の理解とともに食道、胃、小腸、大腸疾患についての診断と治療について講義する。特に、最近導入された小腸検査の診断技術であるカプセル内視鏡、ダブルバルーンについては見学実習を行う。さらに早期の食道・胃・大腸癌に対する治療である内視鏡的粘膜剥離術 (ESD) は見学実習を行う。			
授業の目的 1. 消化管の解剖と生理を理解する。 2. カプセル内視鏡ダブルバルーンについての方法論と、佐生紀消化器癌に対する内視鏡的粘膜剥離術 (ESD) の見学実習によって最先端の診断と治療について学ぶ			
到達目標			
学生が早期消化器癌についての内視鏡的治療方法について説明し、その臨床課題を説明できる (AB)			
成績評価の方法 レポート提出: 100% 【レポート内容】 1. 消化管の解剖と生理について 2. カプセル内視鏡ダブルバルーンについての方法論と、佐生紀消化器癌に対する内視鏡的粘膜剥離術 (ESD) の見学実習によって最先端の診断と治療について			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (1) 消化管の解剖、生理 (2) 食道癌の診断と内科治療 (3) 食道癌の診断と外科治療 (4) 胃癌の診断と内科治療 (5) 胃癌の診断と外科治療 (6) 大腸癌の診断と内科治療 (7) 大腸癌の診断と外科治療 (8) 肝癌の診断と内科治療 (9) 肝癌の診断と外科治療 (10) 膵癌の診断と内科治療 (11) 膵癌の診断と外科治療 (12) 胆石の内科治療 (13) カプセル内視鏡の見学実習 (14) ダブルバルーン内視鏡の見学実習 (15) ESDの治療手技 授業及び学習の方法: スライドを用いて講義を行い、カプセル内視鏡、ダブルバルーン内視鏡及びESDの治療については見学実習を行う。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間) PubMedを利用して「microRNA、cancer、review」で論文を検索し、興味ある文献を最低3論文精読する。			
教科書・参考書等 教科書・参考書 特に必要としない。			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

木曜日17時以降 消化器・神経内科学教室
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 特になし。
教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-BACM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L688007-1) 消化器病学 (外科学) Gastroenterological Surgery	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 BAC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 2	
担当教員名 岡野 圭一	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義90分 × 15回 + 自学自習 (準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)			
授業の概要 教員が消化器病学の範疇に入る諸臓器の解剖・機能を外科的側面から理解するための授業を行い、それらに発生する良性・悪性疾患についての知識を深めさせる。 臓器別に分類すると消化管(食道、胃、小腸、結腸、直腸など)および実質臓器(肝臓、胆道、膵臓、脾臓)に分かれるが、それぞれの腫瘍、炎症、先天性疾患、遺伝性疾患の発生原因、疫学病態生理、生物学的特性、治療法と成績など最新の外科的知見を紹介する。また、その背景となる消化器外科学分野の基礎的研究成果のうち臨床反映性のあるものを講義する。さらに、残された課題を知り、今後の研究課題を議論する。教員が最新の臨床試験や関連する論文を紹介して、独創的な大学院研究を導き出すような講義を行う。			
授業の目的 1) 消化器諸臓器の解剖・機能を理解する。 2) 消化器諸臓器に発生する各種疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績を理解する。 3) 消化器系ホルモンと関連する疾患について理解する。 4) バクテリアルトランスロケーションについて理解する。 5) 全身性疾患の消化器病変について理解する。 6) 消化器系の術後障害について理解する。			
到達目標 1) 学生が、基本となる専門知識や理解により主体的に消化器外科における研究課題を立案できる。(A: 専門知識・理解) 2) 学生が、研究課題に対する実践的な研究手法の設定や研究完遂へのマイルストーンを作成できる。(B: 研究能力・応用力) 3) 学生が、指導者として高い倫理観を持ち後進の教育や育成ができる。(C: 倫理観・社会的責任)			
成績評価の方法 レポート提出により評価する			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス (1) 消化管諸臓器の解剖・機能 (2) 肝胆膵諸臓器の解剖・機能 (3) 食道疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (4) 胃疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (5) 結腸・直腸疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (6) レウスの発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (7) 肝疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (8) 胆膵疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (9) 炎症性腸疾患の発生原因、疫学、病態、生物学的特性、治療法と成績 (10) 各種消化管ホルモンと関連疾患 (11) 各種膵ホルモンと関連疾患 (12) バクテリアルトランスロケーション (13) 全身性疾患の消化器病変 (14) 消化管系の術後障害 (15) 残された臨床上の問題点と今後の研究課題 自学自習 上記に関連する消化器外科成書(下記参照)と関連文献を授業の前と後に2時間程度は自習する事			

2026 医学系研究科

教科書・参考書等

「消化器外科専門医の心得」 発行：一般社団法人 日本消化器外科学会
外科系医師のための臨床研究 手術を評価するアウトカム : 本多 通孝 (著) : 医学書院
医療統計解析使いこなし実践ガイド～臨床研究で迷わないQ&A : 対馬 栄輝 (著) : 羊土社
Surgical Pathology of GI Tract, Liver, Biliary Tract & Pancreas, 4th ed. : R. D. Odze & J. R. Goldblum.
ELSEVIER. 2023年
Sabiston Textbook of

オフィスアワー

毎週木曜日 13時 - 17時

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688008-1) 循環器病学 (内科学) Cardiovascular Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 野間 貴久, 南野 哲男	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+事前学習30時間 事後学習30時間			
授業の概要 教員は、病態生理、診断法、治療法、主要疾患の4つで構成された授業を行う。病態生理では、心不全、不整脈、虚血性心疾患、高血圧、動脈硬化に関する基礎的臨床課題が含まれている。診断法と治療法においては、上記疾患の診断と治療の過去の業績と最近の進歩が含まれる。			
授業の目的 本授業の目的は、臨床現場での未解決の問題を見出し、基礎研究や臨床研究によりこれらを解決する能力を身に付けることである。心・腎・脳グループの連関で、香川発の新しい治療法の開発を目指す。 現在、循環器病学の臨床は、ライフスタイルの大きな変化と高齢者社会を迎えて、大きく変遷しつつある。行うべき授業は分子生物学を中心とした基礎的成果から新しいデバイスを用いた革新的な治療法まで多岐にわたる。循環器領域のさまざまな病態に対応できる専門的知識の取得と、未解決の問題に立ち向かうresearch mindを養い、基礎的臨床			
到達目標 到達目標1：専門的な知識の整理；心不全の病態生理、左室リモデリング、心不全と神経体液性因子について説明できる。心筋虚血と致死性不整脈、心臓性突然死と自律神経について説明できる。 冠動脈プラークの破綻、虚血プレコンディショニング、組織レニンアンギオテンシン系、虚血性心疾患と神経体液性因子について説明できる。高血圧原因遺伝子、食塩感受性高血圧の基礎と臨床、ナトリウム利尿ペプチド系と高血圧、レニンアンギオテンシン系と臓器障害について説明できる。内臓脂肪型肥満と動脈硬化、高血圧と動脈硬化、糖尿病と動脈硬化、脂質異常について理解できる。(DPのA:専門知識・理解に対応) 到達目標2：エビデンスに基づいた循環器疾患の診断、治療について説明できる。(DPのA:専門知識・理解に対応) 到達目標3：研究能力・応用力の取得のために未解決の研究課題についてテーマを創造する。(DPのB:研究能力・応用力に対応)			
成績評価の方法 レポート75%(主に到達目標1、2に対応)、発表及び討議25%(主に到達目標3に対応)。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 オリエンテーション 第2回 循環器の病態生理①心不全 第3回 循環器の病態生理②不整脈 第4回 循環器の病態生理③虚血性心疾患 第5回 循環器の病態生理④高血圧 第6回 循環器の病態生理⑤動脈硬化 第7回 循環器疾患の診断①心不全 第8回 循環器疾患の診断②不整脈 第9回 循環器疾患の診断③虚血性心疾患 第10回 循環器疾患の診断④高血圧 第11回 循環器疾患の診断⑤動脈硬化 第12回 循環器疾患の治療方法①：適応 第13回 循環器疾患の治療方法②：エビデンスと治療目標 第14回 講義のまとめ 第15回 研究課題の提案：発表 【授業及び学習の方法】			

2026 医学系研究科

循環器主要疾患の病態生理、診断法、治療法、の3つ構成部分について授業を行い、その後、必要な基礎的ならびに臨床的実習を行う。臨床実習では特に心臓超音波、冠動脈造影、心臓電気生理学検査、運動負荷試験、心筋シンチ、心臓PETなどを重点的に行う。

毎週月曜日16時30分～ カンファレンスに参加する。

【自学自習のためのアドバイス】

講義に挑む前に予習（各回1時間程度の事前学習）をしてきちんと講義についてくること、そしてその内容を実習でしっかりと確認することが重要です。指示された標準実習時間以外に実習室で自主学習（各回2時間程度の事前学習、各回2時間程度の事後学習）行うと効率よく学べます。

教科書・参考書等

教科書 ハーバード大学テキスト 心臓病の病態生理 第4版 メディカルサイエンスインターナショナル出版 2017年

ガイトン生理学 原著第13版 アーサー・C. ガイトン, John E. Hall 他 エルゼビア・ジャパン, 2018年

Guyton and Hall Textbook of Medical Physiology, 13版(英語) John E. Hall PhD他、2015年

参考書 臨床研究の道標 7つのステップで学ぶ研究デザイン：福原俊一著 認定NPO法人 健康医療評価研究機構（

オフィスアワー

木曜日午後 14:00-15:30

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L688009-1) 循環器病学 (外科学) Cardiovascular Surgery	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 堀井 泰浩・山下 洋一	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習 90分 × 30回 + 自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 心臓血管外科においては、体外循環の使用を必須としていることが、大きな特徴のひとつである。その習熟に向けて、知識を深める。また、末期的心臓病では、人工心臓の使用が必要となるが、人工心臓や補助循環について理解する。			
授業の目的 1) 心臓血管外科学全般について、その特徴を理解する。 2) 体外循環装置の仕組み、実際の応用についての理解する。 3) 人工臓器の開発、改良、現状につき理解し、その問題点を検討する。			
到達目標 1) 心臓血管外科について概略を理解できる。 2) 体外循環装置について、その仕組みを理解でき、操作訓練する。 3) 人工臓器の現状を理解し、今後の発展につき検討できる。			
成績評価の方法 演習に関しては提出されたレポートを評価、実習に関してはグループ検討と提出されたレポートの総合評価とする。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 すべて対面授業 第1回～第10回 心臓血管外科手術の特徴 第11回～第20回 体外循環装置とその使用の実際 第21回～第30回 人工臓器の開発と現状 体外循環および人工臓器に関する最新の基礎的臨床的研究に関する文献を検索し、系統的に要約を作成する。 【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】 自学自習 (準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
教科書・参考書等 図解心臓外科ハンドブック (シュプリンガー・フェアラーク東京) 心疾患の診断と手術 (南江堂) 心臓血管外科手術書 (最先端技術研究所)			
オフィスアワー 随時：アポイントメントにより質問の時間を設ける。臨床研究棟3階330号室			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 特になし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Ex 授業科目名 (講義コード:L688010-1) 核医学 Nuclear medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 4	
担当教員名 西山 佳宏, 山本 由佳	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 核医学検査の画像法について、原理、各種疾患の所見、適応ならびに総合診断における位置づけについて解説する。			
授業の目的 核医学検査の原理、方法、適応、判定法、安全管理を理解し、それらの知識を応用し、自ら画像診断を実践する能力を身につける。			
到達目標 1. 核医学検査の最新の技術・知見を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. 核医学検査の現状の課題に対して、対策を示すことができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート(50%)(特に到達目標1に対応)、読影診断レポート、症例検討会の発表の内容(50%)(特に到達目標2に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は基本的に対面授業を行う。なお状況によっては授業形態を遠隔へ変更する可能性がある。 [授業計画] 第1回:オリエンテーション、第2回:放射能・放射線の基礎、第3回:放射性医薬品、第4回:核医学装置、第5回:画像解析、第6回:脳神経、第7回:心筋血流、第8回:心臓交感神経、第9回:心臓脂肪酸代謝、第10回:ピロリン酸、第11回:心プール、第12回:呼吸器、第13回:甲状腺、第14回:副甲状腺、第15回:副腎、第16回:神経内分泌腫瘍、第17回:骨、第18回:唾液腺、第19回:肝臓、第20回:胆道、第21回:消化管、第22回:腎臓、第23回:腫瘍、第24回:炎症、第25回:リンパ節・リンパ管、第26回:核医学治療甲状腺癌、第27回:核医学治療甲状腺機能亢進、第28回:核医学治療骨転移、第29回:核医学治療神経内分泌腫瘍、第30回:核医学治療交感神経系 以上の計画に関しては、進捗状況、内容の理解度等によって変更することがある。 [授業及び学習の方法] 授業は講義を中心に進めるが、受講者の理解を深めるために発表と討議を取り入れる。また授業で学んだ内容及び授業外で自ら学んだ内容の整理を促すために、レポートにまとめる。 [準備学習及び事後学習のためのアドバイス] 核医学検査の原理、方法等について記載されている参考書を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) 核医学検査の適応について、禁忌項目等を含めまとめる。(10時間) 核医学検査について、要点をレポートにまとめる。(10時間) 各種核医学検査での各種疾患における特徴的な所見について記載されている参考書を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) 各種核医学検査での適応を学習し、総合診断における位置づけについて、自分なりに考えられる課題を抽出し、考察する。(10時間) 各種核医学検査について、被ばくなどの安全管理についてレポートにまとめる。(10時間) 核医学検査の最新の技術・知見について、参考文献を読んで考察を行う。(20時間) 自ら選択した核医学検査について、検査の原理、測定方法、所見、課題についてレポートにまとめる。(120時間)			
教科書・参考書等 わかりやすい核医学(文光堂)、編集 玉木長良ほか、2022年発行、定価 13,200 円			
オフィスアワー 火曜日・木曜日(10:00~16:00)			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 1. 授業の言語は日本語であり、英語で実施することができない。			

2026 医学系研究科

2. 授業等で配付する資料は日本語である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Ex 授業科目名 (講義コード:L688011-1) IVR学 IVR	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Ex	単位数 4	
担当教員名 西山 佳宏, 山本 由佳	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 IVRについて、原理、各種疾患の所見、適応ならびに総合診断における位置づけについて解説する。			
授業の目的 IVRの原理、方法、適応、判定法、安全管理を理解し、それらの知識を応用し、自ら画像診断・治療を実践する能力を身につける。			
到達目標 1. IVRの最新の技術・知見を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. IVRの現状の課題に対して、対策を示すことができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 レポート(50%)(特に到達目標1に対応)、IVR症例検討会の発表の内容(50%)(特に到達目標2に対応)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス この科目は基本的に対面授業を行う。なお状況によっては授業形態を遠隔へ変更する可能性がある。 [授業計画] 第1回：オリエンテーション、第2回：放射線傷害・防護・安全管理、第3回：IVR総論、第4回：動脈塞栓術、第5回：動注療法、第6回：血管拡張術、第7回：ステント留置術、第8回：ステントグラフト留置術、第9回：血管内異物除去術、第10回：下大静脈フィルター、第11回：TIPS/B-RT0、第12回：生検・穿刺、第13回：膿瘍穿刺・ドレナージ、第14回：嚢胞ドレナージ・硬化療法、第15回：胆管ドレナージ、第16回：コイル塞栓術、第17回：肝細胞癌、第18回：子宮筋腫、第19回：動静脈奇形、第20回：消化管出血、第21回：気管支動脈塞栓術、第22回：外傷性肝損傷、第23回：リザーバ、第24回：気管支拡張症、第25回：脾機能亢進症、第26回：腎血管性高血圧症、第27回：上大静脈症候群、第28回：椎体形成術、第29回：食道胃静脈瘤、第30回：救急疾患 以上の計画に関しては、進捗状況、内容の理解度等によって変更することがある。 [授業及び学習の方法] 授業は講義を中心に進めるが、受講者の理解を深めるために発表と討議を取り入れる。また授業で学んだ内容及び授業外で自ら学んだ内容の整理を促すために、レポートにまとめる。 [準備学習及び事後学習のためのアドバイス] IVRの原理、方法等について記載されている参考書を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) IVRの適応について、禁忌項目等を含めまとめる。(10時間) IVRについて、要点をレポートにまとめる。(10時間) IVRでの各種疾患における特徴的な所見について記載されている参考書を事前に読み、授業での理解がしやすいように準備する。(20時間) IVRでの適応を学習し、総合診断における位置づけについて、自分なりに考えられる課題を抽出し、考察する。(10時間) IVRについて、造影剤やX線被ばくなどの安全管理についてレポートにまとめる。(10時間) IVRの最新の技術・知見について、参考文献を読んで考察を行う。(20時間) 自ら選択したIVRについて、検査の原理、測定方法、所見、課題についてレポートにまとめる。(20時間)			
教科書・参考書等 放射線医学 放射線医学総論(金芳堂)、編集 富山憲幸ほか、2012年刊行、定価 5,060円			
オフィスアワー 火曜日・木曜日(10:00~16:00)			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ			

2026 医学系研究科

1. 授業の言語は日本語であり、英語で実施することができない。
2. 授業等で配付する資料は日本語である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード -ABCM--Lx 授業科目名 (講義コード:L688022-1) 先端腫瘍免疫治療学 Innovative Cancer immunotherapy	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 ・	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 吸器・乳腺内分泌外科学 (喜多)・矢島 俊樹	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回 + 自主学习 (準備学習 30時間+事後学習 30時間)			
授業の概要 近年、癌免疫療法の有効性が認識され臨床導入され、多くの癌種の薬物療法においてパラダイムシフトが起きた。しかしながら、その効果は限定的であり、治療効果向上のためには癌免疫療法について十分理解を深め問題点を明らかにし、それを克服する基礎的研究をすすめる必要がある。 この科目では、呼吸器・乳腺内分泌外科領域の悪性腫瘍に対する免疫チェックポイント分子阻害薬 (ICI) を用いた癌免疫療法の適応およびその治療成績について講義する。ICIによる抗腫瘍効果のメカニズムを理解するため、腫瘍免疫応答における各免疫細胞の役割を解説すると共に、ICIによる抗原特異的CD8T細胞活性化の分子機構について最近の知見も含めて概説する。将来における呼吸器・乳腺内分泌外科での新たな癌免疫療法の開発につながるため基礎的な実験手技に関しても紹介する。			
授業の目的 呼吸器・乳腺内分泌外科領域の悪性腫瘍に対し用いられている免疫チェックポイント分子阻害薬 (ICI) の適応およびその治療成績について理解する。 腫瘍免疫応答で働く各免疫細胞の役割を学ぶ。 ICIによる抗腫瘍効果の分子機構を最近の知見も含めて学ぶ。 ICIによる治療効果向上を目指すため、その課題を克服する基礎的な研究手技を身につける。 ICIによる新規治療の開発につながる研究を行える基礎的知識を身につける。			
到達目標 免疫チェックポイント分子阻害薬の適応およびその治療成績について説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応) 腫瘍免疫応答で働く各免疫細胞の役割をそれぞれ説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 現状で分かっているICIによる抗腫瘍効果の分子機構を説明できる (DPの「専門知識・理解」に対応)。 ICIによる治療効果向上を目指すため、その課題を克服する基礎的研究手技を習得し実践できるようにする (DPの「研究能力・応用力」に対応)。 ICI新規治療の開発につながる研究を行うことにより社会に貢献する (DPの「倫理観・社会的責任」に対応)。			
成績評価の方法 レポート提出により評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 1回 肺癌におけるICIの適応および治療成績① 2回 肺癌におけるICIの適応および治療成績② 3回 乳腺内分泌外科領域におけるICIの適応および治療成績 4回 免疫学の基礎的知識① 5回 免疫学の基礎的知識② 6回 癌免疫における各細胞の役割 (抗原特異的T細胞) 7回 癌免疫における各細胞の役割 (NK、NKT細胞、 γ δ 型T細胞、制御性細胞) ① 8回 癌免疫における各細胞の役割 (NK、NKT細胞、 γ δ 型T細胞、制御性細胞) ② 9回 ICIによる抗原特異的CD8T細胞の活性化メカニズム (PD-1を中心に) 10回 その他の免疫チェックポイント分子について (CTLA-4、LAG-3、TIM-3、TIGITなど) 11回 抗原特異的CD8T細胞の動態を解析するマウス腫瘍モデルについて (実験手技含む) 12回 マウス腫瘍モデルを用いた免疫チェックポイント分子の動態について (実験手技含む) ① 13回 マウス腫瘍モデルを用いた免疫チェックポイント分子の動態について (実験手技含む) ② 14回 新規免疫チェックポイント分子を同定する方法論①			

2026 医学系研究科

15回 新規免疫チェックポイント分子を同定する方法論②

【授業及び学習の方法】

スライド、参考書を用いて分かりやすく講義し、最新の基礎および臨床研究に関する論文を抄読して知識を深める(対面授業)。マウスを用いた実験手技の見学も行う。

【自学自習のためのアドバイス】

参考書、論文を用いて自学自習(準備学習 30時間 + 事後学習 30時間)。

教科書・参考書等

指定教科書は特になし。

参考書 免疫生物学(原書第9版)/南江堂/監修 笹月 健彦、吉開泰信

論文は適宜紹介する。

オフィスアワー

随時: アポイントメントにより講義終了後に呼吸器・乳腺内分泌外科の研究室で質問の時間を設ける。

火曜日～金曜日 16時～17時で調整する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

免疫学の基礎的知識を身につけるためまず参考書を熟読する。

授業の教授言語は日本語であり、英語で実施することができない。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687580-1) 共通コアカリキュラム Common Core Curriculum	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 悪性腫瘍の管理と治療、医療倫理学・医療経済学、医療対話学、がんチーム医療実習、医療情報学(腫瘍学における情報システム)		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×30回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 臨床研究の立案し、実施するための学力を養うため、疫学、研究論、統計学について学習する。			
授業の目的 がん疫学論、臨床研究論、医療統計学を履修し、臨床第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ相試験のデザイン、プロトコルの立案、作成について修得する。(ABC)			
到達目標			
同上			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、講義内容あるいは講義担当教員の出題に解答したものを提出する。このレポート用紙1枚につき最大4点を賦与、学年末に集計して合計を得点とする。学則に従い、60点以上を持って合格とする。なお、単位の認定は共通コア科目を総合して行う。(4単位)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である。 (がん疫学論) 臨床疫学 (臨床研究論) 1. 英語論文の読み方と書き方 2. 原著論文と症例報告の記載法 3. EBM: 情報検索から意思決定まで 4. 自主臨床研究の手続き 5. 臨床試験と薬物動態 6. 研究デザイン1 介入研究 7. 研究デザイン2 コホート研究、症例対照研究 (医学統計学) 1. 統計学基礎 2. 統計学演習1 e-learning 教材については別途案内する。 【自学自習のためのアドバイス】 常に臨床研究について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 教科書講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。 参考書後日通知する。			
オフィスアワー 随時アポイントメントにより質問の時間を設ける。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687590-1) がん専門共通科目 Cancer Specialty Common Subjects	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 4	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 臨床検査、病理、放射線診断学、臓器別がん治療各論、がん緩和治療		
	履修推奨科目		
学習時間 講義90分×30回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 がんのベーシックサイエンス」 ・がんの生物学と遺伝子、がん免疫、がんの病因・疫学・スクリーニング・予防等の基礎科学を履修する。 「がんの臨床薬理学」 ・薬物動態学、薬力学、薬物代謝とクリアランス、pharmacogenomics、抗がん剤の種類と分類、投与量と投与スケジュール、薬剤耐性、効果と毒性の予測について履修する。			
授業の目的 がんのベーシックサイエンス」 ・正常細胞の生物学を理解する。発癌過程を理解する。 ・遺伝子の構造・構成・発現・制御を理解する。 ・細胞周期、腫瘍形成による細胞周期の制御、細胞増殖とのバランスを理解する。 ・腫瘍細胞の動態・増殖・プログラム細胞死・細胞死と細胞増殖とのバランスを理解する。 ・分子技術(PCR法、染色体分析)その他の分子生物学、腫瘍細胞生物学を理解する。 ・腫瘍と宿主の免疫系の関連(腫瘍抗原、免疫を介した腫瘍細胞毒性、サイトカインの作用)を理解する。 ・発がんにおける遺伝子および環			
到達目標			
同上			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、講義内容あるいは講義担当教員の出題に解答したものを提出する。このレポート用紙1枚につき最大4点を賦与、学年末に集計して合計を得点とする。学則に従い、60点以上を持って合格とする。なお、単位の認定はがん専門共通科目を総合して行う。(4単位)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業及び学習の方法:当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である。 授業計画 1. がんのベーシックサイエンス 薬剤部との共同講義 2. がんの発生メカニズム・病態生理 3. がんの疫学 4. 大腸がんの遺伝子変異と検便遺伝子診断 5. 肺がんの遺伝子変異と分子標的薬剤 6. 家族性癌とカウンセリング 7. 「がんの臨床薬理学」薬剤部との共同講義 8. がん薬物療法総論 9. 抗がん剤のPK/PD、臨床薬理 その他e-learning を利用 【自学自習のためのアドバイス】			
教科書・参考書等 教科書講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる 参考書後日通知する。			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

随時アポイントメントにより質問の時間を設ける。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

当該コースの学生の必修科目である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687509-1) 放射線治療法 Radiation Therapy	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 柴田 徹	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義90分×8回+自学自習(準備学習15時間+事後学習15時間)			
授業の概要 指導教員は、放射線治療の対象となる各種悪性腫瘍に関して、放射線治療の適応、目的、方法、技術、線量効果関係、有害事象、治療成績について学生が理解を深められるよう指導する。			
授業の目的 学生は、放射線治療技術(外部照射、小線源治療、重粒子線治療)について体系的に学ぶ。治療の対象となる代表的な悪性腫瘍について実践的な知識を習得する。放射線治療計画ガイドラインに基づき、治療計画の立案を行う。			
到達目標 学生は、放射線治療技術(外部照射、小線源治療、重粒子線治療)について体系的に学ぶ。(DPの「専門知識・理解」に対応) 治療の対象となる代表的な悪性腫瘍について実践的な知識を習得する。(DPの「専門知識・理解」に対応) 放射線治療計画ガイドラインに基づき、治療計画の立案を行う。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 講義への出席、演習、実習を通じて講義実習内容の理解度の把握を行い、総合的に成績評価(実技50%・レポート50%)を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 放射線治療部内の治療設備の紹介、治療計画装置の取り扱い実習を8回行う。 ①脳腫瘍、②頭頸部腫瘍、③肺腫瘍、④乳腺腫瘍、⑤子宮癌、⑥泌尿器腫瘍、⑦消化器腫瘍、⑧悪性リンパ腫などの各種疾患に対する治療計画、治療法の実際、治療成績を網羅した講義、演習を行う。(各疾患当り1コマの講義を行う) 授業及び学習の方法:放射線腫瘍学に関するセミナー形式の講義を行う。演習・実習ではダミー症例を用いて放射線治療計画の立案を行なう。必要に応じてレポート作成・発表を行い、議論を深める。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 準備学習 15時間 + 事後学習 15時間			
教科書・参考書等 教科書参考書放射線治療計画ガイドライン(放射線専門医会編)専門医会のウェブサイトでpdfが入手可能である。			
オフィスアワー 基礎研究棟618号室、放射線治療計画室など、随時アポイントメントにより質問の時間を設ける。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ なし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687511-1) 臨床腫瘍学 Clinical Oncology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 奥山 浩之・辻 晃仁	関連授業科目		
	履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×16回+自学自習 (準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 臨床腫瘍学の全体像についての講義を行う			
授業の目的 臨床医に必要とされる近年多岐にわたる癌腫に対する病態や診断、検査、薬物療法について臓器横断的に学習する。			
到達目標 臨床医に必要な臨床腫瘍学の全体像について理解し説明ができる。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出(100%)で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 第1回 腫瘍学総論 第2回 腫瘍内科学 第3回 がん薬物療法療法① 第4回 がん薬物療法療法② 第5回 がん薬物療法療法③ 第6回 がんのチーム医療 第7回 がんのリハビリテーション 第8回 チーム医療 第9回 バイオマーカーの探索 第10回 Interventional Radiology 第11回 サイコオンコロジー 第12回 Oncology Emergency 第13回 支持療法・緩和医療 第14回 臨床試験 第15回 新薬開発 第16回 医療連携 第17回 ライフステージに応じたがん(小児がん・AYA世代がん・高齢者がん) 授業及び学習の方法:講義中心 【自学自習のためのアドバイス】 常に臨床腫瘍学の全体像を意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 教科書特になし 参考書入門臨床腫瘍学【日本臨床腫瘍学会監修】篠原出版			
オフィスアワー 10:00~16:00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687512-1) 放射線腫瘍学 Radiation Oncology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 柴田 徹	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 指導教員は、放射線治療の基礎となる生物学的知識を深める目的で、講義・演習・実習を行う。			
授業の目的 生体と放射線の物理学的な相互作用、分子損傷とDNA修復、細胞致死効果、酸素効果、細胞周期など分子レベルから細胞レベルまでの生物学的効果について理解する。 悪性腫瘍や正常臓器の放射線感受性、臓器から個体レベルの放射線影響について理解する。			
到達目標 学生は、生体と放射線の物理学的な相互作用、分子損傷とDNA修復、細胞致死効果、酸素効果、細胞周期など分子レベルから細胞レベルまでの生物学的効果について説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 悪性腫瘍や正常臓器の放射線感受性、臓器から個体レベルの放射線影響について説明できる。(DPの「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 発表・議論を通じて講義実習内容の理解度の把握を行い、総合的に成績評価を行う。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画 (1) 放射線の種類(X線、電子線、粒子線など)、物理的相互作用 (2) 放射線によるDNA損傷と修復機構の分子メカニズム (3) 細胞周期、低酸素、回復、再増殖現象等の線量修飾因子 (4) 腫瘍の放射線感受性 (5) 正常組織の急性反応、晩期反応 以上の各主題を網羅した、講義、実習、演習を行う。 全15回の講義により(3コマ)以下の項目をカバーする。 授業及び学習の方法:放射線生物学に関するセミナー形式の講義を行う。必要に応じてレポート作成・発表を行い、議論を深める。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】 準備学習 30時間 + 事後学習 30時間			
教科書・参考書等 参考書放射線基礎医学 第12版(編著:青山喬)金芳堂 ISBN4-7653-1559-2			
オフィスアワー 基礎研究棟618号室、放射線治療科計画室など、随時アポイントメントにより質問の時間を設ける。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ なし			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lg 授業科目名 (講義コード:L687203-2) 医用化学特論 Advanced Chemistry for Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lg	単位数 4	
担当教員名 和田 健司	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(準備学習 60時間 + 事後学習 60時間)			
授業の概要 生命現象を司る種々の有機化学反応の機構を的確に理解し、最新の有機化学の理論と実践を学ぶため、最新の有機化学、有機金属化学、および生命現象の解明において重要な役割を果たしている最新の分析化学と関連する諸分野に関する講義を実施し、種々の分析機器を活用した測定および解析手法に関する実習を行う。			
授業の目的 医学研究の基盤となる、生命現象に関わる多様な物質およびその反応について、有機化学の視点から系統的に理解できるようになる。また、医学研究を活用されている様々な科学的分析手段について、基礎的な理論および実践について系統的に理解できるようになる。			
到達目標 1 生命現象に関する主な有機化学反応の機構を説明できる。 2 有機化合物の主な官能基変換反応・基本骨格構築・変換反応の概略を説明し応用できる。 3 効率的な有機合成反応を可能にする均一系および不均一系触媒の機能を説明できる。 4 有機金属化合物の基本的な物性と反応性を説明できる。 5 有機化学や生命科学で用いられる基本的な分光分析法およびクロマトグラフィー等の原理を説明できる。 6 これらの分析法によって得られたデータを正確に解釈できる。 (いずれもDP「専門知識・理解」、「研究能力・応用力」に対応)			
成績評価の方法 試験は実施しない。口頭試問30%、演習課題30%およびレポート40%によって評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 第 1 回～第 4 回 生命現象に関連する有機化学反応機構 (各回の講義事項: 概説・糖にかかわる有機化学・資質にかかわる有機化学・アミノ酸等にかかわる有機化学) 第 5 回～第 9 回 有機化学における諸反応 (各回の講義事項: アルコール・カルボニル化合物・ハロゲン化合物・カルボン酸とその誘導体・アミン) 第 10 回 有機金属化合物の構造と機能、反応性 第 11 回～第 13 回 均一系および不均一系触媒化学とその応用 (各回の講義事項: 有機金属錯体・均一系触媒反応・不均一系触媒反応) 第 14 回 有機化学に関する最近の話題 第 15 回 中間まとめ 第 16 回 分析化学総論および基本的な化学分析法 第 17 回 質量分析 第 18 回～第 19 回 紫外光および可視光を活用した分光分析 (各回の講義・実習事項: 概説・定量分析) 第 20 回～第 21 回 近赤外光および赤外光を活用した分光分析 (各回の講義・実習事項: 赤外分光・近赤外分光) 第 22 回～第 23 回 核磁気共鳴分析および電子スピン共鳴分析 (各回の講義・実習事項: 核磁気共鳴・電子スピン共鳴) 第 24 回 クロマトグラフィー 第 25 回～第 26 回 X線を活用した分光分析 (各回の講義・実習事項: X線回折・X線光電子分光) 第 27 回 電子線を活用した分光分析 第 28 回～第 29 回 分析化学に関する最近の話題 (各回の講義・実習事項: 放射光の利用・その場分析) 第 30 回 総合まとめ 授業及び学習の方法			

2026 医学系研究科

講義に加えて、英語書籍・文献の講読演習、グループディスカッション、解析演習、および各自の研究課題に応じた測定実習等を実施する。本科目は基本的に対面授業を行うが、状況に応じて授業形態を全てあるいは一部遠隔（オンデマンド含む）へ変更する場合がある。受講生の学修経験に応じて基礎的な、あるいは実践的な講義・実習内容に変えて実施する場合がある。なお、各回の講義・実習の進捗状況に応じて割り当てられた講義等の順序や内容を変更する場合がある。

【準備学修及び事後学修のためのアドバイス】

自学自習（準備学習 60時間 + 事後学習 60時間）

教科書・参考書等

教科書 必要に応じてプリント、オンライン資料等を配布する。

参考書 講義中に適宜指示する。

野依良治ほか著、大学院有機化学（1）、（2）、および演習編 東京化学同人

野依良治ほか監訳、ウォーレン有機化学（上）、および（下） 東京化学同人

Robert H. Crabtree 著、The Organometallic Chemistry of the Transition Metals、Wiley

シルバーシュタイン他著、有機化合物のスペクトルによる同定法—MS, IR, NMRの併用 第7版 東京化学同人

デ

オフィスアワー

月曜日1講目、ただしアポイントを取る場合は随時面談する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

必要に応じて講義の全てあるいは一部を英語で行う場合がある。

If necessary, all or part of the lectures may be given in English.

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687501-1) 研究方法論応用 Research Methodologies	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 1	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 悪性腫瘍の管理と治療、医療倫理学・医療経済学、医療対話学、がんチーム医療実習、医療情報学（腫瘍学における情報システム）		
	履修推奨科目		
学習時間 e-learning教材90分×8回 自学自習：準備時間15時間+事後学習15時間			
授業の概要 がん疫学論 ヒト（人間）を対象として研究を実施する場合には、論理的な制約などから、曝露の無作為割り付け等を伴う介入研究ではなく、観察研究により仮説を検証する必要に迫られることが少なくない。このような研究仮説を検証する際に疫学・統計学の基礎的知識は必須である。本講義では、主として観察研究デザインについて授業を行うが、臨床医でも関心を持てるよう臨床試験についても言及する。 臨床研究論 講義においては、履修生の職種を問わず、臨床研究・疫学実践論の基礎として共通する基本的事項あるいは事例について履修し、職種あるいは専門領域間における認識の共通化を図る。また、臨床研究のデータマネジメントや研究倫理についても授業を行う。加えて外部講師から、生物統計学の最新知識を得る。臨床研究の計画書類作成プロセスも学ぶ。講義で得た知識・方法を実践し、「研究力」を高めるためさらに文献検索のスキルアップも行う。			
授業の目的 がん疫学論 ヒトを対象とした研究方法について学び、単純な実験デザイン以外で、いかにして因果関係に迫るかを理解する。 臨床研究論 講義とグループワークを通じて、履修生それぞれが持っている臨床研究のテーマについて、研究デザインからデータ解析までのスキームを具体的に作成できることを目指す。 医療統計学 研究方法における統計学の役割を学ぶとともに、実際の統計手法のうち、学術論文を執筆する際に必要となるデータ解析を自ら実施し、その結果を適切に解釈できるようになる。			
到達目標 がん疫学論 疫学研究・医学研究を行う上での基礎的知識・スキルを身につけ、学術論文を執筆する際に必要となるデータ解析を自ら実施し、その結果を適切に解釈できる。論文の批判的吟味（critical appraisal）に必要なスキルを身につけることができる。（DPの「専門知識・理解」に対応） 臨床研究論 医学研究の進め方、予防医学の実践の仕方を実例を通して学び、自身の研究展開に応用できる力を身につけることができる。（DPの「専門知識・理解」に対応） 医療統計学 疫学研究・医学研究を行う上での基礎的知識・スキルを身につけ、学術論文を執筆する際に必要となるデータ解析を自ら実施し、その結果を適切に解釈できる。論文の批判的吟味（critical appraisal）に必要なスキルを身につけることができる。（DPの「専門知識・理解」に対応）			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出（100％）で評価する。なお、単位の認定は共通コア科目を総合して行う（4単位）			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目（8コマ以上選択）である。この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。香川大学が配信しているe-learning教材は以下の通りである。 （がん疫学論）			

2026 医学系研究科

香川大学の配信なし

(臨床研究論)

- ・ e-learning 「英語論文の読み方、書き方」 田港朝彦
- ・ e-learning 「原著論文と症例報告の記載法」 消化器・神経内科学 正木勉
(医学統計学)
- ・ e-learning 「生物統計学」 衛生学 宮武伸行

【授業及び学習の方法】

他大学が配信しているe-learningの教材を含めて8コマ以上を選択し受講する。

【自学自習のためのアドバイス】

研究方法論について常に意識しながら日常生活を過ごす。

教科書・参考書等

講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。

オフィスアワー

10：00～16：00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

当該コースの学生の必修科目である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687502-1) 悪性腫瘍の管理と治療 Research Methodologies	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 1	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 がん疫学論、臨床研究論、医療統計学、医療倫理学・医療経済学、医療対話学、がんチーム医療実習、医療情報学（腫瘍学における情報システム）		
履修推奨科目			
学習時間 e-learning教材90分×8回 自学自習（準備時間15時間+事後学習15時間）			
授業の概要 教員は、履修生の職種を問わず、臨床腫瘍学の基礎として共通するがんの診断、治療および管理法について講義し、職種間の共通理解の形成を図る。			
授業の目的 ・手術療法、放射線療法、化学療法、内分泌療法、分子標的治療、遺伝子治療、幹細胞移植と骨髄移植、Oncologic emergency、腫瘍随伴症候群について履修する。 ・感染症やその他の合併症、疼痛・消化器症状・精神神経症状、輸血療法と造血因子、終末期ケアと在宅緩和医療、代替医療について履修する。 ・がんと加齢の問題、患者の評価、高齢者のがんと心理社会的問題について履修する。 ・心理社会的サポート、がんの診断・治療に伴う精神的葛藤、がんへの対処における適応行動と不適応行動、向精神薬の適応、医療従事者自身の			
到達目標 ・がん診断・治療および患者管理に関する基礎的な事項の知識を得ることが出来る。（DPの「専門知識・理解」に対応）			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出（100％）で評価する。なお、単位の認定は共通コア科目を総合して行う。（4単位）			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 1. 検査法 10. がんに関する救急対応 2. 画像診断 11. 腫瘍随伴症候群、合併症管理 3. 病理診断 12. 輸血療法、生物製剤 4. 手術療法 13. 老年病学 5. 放射線療法 14. 緩和医療と支持療法 6. 化学療法・分子標的薬 15. がん性疼痛 7. 免疫療法 16. サイコオンコロジー 8. 遺伝子治療 17. 終末期ケアと在宅緩和医療 9. 造血器幹細胞移植 18. リハビリテーション e-learning 教材については別途案内する。 【自学自習のためのアドバイス】 悪性腫瘍の管理・治療について常に意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。			
オフィスアワー 10:00～16:00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687503-1) 医療倫理学・医療経済学 Medical Ethics / Health care economics	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 0.5	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 研究方法論応用、悪性腫瘍の管理と治療、医療対話学、がんチーム医療実習、医療情報学（腫瘍学における情報システム） 履修推奨科目		
学習時間 e-learning教材90分×4回 自学自習（準備学習7.5時間+事後学習7.5時間）			
授業の概要 履修生の職種を問わず、臨床腫瘍学の基礎として共通する医療倫理、法律的問題、社会的・経済的問題について履修する。がんの医療と臨床研究の遂行に必要な医療倫理、法律問題社会・経済的問題について内容を理解し、自らの臨床・研究に活かせるよう解説する。			
授業の目的 がん患者に関してどのような倫理的及び法的問題があるかを理解する。			
到達目標 ・がん患者に接する際に、倫理的及び法的視点から適切に判断し、行動する能力を養うことが出来る。（DPの「専門知識・理解」に対応）			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出（100％）で評価する。なお、単位の認定は共通コア科目を総合して行う。（4単位）			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 1. 生命倫理とは何か 2. 医学・医療と患者の人権 3. 安楽死・尊厳死をめぐる法と倫理 4. 遺伝子診断・治療と倫理 5. 患者の自己決定権とインフォームドコンセント 6. 研究推進と利益相反 7. 医療経済学 8. がんの医療経済学（2） e-learning 教材については別途案内する。 【自学自習のためのアドバイス】 常に医療倫理・医療経済について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。			
オフィスアワー 10：00～16：00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Eg 授業科目名 (講義コード:L687504-1) がんチーム医療実習 Team Medicine Practice of Cancer chemotherapy	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Eg	単位数 0.5	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 研究方法論応用、悪性腫瘍の管理と治療、医療倫理学・医療経済学、医療対話学、医療情報学(腫瘍学における情報システム)		
	履修推奨科目		
学習時間 学習時間:90分×4回 自学自習(準備学習7.5時間+事後学習7.5時間)			
授業の概要 医師・薬剤師・看護師チームによるがん治療および緩和ケア、在宅緩和医療について講義・演習・実習を行う。この授業はチーム医療合同演習を読み替え対応する。			
授業の目的 ・医師・薬剤師・看護師チームによるがん治療および緩和ケア、在宅緩和医療について講義・演習・実習を行い、各職種の役割を理解する。			
到達目標 他職種でがん治療に係り合い、チーム医療を実践する必要性を理解し、医療チームの中で、適切に活動できることを目標とする。 行動目標としては ・他職種の役割が理解でき、尊重できる。患者を中心として他職種との意見を交換することが出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応) ・専門職として他職種にアドバイスができる。また、チームとして行動することが出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 チーム医療合同演習を読み替え対応する。チーム医療合同演習に参加することで、修得必修の授業コマ数である4コマ相当として認定する。演習の受講状況(ディスカッション、質疑応答の積極性等)(80%)および演習後報告の提出(20%)で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である、この講義は遠隔授業であり、受講の詳細は別途周知する。 1. チーム医療概論 2. チーム医療演習 3. チーム医療実習がんボード実習 4. チーム医療実習緩和ケアチーム実習 【自学自習のためのアドバイス】 常にチーム医療について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。			
オフィスアワー 10:00~16:00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687505-1) 医療情報学(腫瘍学における情報システム) Medical Informatics(Information Systems in Oncology)	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 0.5	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 研究方法論応用、悪性腫瘍の管理と治療、医療倫理学・医療経済学、医療対話学、がんチーム医療実習		
	履修推奨科目		
学習時間 e-learning教材90分×4回 自学自習(準備学習7.5時間+事後学習7.5時間)			
授業の概要 がん診療にあたるプロフェッショナルとして必要な医学情報の全体像の理解から、その利用法までを概説する。			
授業の目的 講義をもとに、実習形式で臨床業務や研究計画立案に必要な検索法を実践できる。			
到達目標 ・医療情報の重要性、5Sモデル、種類・分類法について理解することが出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応) ・必要な医療情報を検索し、選別するための戦略を理解することが出来る(DPの「専門知識・理解」に対応) ・医療情報の検索、オンラインデータベースの利用法を身につけることが出来る(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出(100%)で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である。この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。香川大学が配信しているe-learning教材は以下のとおりである。 ・香川大学の配信なし 【授業及び学習の方法】 他大学が配信しているe-learning教材を含めて4コマ以上を選択し受講する。 【自学自習のためのアドバイス】 常に医療情報について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。			
オフィスアワー 10:00~16:00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687506-1) がんのベーシックサイエンス、臨床薬理学 Basic Science of Cancer, Clinical Pharmacology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 1	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 臨床検査、病理、放射線診断学、臓器別がん治療各論、 がん緩和治療 履修推奨科目		
学習時間 e-learning教材90分×8回 自学自習(準備時間15時間+事後学習15時間)			
授業の概要 「がんのベーシックサイエンス」 ・がんの生物学と遺伝子、がん免疫、がんの病因・疫学・スクリーニング・予防等の基礎科学についての授業を行う。 「がんの臨床薬理学」 ・薬物動態学、薬力学、薬物代謝とクリアランス、pharmacogenomics、抗がん剤の種類と分類、投与量と投与スケジュール、薬剤耐性、効果と毒性の予測について授業を行う。			
授業の目的 「がんのベーシックサイエンス」 ・正常細胞の生物学を理解する。発癌過程を理解する。 ・遺伝子の構造・構成・発現・制御を理解する。 ・細胞周期、腫瘍形成による細胞周期の制御、細胞増殖とのバランスを理解する。 ・腫瘍細胞の動態・増殖・プログラム細胞死・細胞死と細胞増殖とのバランスを理解する。 ・分子技術（PCR法、染色体分析）その他の分子生物学、腫瘍細胞生物学を理解する。 ・腫瘍と宿主の免疫系の関連（腫瘍抗原、免疫を介した腫瘍細胞毒性、サイトカインの作用）を理解する。 ・発がんにおける遺伝子および環境因子の病			
到達目標 到達目標 ・がんの発症に関する全般的な基礎知識を習得し、臨床技術の基盤を構築することができる。（DPの「専門知識・理解」に対応） ・がんの診断、検査、治療などの方法の基礎と応用について、実践的な理解を深め、特に臨床薬理学の最先端知識を習得することが出来る。（DPの「専門知識・理解」に対応）			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出（100％）で評価する。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目（8コマ以上選択）である。この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。香川大学が配信しているe-learningは以下のとおりである。 e-learning「高齢者の臓器機能（心臓と腎臓）」循環器内科 野間貴久 腎臓内科 西島陽子 e-learning「高齢者の放射線治療」放射線治療科 柴田徹 【授業及び学習の方法】 他大学が配信しているe-learning教材を含めて8コマ以上を選択し受講する。 【自学自習のためのアドバイス】 常にがんの基礎的科学的、薬理学について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる			
オフィスアワー 10：00～16：00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ			

2026 医学系研究科

当該コースの学生の必修科目である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687507-1) 臨床検査、病理、放射線診断学 Laboratory Medicine, Pathology, Diagnostic Radiology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 0.5	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 がんのベーシックサイエンス、臨床薬理学、臓器別がん治療各論、がん緩和治療 履修推奨科目		
学習時間 e-learning教材90分×4回 自学自習(準備学習7.5時間+事後学習7.5時間)			
授業の概要 「がんの臨床検査」 ・がんの診療や研究に必要な臨床検査項目について授業する。 「がんの病理」 ・がんの診療や研究に必要な病理学的知識について授業する。 「がんの放射線診断学」 ・staging および follow-up のための画像診断、腫瘍計測、ならびに治療効果判定について授業する。			
授業の目的 「がんの臨床検査」 1. 各がん腫の発がんに伴う臨床検査の変動を理解する。 2. 適切な腫瘍マーカーの選択ならびに検査時期を理解する。 3. がんスクリーニング、ならびにフォローアップ時における臨床検査の意義を理解する。 「がんの病理」 1. がんの確定診断が細胞診ならびに生検により行われることを理解する。 2. 病理診断ががん患者の病期分類や治療にどのように用いられるのかを理解する。 3. 病理手技(細胞診、針吸引細胞診、生検)や標本の取り扱い(免疫染色法、染色体分析、PCR法、フローサイトメーター等)を理解する。			
到達目標 ・がんの病理学的側面、分子病理学的知見を理解することが出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出(100%)で評価する。なお、単位の認定はがん専門共通科目を総合して行う。(4単位)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である、この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。 【授業及び学習の方法】 他大学が配信しているe-learning教材を含めて4コマ以上を選択し受講する。 【自学自習のためのアドバイス】 常にがんの検査・病理・放射線診断について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。			
オフィスアワー 10:00~16:00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687508-1) 臓器別がん治療各論 Organ Specific Cancer Treatment	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 2	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 がんのベーシックサイエンス、臨床薬理学、臨床検査、病理、放射線診断学、がん緩和治療		
履修推奨科目			
学習時間 e-learning90分×16回 自学自習(準備学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 1. 脳腫瘍の各論 脳腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 2. 頭頸部腫瘍の各論 頭頸部腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 3. 胸部腫瘍の各論 胸部腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 4. 造血器腫瘍の各論 造血器腫瘍の内科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 5. 消化器腫瘍の各論① 食道がん、胃がん、大腸・直腸がんの内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 6. 消化器腫瘍の各論② 胆嚢がん、胆道がん、膵臓がんの内科的・外科的、ならびに集学的治療について授業する。 7. 消化器腫瘍の各論③ 肝臓がんの内科的・外科的、ならびに集学的治療について授業する。 8. 乳腺腫瘍の各論 乳腺腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 9. 内分泌腫瘍(甲状腺がんを含む)の各論 内分泌腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 10. 泌尿器科腫瘍の各論 泌尿器科腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 11. 婦人科腫瘍の各論 婦人科腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 12. 骨軟部腫瘍の各論 骨軟部腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 13. 皮膚腫瘍の各論 皮膚腫瘍の内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 14. 原発不明がんの各論 原発不明がんの内科的・外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。 15. 口腔領域のがんの特徴と治療 口腔領域の外科的・放射線治療、ならびに集学的治療について授業する。			
授業の目的 1. 脳腫瘍の各論 ① 疫学、罹患率、死亡率を理解する。 ② 病因、病理、および腫瘍生物学を理解する。 ③ 臨床症状と徴候、ならびに診断に至る画像診断・生検法を理解する。 ④ 病期分類と予後因子を理解する。 ⑤ 原発性および転移性脳腫瘍の違いと治療法を理解する。 ⑥ 治療法(放射線療法、手術療法、ガンマーナイフ)を理解する。 ⑦ 治療後のフォローアップを理解する。 ⑧ 支持療法・緩和療法を理解する。 2. 頭頸部腫瘍の各論 ① 疫学、罹患率、死亡率を理解する。 ② 病因、病理、および腫瘍生物学を理解する。 ③			
到達目標 ・各領域のがん治療の考え方、基本となる治療法及び周辺分野について必要となる知識を得ることが出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出(100%)で評価する。なお、単位の認定はがん専門共通科目を総合して行う。(4単位)			

成績評価の基準

成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。

秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。

優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。

良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。

可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。

不可（60点未満）到達目標を達成していない。

ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。

合格又は了 到達目標を達成している。

不合格 到達目標を達成していない。

授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス

当該コースの学生の必修科目（8コマ以上選択）である、この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。香川大学が配信しているe-learning教材は以下のとおりである。

・香川大学の配信なし

【授業及び学習の方法】

他大学が配信しているe-learning教材を含めて16コマ以上を選択し受講する。

【自学自習のためのアドバイス】

常に各臓器の治療法について意識しながら日常生活を過ごす。

教科書・参考書等

講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。

オフィスアワー

10：00～16：00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

当該コースの学生の必修科目である。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687510-1) がん緩和治療 Cancer palliative therapy	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 0.5	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 がんのベーシックサイエンス、臨床薬理学、臨床検査、病理、放射線診断学、臓器別がん治療各論		
	履修推奨科目		
学習時間 e-learning90分×4回 自学自習(準備学習7.5時間+事後学習7.5時間)			
授業の概要 緩和医療の定義、概念、基本姿勢を学び緩和医療の方法論についての知識を深めることができるように概説する。			
授業の目的 1. 緩和医療の目的、概念を理解している。 2. 患者の苦痛を全人的苦痛として理解し適切な治療が行える。 3. 緩和ケアや終末期ケアをどのように実施するかを知っている。 4. チームとして緩和医療を行うことができる。			
到達目標 ・緩和医療の定義と概念を述べる事が出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応) ・オピオイドの作用と副作用を言う事が出来る。(DPの「専門知識・理解」に対応)			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出(100%)で評価する。なお、単位の認定はがん専門共通科目を総合して行う。(4単位)			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目(8コマ以上選択)である、この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。 【授業及び学習の方法】 他大学が配信しているe-learning教材を含めて4コマ以上を選択し受講する。 【自学自習のためのアドバイス】 常に緩和治療について意識しながら日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。			
オフィスアワー 10:00~16:00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Le 授業科目名 (講義コード:L687513-1) 医療対話学 Medical Communication	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Le	単位数 0.5	
担当教員名 辻 晃仁	関連授業科目 研究方法論応用、悪性腫瘍の管理と治療、医療倫理学・医療経済学、がんチーム医療実習、医療情報学（腫瘍学における情報システム） 履修推奨科目		
学習時間 e-learning教材90分×4回 自学自習（準備学習7.5時間+事後学習7.5時間）			
授業の概要 がんという病をもって生きる人とその家族は生老病死に関わる悩みを体験している。医療者としてコミュニケーションをとり、対話関係を築き、患者とその家族の自己実現課程を支えていけるよう概説する。			
授業の目的 がん患者・家族の抱える様々な痛みに対して行う共感について様々なアプローチを学ぶ。すなわち、身体・心理・社会・実在的レベルの痛みの成り立ちについて学び、具体的な対話法の実際について学ぶ。			
到達目標 がん患者・家族の抱える様々な痛みに対して行う共感について様々なアプローチを修得することが出来る。（DPの「専門知識・理解」に対応）			
成績評価の方法 講義の終わりに毎回レポート用紙を配布、レポート提出（100％）で評価する。なお、単位の認定は共通コア科目を総合して行う。（4単位）			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀（90点以上100点まで）到達目標を極めて高い水準で達成している。 優（80点以上90点未満）到達目標を高い水準で達成している。 良（70点以上80点未満）到達目標を標準的な水準で達成している。 可（60点以上70点未満）到達目標を最低限の水準で達成している。 不可（60点未満）到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 当該コースの学生の必修科目（8コマ以上選択）である、この講義は遠隔授業であり、e-learningを受講する。受講の詳細は別途周知する。香川大学が配信しているe-learning教材は以下のとおりである。 ・香川大学の配信なし 【授業及び学習の方法】 他大学が配信しているe-learning教材を含めて4コマ以上を選択し受講する。 【自学自習のためのアドバイス】 常にチーム医療・患者との対話について意識しながらに日常生活を過ごす。			
教科書・参考書等 講義の際に関連文献の紹介を行う。また e-learning 教材は「中国・四国広域がんプロ養成プログラム」コンソーシアムのホームページからダウンロードできる。			
オフィスアワー 10：00～16：00に臨床腫瘍学医局もしくは事務室にてアポイントメントを取得。日時調整のうえ質問の時間を設ける。その後も対応が必要な場合はその際に日時を調整する。			
履修上の注意・担当教員からのメッセージ 当該コースの学生の必修科目である。			
教員の実務経験との関連			

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABCM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687194-2) 再生医学特論 Regenerative medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABC・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 2	
担当教員名 味八木 茂	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(事前学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 本講義では、幹細胞・前駆細胞研究、組織再生機構、細胞運命制御、バイオマテリアル、遺伝子・細胞治療など、再生医学の最先端分野における最新の研究成果と課題を学ぶ。基礎研究から臨床応用への橋渡し(トランスレーショナルリサーチ)に重点を置き、再生医学研究の意義、方法論、研究デザインの考え方を理解する。さらに、原著論文の講読やディスカッションを通じて、再生医学研究に必要な研究思考力と批判的読解力を養う。これにより、再生医学分野において自立した研究を遂行できる研究者の育成を目指す。			
授業の目的 再生医学研究の基盤となる理論および研究手法を理解し、幹細胞・前駆細胞、組織再生機構、細胞制御技術などに関する先端的研究を主体的に理解・評価できる能力を修得することを目的とする。加えて、研究課題の設定から実験計画の立案に至るまで、再生医学研究を自ら計画し、遂行するための基礎的能力を身につけ、将来、医学・医療の発展に貢献し得る研究者の育成を目指す。基礎研究から疾患治療への応用に至るまでの研究を俯瞰し、再生医学研究の学術的背景、意義、課題を理解する。			
到達目標 本講義の修了時に、受講者は以下を達成することを目標とする。 1. 再生医学分野における主要な研究テーマと最新の研究動向および倫理的課題を説明できる。(ABC) 2. 幹細胞・組織再生研究に用いられる代表的研究手法の原理と特徴を理解し、適切に選択できる。(AB) 3. 再生医学研究における研究課題および仮説を自ら設定できる。(AB) 4. 実験計画を立案し、研究の進め方や課題点を論理的に説明できる。(AB) 5. 研究成果を科学的に考察し、口頭発表や討論を通じて発信できる。(AB)			
成績評価の方法 授業への取り組み姿勢(40%)、レポート・発表等(60%)による総合的判定。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 第1回 オリエンテーション：再生医学の全体像 第2回 幹細胞生物学・生殖医学の基礎と最新動向 第3回 前駆細胞・細胞系譜と再生 第4回 組織再生機構と細胞運命制御 第5回 運動器などの再生医学 第6回 疾患モデルを用いた再生研究 第7回 in vivo 再生研究手法と動物モデル 第8回 オミクス解析(scRNA-seq等)と再生医学 第9回 バイオマテリアルと組織工学 第10回 遺伝子治療・細胞治療の基礎と応用 第11回 トランスレーショナルリサーチと臨床展開 第12回 研究倫理・再現性・安全性 第13回 研究計画の立案方法 第14回 受講者による研究計画発表 第15回 総括：再生医学の将来展望 【授業及び学習の方法】 この科目は原則、講義、原著論文の講読、ディスカッション、研究計画立案および発表などによる対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を変更する可能性があります。 【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】			

2026 医学系研究科

各回の関連する内容の著書、論文を自分で探し、読む。(30時間)

興味のある課題や自分の研究テーマに関連する内容について、自分で発表するための準備をする。(30時間)

教科書・参考書等

特になし

オフィスアワー

基礎臨床研究棟5階 組織細胞生物学研究室。毎週水曜日の12時から13時を基本とし、メールで事前にアポイントメントを取ってください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

細胞生物学・分子生物学の基礎知識を有していることが望ましい。

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687302-2) 運動器研究演習 Musculoskeletal research	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 2	
担当教員名 味八木 茂	関連授業科目 組織・分子細胞生物学		
	履修推奨科目 再生医学特論		
学習時間 講義・演習90分×15回+自学自習(事前学習30時間+事後学習30時間)			
授業の概要 本講義では、運動器(骨・軟骨・筋・腱・靭帯など)研究に関する最新の知識および研究動向を体系的に学ぶとともに、運動器研究の学術的意義、研究手法、研究の進め方について理解を深める。さらに、運動器研究を自ら立案し、計画的に遂行するために必要な基礎的技術および研究思考力を修得することを目的とする。本講義を通じて、独創的な研究を進展させ、医学・医療の発展に寄与し得る研究者の育成を目指す。			
授業の目的 運動器研究の基盤となる理論および研究手法を理解し、骨・軟骨・筋・腱・靭帯などの運動器組織における再生・修復機構を分子・細胞・組織レベルで統合的に理解できる能力を修得することを目的とする。さらに、研究課題の設定、仮説構築、実験計画立案から結果解釈に至るまで、運動器再生研究を主体的に立案・遂行するための研究遂行能力を養成する。			
到達目標 本講義の修了時に、受講者は以下を達成することを目標とする。 運動器研究に関する最新の研究動向と主要な研究課題を説明できる。(AB) 研究背景を踏まえ、独自の研究課題・仮説を設定できる。(AB) 実験計画を立案し、研究の進め方・問題点を論理的に説明できる。(AB) 運動器研究の代表的研究手法(in vivo / in vitro / omics 解析等)を理解し、適切に選択・解析することができる。(AB) 得られた結果を基に、科学的に考察し、発表・議論できる。(AB) (DPの「専門知識・理解」及びに対応)			
成績評価の方法 授業への取り組み姿勢(40%)、レポート・発表等(60%)による総合的判定。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 第1回 オリエンテーション：運動器研究の意義と全体像 第2回 運動器の発生・構造・恒常性維持の分子基盤 第3回 骨・軟骨研究の最新動向 第4回 筋・腱・靭帯研究の最新動向 第5回 老化・疾患(変形性関節症など)と運動器研究 第6回 遺伝子改変動物モデルを用いた運動器研究 第7回 細胞生物学的手法(培養、分化、系譜追跡) 第8回 オミクス解析(scRNA-seq等)とデータ解釈 第9回 画像解析・組織学的評価の基礎と応用 第10回 トランスレーショナル研究と臨床応用 第11回 研究倫理・再現性・データの信頼性 第12回 研究計画の立案方法(仮説・Aim設定) 第13回 受講者による研究計画発表① 第14回 受講者による研究計画発表②・討論 第15回 総括：運動器研究の将来展望 【授業及び学習の方法】 この科目は原則、PowerPointを使った対面授業を行います。なお状況によっては授業形態を変更する可能性があります			

2026 医学系研究科

ます。少人数の場合は、セミナー形式で行います。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

各回の関連する内容の著書、論文を自分で探し、読む。(15時間)

興味のある課題や自分の研究テーマに関連する内容について、自分で発表するための準備をする。(15時間)

教科書・参考書等

教科書なし

オフィスアワー

基礎臨床研究棟5階 組織細胞生物学研究室。毎週水曜日の12時から13時を基本とし、メールで事前にアポイントメントを取ってください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

なし

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Mx 授業科目名 (講義コード:L687193-2) 組織・分子細胞生物学 Histology and molecular cell biology	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Mx	単位数 4	
担当教員名 味八木 茂, 江上 洋平	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分×30回+自学自習(事前学習60時間+事後学習60時間)			
授業の概要 形態学研究のストラテジーとして組織細胞化学染色の原理と応用、バイオイメージング技術の理論と実際について解説する。最新の技術として、GFPなど蛍光タンパク質や蛍光色素を用いたライブイメージング法のメリットや蛍光画像の画像演算、画像解析、及びそれらのデータのプレゼンテーション方法を説明する。			
授業の目的 細胞組織の微細構造と機能との関連を理解する。 細胞組織に関する知識を形態学的研究に応用する能力を習得する。 バイオイメージング、組織化学染色法、顕微鏡などの基礎的理論を理解し、研究に応用できる能力を習得する。画像演算、画像処理、動画解析、画像定量化などの解析方法を理解し、研究に応用できる能力を習得する。(AB)			
到達目標 1. 組織細胞化学の基本的な手技を説明できる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 2. バイオイメージングの技法と装置について説明することができる。(DPの「専門知識・理解」に対応) 3. 形態学研究のストラテジーを立てることができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応) 4. 生体機能を可視化するバイオイメージングが実際の研究でどのように使えるかを考察することができる。(DPの「研究能力・応用力」に対応) 5. 組織標本・培養細胞などを顕微鏡やイメージング技術を用いた研究結果をプレゼンテーションすることができる。(DPの「グローバルマインド」に対応)			
成績評価の方法 授業への取り組み姿勢(40%)、レポート・発表等(60%)による総合的判定。			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀(90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優(80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良(70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可(60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可(60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 【授業計画】 (1) 形態学研究のストラテジー (2) 組織細胞化学とは (3) 組織細胞化学の実践 (4) 組織化学染色技法 蛍光抗体 (5) 組織化学染色技法 その他 (6) 顕微鏡の種類と原理 (7) 顕微鏡技術の進歩 (8) バイオイメージングとは (9) バイオイメージング技法：装置 (10) バイオイメージング技法：GFP融合蛋白 (11) 画像演算と画像処理：レシオ画像 (12) 画像演算と画像処理：定量 (13) 動画解析 (14) プレゼンテーション方法の基礎 (15) プレゼンテーション方法の発展 (16) ライブセルイメージング基本 (17) ライブセルイメージング応用 (18) ライブセルイメージング事例 (19) 透過型電子顕微鏡観察の原理			

2026 医学系研究科

- (20) 透過型電子顕微鏡観察の実践
- (21) 走査型電子顕微鏡観察の原理
- (22) 走査型電子顕微鏡観察の実践
- (23) イメージングソフトの種類や特徴
- (24) イメージングソフトによる画像処理
- (25) イメージングソフトによる画像演算実践
- (26) イメージングソフトによる画像演算応用
- (27) 画像定量化と解析基本
- (28) 画像定量化と解析応用
- (29) 動画作成法
- (30) 動画作成編集と圧縮

【授業及び学習の方法】

この科目は原則、PowerPointを使った対面授業と実習を行います。なお状況によっては授業形態を変更する可能性があります。

【準備学習及び事後学習のためのアドバイス】

各回の関連する内容の著書、論文を自分で探し、読む。(30時間)

興味のある課題や自分の研究テーマに関連する内容について、自分で発表するための準備をする。(30時間)

教科書・参考書等

教科書は特になし

参考書:顕微鏡の使い方ノート 野島 博 羊土社

GFPとバイオイメージング 宮脇 敦史 羊土社

発表・討議のテーマに応じて資料を用意する

オフィスアワー

基礎臨床研究棟5階 組織細胞生物学研究室。毎週水曜日の12時から13時を基本とし、メールで事前にアポイントメントを取ってください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

特になし

教員の実務経験との関連

2026 医学系研究科

ナンバリングコード D3MED-ABXM-40-Lx 授業科目名 (講義コード:L687221-1) 遺伝医療 Genetic Medicine	科目区分 専門科目	時間割 通年集中 その他 集中	対象年次及び学科 1年次 医学専攻
	水準・分野 D3・MED	DP・提供部局 ABX・M	対象学生・特定プログラムとの対応 40
	授業形態 Lx	単位数 1	
担当教員名 隈元 謙介, 早田 正和	関連授業科目 履修推奨科目		
学習時間 講義・演習90分 × 8回 + 準備学習15時間+事後学習15時間			
授業の概要 分子遺伝学は、遺伝現象を分子レベルで理解し、遺伝情報の流れやその発現制御機構を中心に生命現象を扱う学問である。 主にヒトの遺伝情報についての基本的な知識、伝達様式、遺伝的変異についての解説する。 また疾患遺伝子の探索方法などの解析方法について紹介を行う。			
授業の目的 近年の遺伝子解析技術の目覚ましい発展により、医療の分野においても先天性疾患や遺伝性疾患はもちろんのこと様々な疾患の原因やその病態の解明において遺伝子の変異や発現異常が深く関与していることがわかってきた。今後ゲノム医療や遺伝医療も臨床において重要な領域となる。 本講義は、様々な遺伝子が関与する疾患や治療を理解するための基礎的知識を習得することを目的とし、遺伝情報およびその伝達の機構、遺伝的変異、遺伝情報の変化、疾患遺伝子の探索方法などについて学習する。 また、遺伝子関連検査が増加する中で、ゲノムデータおよ			
到達目標 1) 遺伝情報およびその伝達の仕組みを理解することができる。 2) 遺伝情報と表現型の関係を理解する。 3) 細胞分裂、染色体についての基本的知識を得る。 4) 遺伝的変異の創成、維持などのメカニズムについて理解することができる。 5) 遺伝的多型を用いた疾患遺伝子探索方法を理解し説明できる。 6) 多因子疾患等のモデルについて理解し、疾患にあてはめて説明できる。 7) ゲノムやそれに関連する新しい遺伝的データおよびその活用法について理解する。 (いずれもDPのAおよびBに対応)			
成績評価の方法 レポート80%、発表・討議20%			
成績評価の基準 成績の評価は、100点をもって満点とし、秀、優、良及び可を合格とする。各評価基準は次のとおりとする。 秀 (90点以上100点まで) 到達目標を極めて高い水準で達成している。 優 (80点以上90点未満) 到達目標を高い水準で達成している。 良 (70点以上80点未満) 到達目標を標準的な水準で達成している。 可 (60点以上70点未満) 到達目標を最低限の水準で達成している。 不可 (60点未満) 到達目標を達成していない。 ただし、必要と認める場合は、合格、了及び不合格の評語を用いることができる。その場合の評価基準は次のとおりとする。 合格又は了 到達目標を達成している。 不合格 到達目標を達成していない。			
授業計画・授業及び学習の方法・準備学習及び事後学習のためのアドバイス 1. 遺伝情報伝達のしくみ 遺伝情報伝達の基本的な仕組み 2. 遺伝情報と表現型 3. 細胞周期と細胞分裂 体細胞分裂と減数分裂 4. 遺伝子と染色体 染色体の構造、常染色体と性染色体 5. 染色体異常 染色体レベルの異常と表現型への影響 6. 遺伝的多様性 DNAレベルの変異 7. 集団の遺伝情報の変化 ヒトの起源、進化、集団/種間の違い 8. 連鎖解析 連鎖解析の基礎 連鎖解析の基礎概念 【授業及び学習の方法】 講義・演習方式で行われる(対面または遠隔授業)。ただし、状況によりレポート課題の提出をもって講義に置き換える場合がある。 【自学自習のためのアドバイス】 【準備学習】 教科書・参考書を事前に読み、疑問点について担当教員に質問できるように準備する。(15時間) 【事後学習】 教科書・参考書を用い、重要なポイントを理解しておく。(15時間)			
教科書・参考書等 教科書は指定しない。担当教員が適宜紹介する。			
オフィスアワー			

2026 医学系研究科

金曜日16時から17時

それ以外でも在室時に随時対応できますが、念のためメール連絡してください。

履修上の注意・担当教員からのメッセージ

本授業科目は日本語で実施する。

教員の実務経験との関連

国内外での分子遺伝学に関わる研究機関での研究員としての勤務経験があります。また、臨床においては遺伝カウンセリングを20年以上の実務経験があります。こうした実務経験をもとに、医学研究や臨床実習につながる講義を行います。